

---

# クロエ図書館

仮名文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロエ図書館

### 【Nコード】

N8510L

### 【作者名】

仮名文

### 【あらすじ】

外界から隔てられた場所に存在する、広大な内部を秘めた図書館。ありとあらゆる書物が収められた其処には、手にした者のどんな願いでも叶える唯一無二の魔道書が納められているという。これはそんな図書館の館長、引いては魔道書へ、ひよんな事から成り代わってしまった少女と、特に目的もなく傍らに居続ける花竜、そして図書館に様々な思いを抱いて訪れる人々の物語である。

## 或るお茶の時間にて

どこまでも続く、白い壁と木目の床で形成された室内。

そこへ整然と並べられた棚には古今東西ありとあらゆる蔵書が収められており、オレンジ色のランプが棚と棚との間の壁や通路に面した棚の側面にぼつりぼつりと備え付けられている。

数だけ見れば十二分に明るいランプ、けれども古ぼけた光など幾らあっても仕方のない話だ。

蠟燭のように震える影が出来る事はなくとも、ここまで薄暗く加えて無尽蔵にある本棚相手、特定の本を見つけるのは至難の業であるうし、運良くありつけたとしても至るまでの間に追った文字で確実に視力を落としてしまっただろう。

高所まで手を伸ばせる滑車付の梯子が親切面で存在しているようが、これらの不便さを解消出来るほどの利便性は感じられなかった。

そんな不親切極まりない本棚群にほぼ占拠された建物の奥、柔らかな光の差し込む一角では、不便も利便も何処吹く風というていで、一人の少女がお茶の時間を楽しんでいた。

青いリボンで後ろに纏め上げられた髪はクロムイエロー。

長い睫毛に縁取られた大きな瞳はセレストブルー。

ほんのりと朱の滲む肌は滑らかで、アンティーク調のティーカップに触れる唇は柔らかな薄紅。

眉は穏やかに曲線を描き、鼻筋の通った輪郭は幼さを残しながらも少女が徐々に成長していく様を綺麗に形作っている。

同じく成長過程で女性特有の丸みを帯びつつある身体は、白いブラウスと青いスカーフ、青を基調にしたチェック柄のスカートと茶色いブーツで固められている。

飾りつ気のない木造の円卓に飲みかけのティーカップを置いた少女は、温かな明かりが降り注ぐ割に白しか見えない窓の光景を留めつつ、ティーカップと同種の皿からクッキーを一枚抓むと一口頬張り。

「うーん、やはりプリマさんの手作りクッキーは絶品ですね。程好い甘さにしつこくないバターと玉子の風味。この前頂いたチョコチップ入りも見事でしたが、シンプルゆえの技の光り様は中々どうして」

右手で欠けたクッキーを掲げては、左手を頬に添えてうつとり溜息をついた。

まさに至福の一時、といった具合の少女。

対し、背後の本棚の陰から不思議そうな男の声が訪れた。

「にゃ？ りりあ、そのクッキーを作ったのはプリマじゃないデス。プリマはマダムだから自分の手は汚さないデス」

「自分の手を汚さないって表現はどうかと思いますけど。ええ勿論分かっていますよ、エニグマ。それでも持って来て下さったのはプリマさんですから、プリマさんの手作りクッキーで良いんです。プリマさんがいらっしやらなければ、どこの誰が作るうともわたしの口には入らないでしょう？」

クッキーを褒め称えたくせに作製者を蔑ろにした少女は、彼女の事を「りりあ」と呼んだ人物を振り返り、熱弁の名残のように食べかけのクッキーを翳してみせた。

これをエニグマと呼ばれた人物がぱくりと迷いなく口にしたら、少女・リリアは花も綻ぶ微笑みを浮べた。

「美味しいですか？」

「……………フツ」

素っ気ない感想を述べた自身の口周りをべろりと舐めるエニグマ。ついでに差し出されたままのリリアの指を舌先で突くと、笑みを引つ込め目を丸くする少女へ口角を上げてみせた。

「りりあの方が美味しそう」

アクセントにじゅるりと唾を嚥下する音をつけて。

危険極まりない言葉を吐いたエニグマだが、その容姿はリリアと比べるとそれ以上に異様であった。

猫背気味の長身瘦躯やシルバーグレイのギザギザした長髪に散る色とりどりの花、赤と黒を基調とした厚着の服に引つ掛けられた数々の楽器は、まあ良しとしても。

不可思議な紋様を刻む布に覆われた目許から伸びる鼻先は、グラスグリーンの鱗を持つばかりか、長い亀裂の合間に鋭い牙が見え隠れさせているのだ。

袖口から覗く手にしても同じ鱗に覆われており、細く長い指先の爪すらも人間にはない黒の鋭さを持ち合わせていた。

凡そ、リリアと同じ種族ではないと一目見て分かる風貌、たとえばワニかトカゲか、はたまた御伽噺に出てくる竜が適当か。

けれども恐ろしい頭部を持つ男を前にして、捕食を匂わせる宣告を受けたリリアは、きょとんと目を瞬かせるばかりで逃げもせず。

それどころかもう一度微笑んでは、隣にある椅子を手で示してエニグマへ座るよう促した。

「わたしを食べてもエニグマのお腹は膨れませんよ。それよりもほら、一緒に紅茶を飲みませんか？」

「……………試してみなくちゃ分からないデス」

「試さなくても分かりますって。だってエニグマ、そんなにお肉食

べないでしょう?」

あっさり言つてのければ、エニグマの猫背の肩が更に低く下がっていった。

渋々隣に腰掛けたエニグマはリリアの淹れた紅茶を受け取ると、器用に一口こくりと飲み込んだ。

「にゃあ……りりあがちつとも怯えてくれなくて、えにぐまはとっても不愉快デス」

「そうですか。では、お詫びにクッキーをお一つ」

「一つと言わず、全部寄越すデス」

「いいですよ。はい、召し上げれ」

リリアは円卓の中央からずいっとクッキー皿をエニグマの方へと寄せた。

につこり笑えば目を隠していても見えるという布越し、エニグマが困惑した気配を滲ませた。

「……やっぱり半分こするデス。えにぐまはそんなに食べられないデス」

黒い爪がリリアとエニグマの間までクッキー皿を押しやる。

「そうですか? では仲良く半分こにしましょうか」

「えにぐまはりりあが嫌いなので仲良くは嫌デス」

「それは残念。でもわたしはエニグマが好きですから、ここはやはり仲良く分けましょう?」

猫背でも座っても、どの道見上げるしかない長身をリリアは上目遣いに見つめた。

これにぷいっと顔を背けたエニグマは、もごもご口を動かした末に小さく呟く。

「……やっぱりえにぐまはりりあが大嫌いデス」

「わたしはエニグマが大好きですけどね」

クッキーを分けつつしれっとリリアが口にすれば、背けられていた鼻先が勢い良く戻ってきた。

拍子にエニグマの頭に散っていた花が手に落ち、鱗に覆われた口が開く直前、リリアはコレを素早く彼の口に押し当てた。

「お話の続きはお茶の時間が終わってからにしましょう。だってわたしたちの時間はまだまだたっぷりあるんですから——嫌になるくらい」

最後は姿勢を正してげっそりと吐き出したリリア。

暗い思いを遮るように、エニグマの口に押し当てた花を自身の口元に置いては、馨しい花に目を閉じる。

闇の中、馳せる記憶はこの場所、クロエ図書館に知らぬ内迷い込んだ日の事。

それは遙か遠い昔の出来事であると同時に、リリアにとってはつい最近の話でもあり。

リリアの名が、その身体が、すっかり変わってしまった始まりの時でもある。

今はもう悲嘆に暮れることさえなく、目覚めた途端に付随してきた役割への不満もない。

しかしそれでも——

——館長、クロエ館長ってば！　いないの、ねえグリモア魔道書！

「にゃー。りりあ、りりあの事、呼んでるデス。あの貧相な声は迷

子っぱいデス」

「……そうですね。はあ。あんなに叫ばなくても聞こえていますって」

エニグマとのやり取りを経、すっかり冷めてしまった紅茶を煽ったりリアは椅子から立ち上がると、何処に在ったというのか、年季の入った分厚い本を小脇に抱えて声の方角向いて吐息を一つ。

「それでも、お茶の時間は静かに在りたいものですね」

心を込めて愚痴った唇を引き結び、本を開いては勝手に胸の高さで浮き出したそれへ、たおやかな手を翳した。

魔道書——そう呼ばれる唯一無二の書を前にして、クロエ図書館館長としての命を紡ぐ。

『我が名は魔道書。<sup>グリモア</sup>一の書にして其を統べらん。只今は招かれざる客の迷いを招く者なり——』

## 或るお茶の時間にて（後書き）

初めまして仮名文と申します。

「或るお茶の時間にて」はプロローグのつもりです。

さわりの本文でしたがご覧の通り、エニグマの容姿は人間ではありません。

これから登場する予定の人物たちもエニグマ同様、ヒトではない人ばかりになります。

生粋の人間は登場しません。予めご了承下さい。

特に起伏のある物語ではないので、のんびり楽しんで頂ければ思っております。

## 彼女の経緯 その1

ソレに気づいた時、リリアの両足は意思を待たずに走り始めていた。

次いで前方に飛び込めば、さして間を置かず今までリリアが居た場所を通つて響く轟音、伝わる震動。

橙の淡い光が滲む暗闇の中を振り返つても、散乱した本や立ち込める埃など視認出来なかったが、何かが先程まで横に眺めていた本棚へ激突したのは確かだ。

「くっ……」

至つて普通の運動神経しか持ち合わせていないリリアは、咄嗟の動作で生じた痛み顔に顔を顰めつつ、それでも出来るだけ素早く立ち上がると脇目も振らず前方へと駆け出した。

背後のソレが態勢を立て直す前に逃げなければと焦りを滲ませながらも、一方では冷静にこんな事を思っていた。

（死ぬ、でしょうね。たぶん間違いなく。あんなモノに狙われて平々凡々のこのわたしが無事で済む筈ありません。……ああ、これがクラスの間違った相手なら、どんなに楽しかった事だろうか）

走馬灯のように駆け巡る在りし日の思い出——というか、つい先日、の事を走る脳裏に浮かべたリリア。

汗だくの割に落ち着いた溜息を一つ、荒い呼吸の合間に吐き出した。

風光明媚な田舎よりは人通りが多いものの、都会というには華やかさに欠ける、とある町。

ほとんどの施設が一軒ずつで済んでしまうその中に、リリアの通う学校はあった。

建物自体は一つでも学習内容は十二あるクラスでそれぞれ違い、理解力に応じて一クラスずつ上がっていき、乗じて学習量が一気に増えるクラスも二段階存在する。

そんなクラスを境にして建物の内部は三つに分かれており、リリアがつい先日移動したのは一段階目を経たもう一つ上のクラスである2 - 9。

大体十四、五歳前後の少年少女たちが所属するクラスで、リリアの齢も丁度十四を数えていた。

クラスの進み具合を見ればリリアの有する知識量は極々普通であると言えよう。

けれどもその顔はお洒落に神経を尖らせる同年代からしてみれば、地味の一言に尽きる。

明るく綺麗なクロムイエローの長い髪は、がっちりとした二つの三つ編みに固められており、化粧つ気のない顔の半分近くは、四角い黒の極太フレームの分厚い眼鏡に覆われている。

着ている服とて味気ない赤茶のスカーフに同色のチェック柄のスカート、白いブラウスに茶色いブーツで、幼さの残る輪郭がなければ行かず後家扱いされそうな雰囲気醸し出していた。

きつとどこかのパーティーに出席でもしたなら、壁の花になれる事間違いなしだろう——と誰もが思う少女。

それが周囲に置けるリリアの評価の全てであり、リリアも望んでその評価を受け入れていた。

だが、どこにでもお節介というか、自分の美意識を押し付ける者はいるもので。

「貴方、リリアさんと仰るのよね？」

リリアがクラスを移動して間もなく、休み時間にそう言って近づいてきたのは少々キツイ性格を思わせる顔立ちの少女。

「ええ。まあ、はい。そうですね……」

今し方自己紹介を終えたばかりだというのにわざわざ名前を訪ねてくる相手へ、眼鏡の奥で眉を寄せたリリアは内心、面倒臭い方に捕まりましたと吐息を零す。

金髪碧眼、見るからにキラキラした自信に満ち溢れている者ほど、リリアにとって好ましくない言動をしてくると今までの経験からよく知っていたために。

案の定、後にアンジェリカと名前が判明する少女は、自己紹介もなく親切心溢れる表情をコロリ嘲笑混じりに変えると、続いてこんな事を言ってきた。

「そんな格好ではお友達も出来ないでしょうから、私のグループにいらっしやいな。何だったら、ボーイフレンドの一人か二人、見繕って差し上げてても良くってよ？」

「……………」

（参りましたね。この方……想像以上に面倒臭い上に鬱陶しい上に、とんでもないくらい困ったさんですよ）

リリアが分厚いレンズ越しに冷めた視線を向ければ、これをどう歪めて受け取ったのか、アンジェリカは同年代にしては豊満なバストを強調するように胸を逸らすと、自信満々に微笑んでみせた。

完全に自分に酔っ払った彼女の目には、他者への蔑みだけが残されており。

「結構です」

「……はい？」

こつこつ手合いはさつさと切るに限る。

そう決断を下したリリアは、もう一度、今度はしっかりとこのおめでたい頭に届くよう噛み砕いて告げた。

「ご遠慮申し上げます。ご指摘の通りわたしにはお友達と呼べる奇

特な方はいたためしがありませんけれど、それを格好のせいに出来るほど明るい性格はしておりませんので、あなたのグループとやらに入っても双方にとつて碌な事にならないと思われます。ついでに付け加えさせて頂くなら、異性の恋人も今のところ必要性を感じておりません。ご配慮は痛み入りますが、またの機会にして頂けるとても助かります」

簡潔に要約すれば「構わないで下さい」と言つたところだろう。

これを馬鹿丁寧な長台詞で包んだリリアに対し、アンジェリカは数秒の時間を要してから何かに気づいた様子で、みるみる内に怒りで顔を染め上げていった。

「ああ、そうですか！ またの機会ですって！？ そんな機会、二度とあるわけありませんわ！！ 全く、人の親切を踏み躪るばかりか馬鹿にして」

（馬鹿にした覚えはありませんけど。ただ、面倒臭い相手だと思われるように長く語ってみただけで）

激昂するアンジェリカを見つめながら、心の中だけで応じてみせるリリア。

何事が続けるアンジェリカの声を聞く素振りや、別の事に思考を巡らせていく。

（機会がないのは願ったり叶ったり、在り難い話ですが……それにしても親切とは、この方などの辺りを指しての言葉なのでしょうかな？）

アンジェリカの齢は少なく見積もってもリリアより一つ上。

かといって敬われるところが特になく、誘いの言葉にしても上品染みた口調の割には品がない。

（地味を理由にその方のグループへ誘われる事はまああっても、男性を紹介すると言われたのは初めてです。しかも一人か二人などとどれだけ色欲が強いと思われるのでしょうか）

勘違いも甚だしいと眼鏡の奥で不愉快に寄せられる眉根。

しかしはたと思い直しては、やはり表には出さず胸内でぽんつと

ひらめきの手を打った。

次いで改めて、飽きもせず怒りを雄弁に述べているアンジェリカを見つめると、それと分らないくらい小さく頷いてみせた。

（なるほど。つまりこの方の基準はご自身であり、ボーイフレンドの数も最低一人か二人いるのが普通、というわけですか）

それなら納得できる。

「——ちよっと！ 私の話、聞いていまして！？」

今頃になってリリアの意識が余所に向けられていると察したアンジェリカが机を叩けば、乗じてゆつさと振れる豊かな胸元。

納得するに至る証拠の品をいくつかリリアは目で追ってしまったが、眼鏡のお陰で当のアンジェリカはそんなことなど露知らず。

「ふんっ！ もういいですわ！」

そんな言葉を吐き捨てて、「私のグループ」と表した少女たちの集団の輪の中へと帰って行ってしまった。

けれどもリリアは経験則から知っていた。

もういいと断言する輩ほど、後々無駄に構って来ると。

しかもその構い方というのは大抵決まっております。

早い話がその日からリリアの周りで、いじめらしき現象が起こり始めるのである。

まず最初に行われたのは徹底した無視。

次に始まる明らかにリリアを対象とした嘲笑。

その次は通りすがりに足を引っ掛けるといった軽い嫌がらせ。

典型的なエスカレート形式で進みつつあるいじめの初期段階に対し、リリアが行った事は……特になかった。

そもそもリリアにはクライスメイトに話しかける必要もなかったし、笑い声にしても気にしなれば問題はなかった。

勉強するのに邪魔なだけで。

ただし、物理的な事に関してだけは容赦なく抵抗をさせて頂いた。

引つ掛けようとする足があるならこれ見よがしに踏みつけ、難癖を付ける前に全力で謝罪。

勿論、クラス内などという閉鎖的な場所は選ばない。

物を隠される心配が生じたなら自分から隠しておき、そうでなければ常に持ち歩くよう注意しておく。

続いて起こる黒板等を用いた中傷紛いの攻撃には、完全な無視を決め込んだ。

何せリリアが守らなければならないのは自分の身体と勉強道具だけで、精神面まで嫌がらせにかまけている余裕はないのだ。

傷ついている暇があるなら一日でも早く上のクラスに進み、卒業年齢に達する前までには全科目を網羅しておく必要があった。

でなければ学校を卒業して後の生活の幅が狭くなるばかりなのだから。

物心つかない内に両親を亡くしたリリアは現在、母と交流があったという女の下に身を寄せていた。

特に優遇された事も不遇だった憶えもなかったが、女は時々思い出したかのように「何処か遠くへ行きたい」と言い、リリアはその度漠然と考えたモノである。

自分が自立すれば、離れば、いなくなれば、彼女は好きなどころに行けるのだ、と。

だからこそリリアはここまで育ててくれた女に報いるためにも、彼女のいないところでもしっかり自立出来るよう、周りがどうあれ躍起になって勉強を続けていく。

孤立すら、好都合だという風体で。

やがて訪れる、大した反応を示さないリリアへの飽き。

元々アンジェリカの難癖が始まった行為のため、アンジェリカ自身が飽きれば付随していただだけの連中も、思いの外あっさり手を引いた。

足を踏まれた者として元を正せば自業自得、しかもリリア自身に公衆の面前で謝罪されているため、足を理由に手を出そうものなら十中八九、狭量だとからかわれるのがオチだろう。

場合によってはリリアの無反応を生意気だと取る輩もいるかもしれないが、このクラスの連中にはアンジェリカも含めてそこまでの考えなしはいなかった、というところか。

だからと手の平を返してリリアへ親しくしようとする者もおらず。相変わらず一定の距離を置く状態ではあるものの、積極的な嫌がらせを受けなくて良くなった分、回避に割く時間も必要がなくなり、リリアの勉学は見違えるほどはかどっていった。

嫌がらせを受けていた最中は警戒してあまり近づかなかった閉鎖空間にも入れるようになり、しばらく利用していなかった学校近くの図書館の扉も、この先に何か待ち構えているのではないかという想像も躊躇も要らずに、簡単に開ける事が出来た。

リリアにとってはそれが何より嬉しく、この時になって初めて嫌がらせが終わって良かったと心の底から彼女は思ったのである。

——入館の折に閉めた扉の音が、今生との別れの鐘代わりだったとは夢にも思わずに。

今のクラスに上がる前までしつこいくらいに通っていた図書館は、言うなればリリアの領域そのもの。

頭の記憶以上に身体が蔵書の位置を覚えていたため、久々であるにも関わらず、リリアは真っ直ぐ目的の本棚を目指して歩いて行く。ここでもし、彼女が少しでも視野をずらし広げていたなら、もっ

と早く異変に気づけただろう。

静かである事が基本の図書館とはいえ、就業時間までまだあるというのに何の音もしないカウンター、誰の影もない読書スペース。

学校終わりの時間帯、夕焼けの色が差し込むはずの窓やステンドグラスの、常夜灯にしても明るくい白い光を帯びた陰。

けれども逸る心はリリアから注意力というものを奪い去っており、彼女が何か可笑しいと思い始めたのは、意気揚々と歩いてかなり経った時の事。

それすら久方ぶりの訪問のせいにしては、疑問符に幾度となく首を傾げつつ更に進んで行き。

「……え、と？ この図書館、こんなに広がったのでしょうか」

ようやく立ち止まったのは、足下を照らす光が棚に備え付けられた薄暗いランプの明かりのみになった時だった。

この時になって初めてまともに前方を見やったりリリアは、以降も続くランプの光と本棚の陰、大人三人が並んで歩ける本棚と本棚の間の通路の暗がりの深さを知り、ひくり、口角を引き攣らせた。

「な、何故に？ もしや図書館の企画で騙し絵などを展示しているのでは……」

異様な光景を前にして、常識で考えたモノを口にする。

決して、勉強の合間の気分転換に読んでいた、幻想小説を眼前の現実を重ねたりはしない。

かといって騙し絵案に現実味があるのかと問われたなら、リリアとて非常に疑わしいとは思っていた。

思っではいたが……他に通用する常識が思いつかなかったのだから仕方がないだろう。

それでも苦し紛れに考え続けたならば、ここは夢の中、というメルヘンチックでも割とマシな方向性を見出す事が出来るかもしれない。

——未だかつて、ここまでクリアな夢を見た事はないものの。

兎にも角にもリリアは自身の仮説を証明するため、騙し絵を求め

て歩みを再開させた。

左右に物言わぬ本の背表紙を従え、本棚の終わりと始まりを三回ほど経験。

「……ま、真ん中って長いですね！ 目指すならやはりここは端の方が利口でしょう」

足を止め、無駄に大きな独り言を言つてのけたリリアは、自らの妙な理屈へ頷きつつ、次の本棚の境を左に折れて進んでいく。

今度は左右に、ランプと暗がりを変互に流しながら。

最初は普通速度だったのが、横にも長い通路に顔が強張り始めて徐々に早くなり、沸き起こる不安と恐怖を抑え込むべく引き結ばれた唇が無理矢理笑みを浮べたなら、肩が不自然に揺れ始めて完全な早足となる。

やがて覚える口の乾きは舌をもごもご動かして誤魔化し、手提げ鞆は両腕を振る事がないよう強く胸の前で抱き締められた。

あくまでここはリリアの住む町の図書館であり、走るほどの広さはなく、煩くして良い場所ではない——そう呪文のように自分に言い聞かせる。

得体の知らない場所に迷い込んでしまったという可能性は、全面的に排除し否定し、欠片でさえもその存在を許さずに。

最終的に前のめりになって歩く自分の姿も無視したリリアは、前方の暗がりばかりを睨んでいた目に違う景色を見つけ、眼鏡の奥を喜びに輝かせた。

「ほ、ら。壁……が、在る……では、ありません、か……」

限界に近づいている乱れた呼吸も、通り過ぎてきた本棚の側面とランプの数も、勘違いだと言わんばかりにリリアの足は壁を求めて速度を増していく。

だが、どれだけリリアが否定してみたところで疲労は本物。

鞆を落としても気づけなかった手が壁を触る頃には、全身汗だく、ふらふらの姿がそこには在り。

「ちよ……きゅうけい………しましよ」

折角触れた手を離したりリア、代わりに背中を預けるとその場にずりずり座り込んでしまった。

酸欠で朦朧とする頭を壁に擦り付け、首を逸らして喉を晒し、暗いだけの天井に荒い息を何度もつく。

眼鏡に張り付く前髪を除けるため分厚いレンズを取り払い、髪をかき上げながら今まで歩いていた棚とランプに挟まれて続く道を眺めた。

「……眼鏡のせい、では、なさそう、ですね」

眼鏡越しよりもくつきり見える視界だが、映る景色には新たな発見はなかった。

そう、何を隠そうリアの視力は本来、野暮ったい眼鏡を必要としないくらい良い。

ついでに言ってしまうえばその顔立ちも、地味で通すには難しい代物だった。

崩れてしまった二つの三つ編みを解し、代わりに後ろへ一つに纏めて縛ったなら、薄暗い中ではつきり映し出されるその美貌。

穏やかに整えられた眉毛、長い睫毛に縁取られたセレストブルーの大きな瞳。

トラブルが見受けられない肌はマシユマロのように滑らかで柔らかく、形の良い朱唇は果実のように瑞々しい。

鼻筋の通った輪郭にそれらがバランス良く配置されたなら、いつもの服装も一気に地味から脱却、変えた髪形も相まって理知的でいて優しい印象を与えてくる。

もしもこの場に隠されていたリアの容姿を総評する者がいれば、私情混じりにこう言うに違いない。

食べちゃいたいくらい可愛い——と。

リア自身、そんな自分の外見をよく知っていた。

彼女が四歳の時に眼鏡を勧めてきた、共に暮らす女から、洗脳か

と疑ってしまうくらい散々言われていたために。

曰く、あんた可愛いからコレ付けとかないと、間違いなく犯罪に巻き込まれちゃうわよ、と。

しかし今、どれだけ周囲を見渡しても彼女の他に人の気配は在らず、涼しくなった目元を遠慮なく袖で拭ったリリアは逆に思ってしまった。

（この際、犯罪者でも構いませんから現れて下さらないでしょうか？）

勿論、リリアの住む町の出身者限定で。

そうすればまだリリアには希望が残されている。

ここは確かに現実で、自分は異様だろうが町の図書館で迷子になっただけだ、という。

まあ、相手が本当に犯罪者なら、死に物狂いで逃げる必要はあるが。

仕様もない妄想を働かせて気を紛らわせるくらい、体力と精神力を回復させたリリアは、そんな諸々の妄想を払うように首を振ると、疲れの名残を見せる身体をふらつかせながら壁を支えにして立ち上がった。

逆の手に持つ眼鏡を握り締めながら、もう一度辺りに視線を巡らせる。

（壁には辿り着きましたが……見た目にはあまり代わりがありませんね。どこまでいっても見えるのは本棚とランプ、先の分からない暗闇だけです。一旦戻るにしても元の道を行けるかは不明。混乱していたとはいえ横に逸れたのは失敗でしたね）

見知らぬ場所への緊張から高鳴る胸に喉を鳴らし、眼鏡ごと手を胸の上に置いては壁を背にした右、通常であれば出入り口に抜けられる方向を裸眼に捕らえた。

（残された手段はここを真っ直ぐ進む事のみ。抜けられない可能性も、認めたくはありませんが、この可笑しい空間では在り得るでしょう。それでも）

こんなところで立ち止まってはられない。

「……行きましょう」

誰かに告げるように、自分に告げた。

ともすれば冷静になった分、怯みそうになる心を鼓舞する。

壁についていた手を押し離し、一人立つ身で深呼吸を一つ。

前を捉えた顔を引き締め、出口を求めて一步を踏み出す。

不安ばかりが募る足取りは重く、変わり映えない光景の連続はリリアの力を悪戯に摩耗させていく。

だが機械的な動きでも進めば着実に、今までより前には移動出来ているはずだ。

本棚ばかりを流してきたが、邪魔な眼鏡を取っ払って見やすくなった視界には、本の背表紙の違いがはっきりと見えていた。

進んできた道を思えば膨大量の本ではあるものの、一つとして同じ本がないのは出口を求めるリリアにとって心強い。

無尽蔵でも、やはり終わりはあるのだと分かって。

だが――

ある本棚まで通り掛かったその時、ソレは前触れもなくリリアを襲ってきた。

## 彼女の経緯 その2

最初の一撃を避けられたのは奇跡としか言い様がなかった。

横合いから突進してきたソレを前方に飛び込むことでどうにか回避、無事でいられたリリアだが、同時に次はないとも思う。

自然、死を恐れて生を望む身体は必死に走り出し、反面で恐ろしく冷やかな一部分がちらりと背後を振り返った。

鈍いランプの明かりを頼りにソレの正体を探り、判った事といえ  
ば、激突の衝撃からソレが未だ回復出来ない様子と、

（……大きい。低く見積もってもわたしの四倍近く、ですかね）

奥行きはあまり測れなかったが、視線を前に戻したりリアの目測  
にほぼ間違いはないだろう。

（そしてたぶんあれば、四つ足の獣。それも凶鑑で見るような大型  
の草食動物とは違う……）

脳裏に再生されるのは前方に飛び込む直前、視界の端が捉えた大  
まかな形。

獲物を押さえようと伸ばされた前足の鋭い爪、大きく開かれたあ  
ぎとから生える漆黒の牙。

（近いのはイヌ科かネコ科……どちらにせよ、肉食獣でしょうね）

もう一度、自分の予測を確認するため、再び荒くなりつつある呼  
吸を横へ向けたリリア。

—— だったのだが。

（不味いっ！）

ゆらり、ランプに形作られた四つ足の陰影が立ち上がり、そして  
そのままこちら目掛けて走ろうとする動きで巨体が軽く沈み。

「ひっ」

最中、現れたソレの目と合い、襲い来る混乱と恐怖からリリアの  
身体は走るのを止めて半身をそちらへやった。

ランプとは明らかに違う光を放つ、何重もの虹彩を持った、頭部

の真ん中を縦に裂く一つ目。

最初の攻撃を避けられた、ソレの存在に気づけた光明——だが。

「っ——！」

一気に距離を詰めて頭から突っ込んでくるソレに対し、リリアの身体は咄嗟に、今度は丁度通り掛つていた横の通路へ飛び込んだ。

強張った足が着地を怠り左肩を強く打つ。

生じる痛みにかまける暇なくすぐさま仰向けになれば前方、壁と本棚の側面のランプを受けて、初動の勢いそのまま通り過ぎるその巨軀、その輪郭は。

（……知らない。知るわけない！　こんな……　こんな化け物なんか……）

こちらを一瞥もせず、風のように本棚の間を去っていったソレは、リリアの常識から悉く外れた存在であつた。

信じられないくらい大きな体軀に一つ目は勿論の事、折れ曲がつた黒い耳の先端は炎の如き揺らめきを帯び、胸から下に続くやはり黒い身体は大小様々な蛇の尻尾を何本も密集させて蠢いていた。

だというのに存在感は全くと言って良いほどなく、無論、ソレ特有のニオイや鳴き声も嗅覚や聴覚には引つ掛からない。

その他の五感に得られるモノがあるとするとするのなら、走るソレが起こした風と、圧倒的な視覚への暴力だけだ。

「ど、して、此処にあんなモノが……？　百歩譲つて、いいえ、あんな化け物があるくらいですもの、此処がわたしの知る世界ではないのは歴然……　いいえ、いいえ！　知らない世界という認識は、あんなのが生活圈に居て欲しくないだけです。……けれど、それにしただって此処は図書館のはずでしょう？　何故、あのような生物が……」

口にしたのはどれも、落ち着きを失くした思考そのままの言葉。

しかして声に出す事で次第に衝撃を和らげるのに成功したりリリアは、今頃になつて痛む肩に気づくと、これを押さえてゆっくりとその場に立った。

「……考えても埒がありません。暇ありません。折角拾った命です。……いつまで持つかは分かりませんが」

あの化け物が向かったのはリリアが目指していた方角。

それでも当面、目標とすべきは同じ方向であるため、本棚をいくつかずらした通路を用いて歩いていく。

今のところリリアが知る化け物の攻撃方法は、直進による体当たりのみ。

当たれば一発でぺしゃんこだが、単純明快な攻撃ゆえに備えておくのは容易karou。

待ち構えられていれば話は別、逃げられはしないものの、本棚をジグザグ縫うようにして歩けばその確率はぐんと低くなる……はずだ。

なんとも頼りない可能性にかけて行かねばならぬ身、自然と肩を押さえる右手に力が込められたなら、硬質を感じてリリアの視線がそちらへ落とされた。

肩を離れた手の中、握り締められた分厚い眼鏡が其処にはあり。

「ああ、眼鏡ですか……そういうば、いつの間にか落としてしまったね。本当に大事なのはあちらなのに、どうしてわたしはこれを握り締めてここまで——」

来たのでしょ、という自嘲は最後まで吐き出されなかった。

ランプの光、あるいは天井の闇を映すだけの眼鏡に、先程回避したばかりの一つ目を捉えたばかりに。

停止一瞬、急ぎ振り返り見上げたリリアは、前方へやり過ぎたはずの化け物と同じ姿を後方の、それも本棚の上に見つけては「ははっ」と小さく笑った。

「嘘、でしょう？ 幾ら速いといっても、まだそこまで時間なんか経っていないのに……後方から？ あんなのが何匹もいる、と？——しかもっ！」

否定したい現実の積み重ねに、本棚の上から化け物が跳躍しても動けなかったリリアは、大きな割に重みのない巨体の下へ押し倒されて組み敷かれ。

「ち、地上を行くなら行くで、移動手段はそれだけにして下さいよっ。ほ、本棚の上なんてそんな、猫みたいに立体的に動かなくてもいいじゃないませんか……！」

下方、身体を固定するよう這わされていく蛇の感触にリリアは不快を抱く事も出来ず、笑みに麻痺した顔が近づく一つ目と牙、生温かな吐息を為す口を迎えた。

ぐりっ、と両肩に添えられた前足の内の一方が踏み躪れば、狙ったとは思えなくとも打ち付けた肩に増す痛み。

「く、あつ……」

滲む涙に苦悶を浮べてリリアが仰け反れば、上向いた喉を柔らかな舌がねとりと舐め上げた。

肌の味を確かめるに似てその実、皮膚の下に脈打つ血潮、肉の弾力を確かめる風体で。

（冗談、キツイですって……）

どうもこの化け物、猪突猛進な先程の個体とは違い、獲物を甚振る趣味があるようだ。

歯を食いしばったリリアが涙を浮かべながら睨みつければ、これをせせら笑う動きで化け物の一つ目が彼女の眼前まで寄ってきた。

死を目前にした獲物の感情を肴にする、そんな素振りにリリアは。

「この悪趣味……！」

痛がる様子を参考にした化け物が左肩へ重点を置いたためか、抜けやすくなっていた右手を振り上げると、握り締めていた眼鏡を思いつきり、目の前の一つ目に突き立てた。

存在感の薄い化け物だが効果はあったらしい。

これにより目を閉じた化け物が怯めば、乗じてリリアの身体に蠢いていた蛇の尻尾が緩んだ。

「う、あ……くっつ！ 気持ち悪いじゃないですか、変態……！」

極度の恐怖体験から心身ともに解放を得たリリアが、それまで分からなかった怖気の走る触感に一度だけ化け物を蹴った。

反動で身体を引つ繰り返しては、絡みつく感触を消すように服を払いながら立ち上がり、勢い良く駆け出していく。

思わぬところで役に立った眼鏡は、依然として化け物の目に刺さったまま。

逃げるなら今だと、それでもふと思いつき立ち背後を確認したリリア。  
「んなつ……！ ひ、一つ目じゃないとか、本当にもう、完全な化け物でしょうっ！？」

セレストブルーの瞳に映る、同じ身体に宿った、潰れた目と同じ形の無数の眼。

そのどれもが一樣にリリアの姿を捉えたなら、熱い視線を遮るように近くの本棚を左に折れた。

側面に取り付けられたランプを二つ三つ過ぎたところで、何かが本棚を叩く音を後ろに聞く。

逃げに専念すれば良いところを肩越しに見やったりリリア、数多の眼を爛々と輝かせた化け物が、獣の前足を限りなく人間に近づけた手で本棚を支えとして掴む姿を目撃する。

もう一方の手が押さえるのは、眼鏡に潰されたあの一つ目。

相変わらず存在感がない化け物ではあるものの、人間を髣髴とさせる恨みがましいこの雰囲気は何だろう。

思わず湧き起こる罪悪感と同情の念に、いやいやあのままでは死んでいましたから私、と心の中で首と手を振ったりリリアは、本腰を入れた逃げを再開するために前方へと視線を移した。

と、前方にランプとは違う一つの光。

「……ん？ しかも何だか近づいているよう、なあっ！？」

考えるより先に、このままではぶつかる判断した身体が側面から本棚の前へ躍り出れば、その身体を追ってきた巨大な手がリリアの髪を撫でた。

拍子で解れたリボンの無残な姿を横に散らせたリリアは、危うく

人の手を持つ化け物に殺されかけたのだと知って息を引き攣らせた。ついでにクロムイエローの長い髪を払うように振り向いたなら、そんなリリアへ更なる追い討ちをかけようとしていた化け物が、横合いから突っ込んできた同じ化け物に追突される場面を目の当たりにする。

衝撃音は聞こえなかったが、吹き飛ばされた化け物と勢いを殺せない化け物の、通路を擦れる音は果てしなく続き。

「え、えっと……………ら、ラッキー……………」

動きを見るに猪突猛進のあの化け物は、最初に出くわした奴と見て間違いない……………が。

「…………真っ直ぐ行ってから、左に折れてまた真っ直ぐ行って、それからまた左に折れるかして真っ直ぐ突き進んで」

そして途中で左にリリアを見つけ、また真っ直ぐこちらへ向かってきたのだろう。

仲間（仮）の姿も見ずに。

指差し確認で一直線移動の化け物の動きを想像したリリアは、なんと間違った行動に少しだけ頭痛を覚えた。

対峙すれば即死を匂わせる相手、恐怖心は未だ持ち合わせてるものの、真面目に怯える自分が可哀相で仕方ない。

幾ら化け物でも、あんなのに殺されては末代までの恥な気がしてきた。

まあ、ここで死んでしまったら、その末代さえリリア止まりで終わってしまうのだが。

「兎に角、今の内にさっさと逃げ……………られない！？」

身を翻して先へ進もうとした矢先、前方から数多の目が下に一つの目を従えてやって来た。

どうやら接触した事で仲間割れもせず、獲物を一にする関係から結託したらしい。

一頭分にしてもリリアでは物足りないだろうに、それほどまでに

飢えているのか、はたまた数多の目を出現させた化け物の恨みを一つ目も一緒になって晴らそうというのか。

にしても、えらく遠くからのご登場、一つ目にしては遅い動きである。

推測するに、距離が遠いのはリアの移動を予測し余裕を持ったためであり、動きの悪さは背中に数多の目を乗せているせいだろう。もっと言えばそれはすなわち、騎手を得た事で一つ目にいらん知恵が付いてしまった事を意味していた。

何せ先程より遅いとはいえ、一つ目の俊足は今もリアより早く出来ているのだから。

悠長に分析している場合ではないと、もう一度身を翻したリアは走り出し、すぐさま角を右に折れた。

棚の側面を三つほど過ぎてまた右に折れ、足を止めて息も止め、棚にへばりつきながら重くなった分よく響く一つ目の足音に耳を傾ける。

逃げてきた三つ向こう、リアの後を追って曲がる音を聞き、分析の正しさに舌打ちをしたようになってきた。

これを唇を噛む事でやり過ごしたなら、今度は棚伝いに側面へと回った。

薄くとも影を作るランプの下で影を消し、更に息を詰めたなら反対の側面を通る足音。

動く時を見誤ってはならない。

一つ目、もしくは数多の目の化け物だけならば今動いても問題ないだろうが、騎乗している分、相手の視界は広くなってしまっている。

そんな中で不用意に動いたなら、確実に見つかってしまう。

(……彼らがこちらに来てしまえば、この警戒も無駄ですが)

化け物たちが今いる通路を右に折れてしまえば、逃げ場のないリアの居場所はすぐに判明する。

相手の行動に左右される未来を嘆きつつ、過ぎ去るよう祈る瞳が

静かに閉じられた。

心音が煩く鳴り響く闇の中で、リリアを探す足取りが次第に遠く  
なっていく。

ともすれば自分の気が遠くなっていくような錯覚にリリアは急い  
で目を開くと、確かに違う方向へ進んでいく音を聞いた。

ほっと安堵の息を零しつつも、警戒はしたまま、化け物たちとは  
逆の方角へと一步を踏み出した。

顔だけ化け物たちの進行方向へ逸らした状態で。

「……………え？」

すると足下、何か柔らかいモノを踏んでしまったリリア。  
まさかあの足音は陽動だったのかと、慌てて前方へ視線を巡らせ  
るがそこには何もいなかった。

けれども感触は未だ足裏にしっかりとした弾力を主張しており。  
次いでぱくつと何か温かいモノに足が包まれた。

痛みはないが湿ったソレに頬が引き攣り、下降した視線が今度こ  
そその正体を認めた。

「……………何ですか、コレ？」

認めたはいいが、よく判らない。

判っているのは感触通り、化け物たちとよく似た黒い真ん丸のボ  
ールに、リリアの右足が爪先から足首まで包まれている事のみ。

試しに足を持ち上げてみれば、靴の装飾とでもいうように付いて  
くる真ん丸。

縦に振っても横に振っても、ぐるぐる足先を回しても、ボールは  
くっ付いたまま。

「……………えいつ」

痺れを切らしたリリアは、可愛らしい掛け声を一つ。

しかしてその行動は自分のダメージも考えない荒々しさで、背に  
していた本棚の側面をボールごと蹴りつけるという代物であった。

ボールが衝撃を吸収してくれたらしく、ダメージもなく音も立てずに済んだリリアは、ついでに件の真ん丸も目論み通り取れて万々歳——とはいかず。

「……この、物凄く申し訳ない気分は何でしょうね」

蹴りつけた足を側面から離れた瞬間、どさりと形を崩して落ちたボールに嫌な気分を味わった。

つついしやがんで経過を見守っていれば、元の丸さを取り戻したボールが独りでに回り。

ワン！

短く一声、そう鳴いた。

いや、そう鳴いたようにリリアには見えた。

黒いボールの三分の一に現れた横の亀裂が、実際に聞こえる声なしに、そう鳴いたのだと。

「くっ！」

思うが早いか、リリアはボール然の生き物に手を伸ばすと、痛む左肩をおして両腕でそれを胸に抱いた。

次に立ち上がったのは背後、進むべき方角へと音も気にせず走り出す。

その視界の端に、ボール然の仲間の声なき声を聞きつけてであるう、一時はやり過ごせたはずの、二対の化け物の向かってくる姿を捉えながら。

「ああもう、一難去ってまた一難ですか！？ わたしが一体、何をしたと仰るのでしょうかっ！？」

隠れる必要が無くなった分、苛立つ心のまま叫ぶ。

腕の中の黒い物体を見て、とりあえずコレを蹴ったのが悪かったのだと思い。

リリアの胸中を知る由もないボール然が、ぱくつと今度は右腕を食んできたなら、しゃぶりつく様を内で感じ鳥肌が立った。

「——って、そーいえばどうしてわたし、この変な生き物抱いて逃げていたのでしょうか？ どう考えたってあちらの陣営でしょうにっ！」

言うなり、食まれた右腕をぶんぶん振り回して走るリリア。

足の時同様離れないボール然を受け、増してパニック状態に陥ったなら、薄暗い前方が真っ黒な影に覆われたのを視認、後ろを見やっ

つた。その原因、眼前に迫る一つ目と数多の目の光があれば「ひいつ」と喉が鳴り。

「もうっ、いやああああああああああっ！！」

刹那、何故か緩んだボール然の食む力も知らず、肩の痛みも忘れたりリアは左手で柔らかな球体を掴むと、振り向き様に一投。

命中したものの威力はさほど望めず、元より期待していなかった身体はバランスを取って前傾姿勢を維持。

そのまま視線を前に戻すと。

「ぎゃあうっ！？」

続くはずだった本棚と本棚の間がいきなり黒に埋め尽くされていた。

あまりの事に悲鳴が詰まれば、みっちり壁のように重なった多数の黒がボール然と同じようにぐるりと回り、鳴く変わりに縦に生じた亀裂が開かれて、背後の連中と同じ目玉が光り出した。

「ふうっ……！」

壮絶な光景を目の当たりにし、滲む涙に走る方向を右へと切り替える。

最早リリアには、冷静に紡げる思考は欠片も存在しなかった。在ればきつと、気づけたはずである。

化け物たちの動きが、今彼女が走る通路を境にしてぴたりと止まってしまった事に。

誰も、追って来てはいない事に。

ゆえにリリアは横の通路を走り切り、壁を見つけては背後を探ろうとして、くるり反転。

「え……？」

ようやく知った追跡者のいない逃走劇に、余波で後ろを数歩歩いた背中が本棚をとんと叩いたなら。

本棚の上、不安定な位置に置いてあった、荘厳な装訂が施された分厚い本が今。

その硬そうな角を下に向けて勢い良く落っこち。

「ぐげっ」

丁度真下にいたリリアの脳天へ見事に沈んだ。

火花散る視界、眩む痛みの中、ひき潰された蛙の如き声を発したリリアは、意識を失う直前に自身を襲った凶器を目撃。

（一生懸命逃げたのに……結末がこれって酷すぎませんか？）

末期を予感したりリリアの内なる問い掛けに対し、応える者は誰もいない――

## 葬送の花、めざめのうた その1

あなたのなまえをおおしえく下さい  
わたしのしらないそのなまえを

それはきつと はるをことほぐことばなのでしょう  
それはきつと なつをいろどることばなのでしょう

めぐるきせつのうつりかわりに  
わたしはとむらうはなをおくります

うたもうたいましょう  
はなむけのうたを

それはあきのみりをよろこぶににて  
それはふゆのねむりをみちびくににて

あなたのおもいでを  
はなやかにみたすから

どうぞどうぞ いついつまでもおやすみください  
どうかどうか いついつまでもやすらかに

わたしはいつでもあなたのおそばで  
あなたをしのんでうたいます

みしらぬあなたよ わたしにそのなをおきかせください  
とおいそらゆく おんみの みなを

ちをはうばかりのこのわたしに  
てんもおおげないこのわたしに

あなたをおもい なみだし いのるためのなまえを

わたしにだけ おおしえください

\*\*\*\*\*

目覚める間際、浮上する意識に合わせて視る夢がある。

起きてそれを覚えているかは別としても、リリアが音として聞いたその旋律は穏やかで優しく、それでいて少し物悲しく切なかった。何か、とても大切なモノを失くして、けれどもそれが何だったのか、思い出したくても思い出せない——そんな気分させる曲。

付随する詩は誰かの葬送を語りながら、自身の救いを求めるようでもあり。

——が、しかし。

(……曲も詩も、雰囲気だけは良いのに。……誰ですか、この

酷い音痴の方は?)

ぴくり、薄皮一枚向こうにある現実で、自分の眉毛が微かに動いたのが分かった。

一瞬、共に暮らしている女の姿を浮べたりリアだったが、彼女は  
その昔、歌で食べていた経験があると言っていたし、実際に目の前で歌って貰った事もあった。

聞いた者全てを虜にするという謳い文句は若干誇張が入っていたものの、食べていけるだけの歌ではあると、芸術に疎いリアでも思ったものである。

ならばこの、めったやたらに狂いに狂いまくった、破壊的な超音波混じりの歌声は誰のものなのか。

(あ、止まりました。と思ったら演奏はまだ続くのですね。歌がなければ良い曲というのが何とも……………そういえばあの歌声、男性のよう、でしたが)

思うなり、一気に覚醒する頭。

女二人暮らしに異性の影はなく、よって眠るリアの傍に男がいるのは異常事態だった。

経緯はさっぱりだが、悠長にまどろんでいる場合ではない。

そうして無理矢理目を開けたリアは、胸の上に組んでいた手を横へ置いて支えにし、急いで上半身を起こすと。

広がるお花畑の光景に、焦っていた理由も忘れて目を丸くした。

「あ、え……………」

赤、白、黄色、紫、青。

降り注ぎ、リアの身体を包む、様々に色づいた花の数々。

これだけあってもむせかえる甘さはなく、鼻腔を通って染み入る香りは安らぎに満ち満ちていた。

ほう、と知らず知らず吐息が零れ、訳も分からぬまま右手の平を上にし軽く腕を伸ばす。

はらりはらり、降る花の出所を探るべく仰ぎ見れば、それは宙から何の前触れもなく現れ、落ちていく。

形を保つ薄紅の花を追い、視線が下を向くと、開いた手の平にふわりと軽い感触。

包み込むよう手に取り、薄紅の花びらを親指で撫でてみた。

「本物……それはまあ、そうでしょうけれども」

特に疑ってはいなかった確認を口にしたリリアは、現在の己の状況を把握するべく、意識を失うまでの事柄を順に思い出していった。久しぶりだった図書館の異変、どこまでも続く本棚の通路、見たことのない化け物との追いかっこ。

そして――

頭に喰らった、分厚い本の強烈な一撃。

（意識を失った原因はアレでしょう。……よく、生きていましたね、わたし）

痛みはもうなかったが、あの時擦れなかった分を取り戻すように、リリアの手がクロムイエローの頭を撫で撫で。

（頭はへこんでいないようで何より、ですけど。では此处は一体どこなのでしょう？ 倒れた本棚の前ではありませんし、宙から花が溢れてくるあたり、どう明るく考えてもわたしの知らない世界には違い不是吗ね）

あんな目に遇い続けて、今更、騙し絵説も夢オチも説得力はないだろう。

そう思い、若さゆえの柔軟性を遺憾なく発揮したりリアは次に辺りを見渡した。

（サロン、といったところでしょうか）

先程花を追って仰いだ右側、緩くカーブした壁一面を天井から大きな格子状のガラス窓が覆っている。

使われているのは曇りガラスなのか、目に優しい白い光が入って

くる割に外の風景は一切判らない。

窓辺には絵本などの大判の本が並ぶ本棚が一段だけずらりと並んでいるが、光を遮らないためなのか上には何も置かれていなかった。その手前には、シンプルな木造の円卓と四脚の椅子がワンセットで幾つか並び、中には子供用の椅子まで備え付けてあって、リリアの心を少しだけ和ませた。

次いで反対側へとリリアは視線を移しかけ。

(? これって……)

違和感を抱いて自分が今居る場所を見やったりリリア、花に埋もれた中でちらほら覗く白い枠の形を認めては、ひくりと頬を引き攣らせた。

水をかくように溢れ返る花を除け、膝立ちになって少し視界を広げてみる。

そうして改めて何処にいたのかを眺めたなら、仰向けで眠るのに丁度良い箱の縁を握り締め、リリアはがつくり頂垂れた。

(よ、よりにもよって柩ですか?)

しかもご丁寧にリリアが安置されていた柩の横には、溢れる花のすべり台と化している蓋が立てかけられていた。

意識を失った原因が原因だけに、辛辣な寢床を用意してくれた見ず知らずの恩人へ、似たようなプレゼントを是非して上げたいとちよっぴり思う。

冗談にしてはキツイ、と泣きたい気分を思う存分味わったりリリアだが、もう一つ、自分の居る場所の可笑しさに気づくと柩の外を覗き込んだ。

(……積み上げられた円卓の上?)

花の中に埋もれていたせいで遠近感が滅茶苦茶になっていたらしい。

今更ながらに辺りへ向けていたのが見下ろす視界だったと知ったリリアは、併せて生じた問題に頬を小さく掻いた。

彼女から見える、積み上げられた円卓の段数は計三段。

しかしところどころに覗く脚は、この円卓とセットになっている椅子のモノだった。

（降りようとした途端に崩れそうな気がします）

それでなくとも認めてしまった不安定な造り、樂觀視するにはあまりに頼りなかった。

——どうせ崩れる運命ならば、予測で怯えるより自分で幕引きしてしまった方がマシ。

リリアがそんな考えに及び掛ければ、動きを封じるように突然、ばふおーん、という世にも気の抜けた音が鳴り響く。

これを耳にしたリリア、起き掛けの夢からずっと続いていた音楽の存在を思い出すと、目を丸くしながらついでに目覚めた理由にも行き当たった。

「そうでした。男性がいるのは危険だと思って……」

起きてみれば目まぐるしく戻ってきた過去にいつしか囚われていた自分。

一度首を振って仕切り直しを他でもない自分に課したりリアは、未だ奏でられている金管楽器ののどかな音色の源を辿って、窓を後ろに枢の左側へ視線を向けた。

眼前、現れる風景は本棚が連なる、あの忌まわしき暗がり。

（こんな近くに……窓の光で全然気づきませんでした……）

知らずぐくりと鳴らした喉を振り切るよう、そこから下へと視線を移したりリア。

すぐさまこちらに背を向ける何者かの姿を目撃しては、背景となつた本棚への恐怖を忘れて小首を傾げた。

（針？ 何だか凄く、硬質な髪ですけれど）

枢を頂く円卓と椅子の積み木から少し離れた場所で、椅子に座り金色の楽器を一生懸命吹いている人物の長い髪は、リリアの感想通り一本一本が刺々しく見える。

大半はシルバークレイという色合いのせいだろうが、ギザギザとしたシルエットがそれを助長しているとも言えた。

次にリリアが気になったのは、そんな髪の荒々しさを軽減させる狙いで散らされたような、髪飾りにしてはポロポロ落ちていく色取り取りの花々。

リリアを埋め尽くしていた花と同じそれは、やはり同じように次から次へと生じているものの、場所は宙ではなく人物の髪から出現しており、その速度も髪から離れ落ちる花に比例していて、今もなおリリアへ絶え間なく降り注ぐ色彩とは異なっている。

けれども髪を流れた花の量は、リリアが今し方かいて落とした量とさほど変わらない。

他、この人物に対して特徴を見出すならば、猫背気味の長身痩躯、髪の下を赤と黒で彩る制服に似たコート然の衣装と、その裾周りに備え付けられた多種多様の楽器、蟹股に座る足を覆う鈍色の鎧くらいだろうか。

初めて見る髪と装い、どちらか一方だったとしても、リリアの知る世界とはまたしてもかけ離れた人物であるのは確かだ。

とはいえ夢の中で聞いた曲が現実が続いている以上、世にも稀なる音痴っぷりを披露した男と思しき人物は、あの化け物たちとは違って声を発し、しかもリリアと同じ言語で喋るはず。

ならば、ヘタに動けぬリリアが出来る事など他にはなく。

「あのー」

意を決し、依然、こちらへ背を向けたままの男を呼んでみた。

足りない情報を充足させるつもりで、ついでに不安定な足場から降りるのを手伝って貰えたらと思って。

だが、金管楽器に夢中になっているらしい男は、控え目なリリアの声に気づいた様子もなく、夢の中で聞いた旋律を奏でるばかり。「すみません！」

今度はもう少し大きな声で告げてみたものの、丁度盛り上がる場面だったのか、高らかに鳴った金管楽器が綺麗に呼びかけを打ち消してしまった。

続くタイミングの悪さにリリアの口から溜息が零れかける。

これをぐいつと煽る素振りですみ込んだリリアは、そのまま吸い込んだ息を肺に貯めると、音の境を狙って力一杯叫んだ。

「あのっ！ すみませんっ！！ 此処は一体何処でしょ——」  
「うにゃあっ！！？」

と、リリアの勢いを削ぐようにして、思った通り夢の中で聞いた歌声と同じ声の男は、吹いていた楽器を落すと大袈裟なくらい驚いて立ち上がった。

そして髪を振り乱し、こちらを向いた男のその顔は。

「っ！？ に、人間じゃな——」  
「にやにやつ、にゃあ！？」

またしてもリリアの衝撃を抑え込むほどの妙な声を上げた彼は、見慣れない容姿に彼女が怯えるよりも先に、座っていた椅子の陰にしゃがみ込んだ。

自身の背丈より小さい椅子を盾にし、全く隠せていない身体にも関わらず何やら安心した様子で、リリアの動向をじーっと探っている気配が届く。

本来自分こそがしたかった動作を全てされてしまったリリア。

対処法も浮かばず困惑を浮べては、とりあえず柩の側面の陰に隠れて、男と同じように相手の姿を眺める事にした。

背後からでは分からなかったが、男の目元には不可思議な紋様が織り込まれた布が巻かれており、それでも見えるらしくこちらを伺う顔は正しい位置で彼女を見上げている。

そしてそんな目元と同じくリリアに向けられているのは、布から伸びる長い鼻先。

グラスグリーンの鱗に覆われたその口元には鋭い牙もちらほら覗き、たとえるならトカゲかワニ、もしくは幻想生物のドラゴンの口が打倒だろう。

鼻先と同じ皮膚は手にも認められ、長く細い指の先には真っ黒の尖った爪が存在している。

装い以上にヒトからかけ離れた容姿を前にして、平時であれば悲

鳴を上げるか逃げるかしているリリアは、しかし。

「あ、怪しい者ではありません」

怯えるばかりの彼を安心させるように笑い掛けると、手に取った花を白旗に見立てて振ってみせた。

要は発想の転換である。

意識を失う前までリリアを追い回してきた化け物の居る図書館において、自分の容姿と男の容姿、どちらが此処の常識に相応しいのかといえば、呑気に曲を奏でられる彼に分があるはずだ。

となれば怪しいのは、理由はどうあれ此処に紛れ込んでしまったリリアの方だろう。

（それに、あの化け物たちより彼の方が随分と良心的な姿をしていますし）

人間、第一印象は顔で決まるといいうが、対象が人外であってもそれは通用するらしい。

ついでに人を安心させるには笑顔が一番というのも、彼には伝わったようで。

「……信じてやる。今のお前さんよりは某の方が強いだろうからな」  
（それがし）  
今の今まで、椅子を盾にしていたとは思えないほど横柄に男はそう言い、何事もなかったかのようにその場へ立つ。

態度の割に警戒は解いていない様子だったが、この図書館内で初めて出会った会話の成立する相手に、リリアは小さく安堵の息をついた。

それと同時に内心で首を傾げた。

（見るからに彼の方が強そうですが、今のわたしより、とはどういう意味でしょう？ それに……ソレガシ、とは？）

挙げた二つの疑問符の内、特に後半が気になる。

リリアの耳に馴染まない表現を受け、それが一人称と結局解らなかった彼女は、別の理解でもって手を打った。

「ああ、お名前でしたか」

「なまえ……？」

思わず口に出てしまったなら、不思議そうな声音が下方よりやってくる。

早速そちらへ応えようとしたリリアは、話すのに不自由する自身の位置を再確認。

「あの、此処から降りるのを手伝っては頂けませんか？ 何だか怖くって」

おずおず、男を呼ぼうという考えに至った理由を提案混じりに語ったなら、彼は手を差し伸べる事なく首だけを傾げた。

「怖い？ グリモアのくせに？ そんなところが怖い？」

「ぐり、もあ？」

「何だ？ 自分の正体も知らないのか？」

「……………」

男が馬鹿にした声音で問い掛けてくる。

ただしそれはリリアの無知を嗤うものではなく、呆れ混じりの代物であった。

だからリリアは、また別の理解を「グリモア」という言葉に示す（わたしの正体は人間……という事はグリモアとは人間を指す言葉なのでしょう）

概ね成立している会話だが、ところどころに異なる単語という穴を見つけたリリアは小さく頷いた。

次いでただ怖いだけでは説明足らずなのだろうと思い当たり、もう少し具体的に助力を乞う。

「その、こういう高いところには慣れていないのです。足場も丈夫そうには見えませんし」

「眼が悪いのか？ それは大変だな」

「え……いえ、あのその」

円卓と椅子で出来た足場は不安定だと言ったつもりなのだが、男は妙な捉え方をしたらしい。

けれど裏を返せばこの足場は丈夫という事になる。

長身瘦躯ながら見た目重そうな男の言は、リリアにある可能性を

示唆していた。

（もしかしてこの足場、かなり頑丈に組まれているのでは？）

柩の中で動いても揺れなかった事を振り返れば、可能性は段々と真実味を帯びていく。

ええいままよ、そう思つて柩から身を乗り出すリリアと。

「そついえば、わんこの一つが眼鏡をかけていたな。そうか、あれはお前さんのか。ならば手伝つてやる」

「わんこ……？」

男の呟きに動きを止めたリリアは小首を傾げた。

わんこと言えば、リリアの知っている世界では犬を指し示す言葉である。

しかし飼い主の茶目つ気で掛けさせられる事はあつても、自らの意思で眼鏡を掛ける犬はそういない。

という事はわんこという呼称は別の何かを指すのだろうか？

一瞬、あの化け物たちを指しているのかと思つたが、眼鏡を突き立てた化け物にしるボール然の化け物にしる、リリアの眼鏡を掛けられる顔の大きさはなかった。

そんな風にリリアが考えを巡らせていたなら、視界の少し下で男が一段目の円卓に手を掛けようとしている画が映る。

体重の掛け方次第では、どれだけ丈夫でも崩れてしまいそうだとリリアに緊張が走つた。

だが男は円卓に手を乗せただけで、幾ら待つても登つてくる素振りを見せない。

何かあつたのか、リリアが徐々に不安を抱き始めた頃、身体ごと彼女の方を仰いだ男は言う。

「近づいた途端に某をそれがしはくりとやるつもりではないだろうな？」

「はい？」

あまりの内容に呆気にとられてリリアの眼がぱちぱち開閉を繰り返す。

ぱくり、とやるのはどう見ても立派なあざとを持つ男の方だろうに。

「何故……わたしが？ わたしよりもあなたの方がよっぽど」

茫然とし過ぎて、ついつい本音がぼろつと口を出た。

「にゃ？ 某<sup>それがし</sup>にはお前さんをぱくりなど出来ないぞ？ 某<sup>それがし</sup>は肉より

野菜や果物が好きだからな。一日三食、林檎二個ずつで充分だ」

えっへんと胸を張る男。

「……………」

肉食の外見の有効活用を放棄した話に絶句したリリアは、さすがにそれはない、ここで言う野菜や果物・林檎という表現も、また別のモノを示しているのだと疑って掛かうとし。

「にゃー、そうか。腹が膨れたら、ぱくりとやられる心配はなくなるな。よし、これを食べていいぞ」

ごそごそポケットを漁った男は、リリアの返答も待たずに赤くて丸い、艶々した果実を放ってきた。

反射で受け取ったリリアは丸いその物体をしげしげと観察する。

「林檎、ですか。紛れもない、林檎、ですね」

「そうだ。林檎だ。紛れもない、某<sup>それがし</sup>の二分の一食分だ」

リリアの知る世界と同じ果実を前にして、それでも食べれば違わずだと変な確信を持って齧り付く。

しゃりつと軽い音が立ち、少しの酸味を残しながらも蜜の詰まった甘さが口内に広がる。

寝起きで食べるには勿体無いくらい上等な味わい。

知らず知らず渴いていた喉を潤すには申し分ない瑞々しさ。

咀嚼しつつ林檎を眺めたなら、赤く光る皮の中でリリアの歯形を一口分つけた果肉が薄い黄色に輝いていた。

「どうだ？ 美味しいか？」

「……はい、とても」

答えは決まっていると言わんばかりの男の確認へ、リリアは言い知れぬ敗北感を噛み締めるように、林檎をもう一齧り食した。



## 葬送の花、めざめのうた その2

食べた林檎の芯を振ってみせれば、男は「芯は食べないのか」と訊いてきた。

「固くて食べられません」と答えると、「それなら某が食べられる事もないな」とようやくリリアが彼をぱくりとやらないと納得したらしい。

用心深いというか、小心者というか。

兎にも角にも、安心を得た男はコート然の衣服につけた楽器をじやらじやら鳴らしながら、外見に似つかわしくない速さでリリアのいる柩まで簡単に登ってくる。

近くで見ると尚更大きく感じる長身瘦躯に少しばかりリリアが怯んだのなら、手にしたままの芯がひょいっと男に取り上げられ、何の躊躇いもなしにぱくっと大きな口の中に放り込まれていった。

自失刹那、林檎の芯まで喰らう異形だろうと異性、関節キスに等しい行為を正確に捉えたりリアは、かつと頬を朱に染めるが、我関せずの男はそんな彼女を軽々横抱きにした。

手伝って欲しいと願い出たものの、支えて貰うぐらいのつもりでいたため、思わぬ扱いにリリアの身体が若干の強張りをみせる。

けれどもそれすら気に掛けない男の胸へ、自然と寄り添う頭が弾力のある硬さを覚えたなら、リリアは別の思考に気をやっていく。

——単に恥ずかしい状況から逃避したかっただけかもしれないが。

登ってきた時同様、いとも容易く降りてみせた男は、リリアをすぐには解放せず、花を蹴散らしながら先程まで自分が座っていた椅子へ移動、彼女をそこに座らせた。

林檎を投げられた際、リリアは見事にキャッチしてみせたのに、男は未だ彼女は目が悪いと勘違いしているらしい。

ここで待っていると言わんばかりに、意外とつるつるした手の平でリリアの頭を撫でた男は、振り返ると確認する素振りですにゃあとか細く零した。

「柩の中身は空っぽ。祭壇も必要ない。早速片付けなければ」

（……やはりあれは柩でしたか）

他者の口から改めて知った事柄に、それなりにショックを受けたリリアは、男の動きを追うようにして椅子の背を横に後ろを見やっ

た。  
視点が変わり広がる景色は、それ自体が発光しているような白い窓を背景とした、祭壇の形に組み上げられた円卓と椅子の陰。

最上に頂く柩に花はもう降っていなかったが、白と黒のコントラストは荘厳な雰囲気のリリアに与えてきた。

誰がこれを設置したのか、考えるまでもなく片付けると言いテキパキ実行している男だろうが、だとするとリリアを柩に寝かせたのも彼という事になる。

詳しい事情を聞きたいものの、何かをしながら訊く話ではないため、リリアは運ばれた時に浮かんだ疑惑を男に尋ねた。

「あの、改めてお尋ねするのも変な話ですけど……あなたは男性、ですよ？」

容姿が自分と異なる以上、声が低くても大きくても力があっても胸がなくても、彼だと思っていたら女だった、というのは在り得る話。

もしも性別を間違っていたら、そう思うリリアに対し、柩を背負って降りて来た彼はあっさり頷いた。

「にゃ。聞いている通り、某は男声だ」  
それがし

（……あら？ 何かしら意味が食い違っている気がしないでもありませんが）

聞き方が悪かったのかもしれないと思いつつ、どちらにせよ男な

のだと判明して、間違っていないかった事にほっとするリリア。

しかし床に柩を立てた男は、中の花を落としながら続けて言った。

「……たぶん」

「……たぶん？ ご自身ではお判りにならないのですか？」

「にやー。<sup>それがし</sup>某が物心ついた時、死ぬ間際の同族が言っていた。お前が女なら我が種はまだ救われたものを、と。どうも某<sup>それがし</sup>以外の同族は皆死んでしまっていたらしく、以来、男女という差は理解できても明確な区別<sup>それがし</sup>が某にはつけられない。付け加えて言うなら、死んだ同族は某<sup>それがし</sup>と似た身体をしていた。奴さんも男だったんだと某<sup>それがし</sup>は思った」

「そう、でしたか……」

けるつとした口調で語られる重い話に、何と言っているものか分からないリリアは口を閉ざした。

「奴さん」という表現を正しく三人称で理解した彼女は、反面未だにソレガシという名前だと認識している男の淡々とした様子に少しだけ目を伏せた。

幼くして自分一人だけが生き残る——それはリリアの生い立ちと似て非なるものだった。

天涯孤独と言って良い身の上だが、彼女の傍には母の知人である女がいて、彼女の周りには常に必要以上に関わる事はなくとも同族の他者がいる。

しかも話の内容から推察するに、彼は同族の男を自分の手で弔ったのだらう。

そうでなければ同族の身体を己と見比べる事など出来はしまい。独りになっただけでも辛かるうに、目の当たりにした同族の死はやがて来る自分の死にも直結したはずだ。

考えれば考えるほど、鬱々とした気分<sup>それがし</sup>に陥るリリア。

分類したなら自分は決している人に納まらな<sup>それがし</sup>いと知っていても、彼の過去に哀しみ感じてしまった。

けれどもリリアは唐突に思い至ってしまう。

死んでしまった同族の身を清めて弔う、その方法には何の異論も

ないが、柩に入れられていた自分はどんなのだろうか、と。

こうして生きているのだからまさか……、そんな風にリリアが冷や汗を流した矢先。

「そういえばお前さんは女だな」

「なっ！？ 何故それを！！？」

タイミングの良さに思わず上擦った声が出てしまった。

過敏な反応を不審がるでもなく、柩を本来の位置に倒した男はつと指を差した。

黒い爪が向けられている線上、自分の身体をリリアが両腕で庇うように抱いたなら、

「本にお前さんと似た種族の事が書いてあった。女はある時期になると胸が出っ張り、男は最初から股間が出っ張っていると」

「あ、ああ……そういう………」

過剰な反応をしてしまった自分が恥ずかしい。

そもそも種族が違うなら、男にとって自分の容姿などさして問題にはならないはずだ。

馬鹿な想像を働かせてしまったと、頭痛を堪えるように片手で顔半分を覆い隠す。

穴があつたら入りたい気分だ、とは先程まで柩に入っていた身で考えはしないものの。

だがしかし、男はそんなリリアに追い討ちを掛けるが如く、こんな事をのたまった。

「ああ、そうか。お前さんが女なら某は同族を復興できるのか」  
それがし

「は？」

「此処の本には男と女は番うものと書いてあった。そして子を授かるとも。どうだ？ これも何かの縁だ。それがし 某と番ってみないか？」

「んなっ！？」

祭壇を片付ける手は休ませず、モノの拍子が弾みのように異形の男は提案してきた。

十四ともなれば色々世の成り立ちを知る、そうでなくとも図書

館を愛用してきたリリアは、男の言葉を寸分違える事なく理解すると羞恥に顔を赤らめていく。

平然とした男を前にして混乱した頭は、目を回すと遠回しに変な事を口走った。

「え、えとですね、子を授かるには同族と番う必要があります、他種族では上手くいったりは」

「世には合いの子という言葉もあるぞ？ これも本に書いてあった。不自然だとも書いてあったが、試してみる価値はあると某は思う」  
「う……」

自分とは異なる種族相手にも関わらず、熱くなる頬を責めたいリリア。

男はやはり、世間話の延長といった具合で、円卓と椅子で出来た祭壇を分解しながら事無げに続けた。

「しかし、本には男が女を抱くと女の腹に子が宿ると書いてあったのだが……それらしき様子はない」

「……は？」

一体いつの間にかそういう話になったのか判らずリリアが目を見詰めたなら、ここに来てぴたりと手を止めた男が彼女へ首を傾げてみせた。

「運ぶだけではなく、ちゃんとそういう気持ちで抱っこしないと駄目なのか」

「……………」

（えええ……ちょ、ちょっと待ってください？ 何か話が物凄おくズレ始めたような）

思ってもみなかった告白続きにリリアが悩む頭を抱えると、驚く間もない速さで移動してきた男がひょいっと椅子ごと座る彼女を腕の中に納めた。

「……やっぱり駄目か。それとも椅子があるから不味いのか？」

言って猫の子を掴む要領でリリアの首根っこを捕らえた男は、固まったままの彼女をすっぱり抱きすくめる。

次いで椅子に彼女を戻したなら、遠慮なくリリアの腹を撫でた。  
「うひゃあつ!？」

これにはさすがに反応したりリア。  
椅子を蹴って立ち上がったのは、解体途中の祭壇の陰まで逃げた。  
った。

莊嚴さはほとんど残っていないそこを盾とし、男に向かって叫ぶ。  
「こ、断りもなく人のお腹を撫でるなんて! い、いえ! その前に抱きしめたりだとかもしては――あ、あの?」

恥ずかしさに引っくり返った声を上げたリリアだったが、最初の時と同じように椅子の陰に隠れる男を認めて戸惑った。

驚いて逃げたのが不味かったと言われれば反論の余地もあるだろうに、リリアに向けられた目隠しは別の事を口にする。

「眼が悪いなんて嘘だ! 眼の悪い者があんな俊敏に動ける訳がない! 某騙された!」  
それがし

「眼の悪い者が俊敏って……あなたも似たような者でしょうに」  
それがし  
「某の眼は悪くない! よく視えるだけ! だから布で隠している! でもお前さんは騙した!」

「よく視える……というのは判りかねますが。騙すも何も、私は一度だって自分の眼が悪いなんて言ってませんよ?」

「そんなことな……くもない。にゃー」

「ほら。あなたが勝手に言っただんじゃありませんか」  
「にゃあ」

指摘したならすつとぼけに走った男。

長い鼻先まで横に向ければ、はっとした様子でリリアに食って掛かってきた。

「いや! 誤解されるような事をした! 眼鏡、眼鏡掛けてた!」

「あれは……言うなれば覆面です。わたしの顔は、わたしの同族にとって良く見えるらしいので」

「にゃ? 良く見えるのは良いのではないか?」

「あなたの先程の言を借りるなら、良く見えるから隠していたのです。今はほら、あなたにとってわたしの美醜は意味がないでしょう？ だから晒しているだけで」

化粧物に刺してしまったせいでないから掛けていないだけ、とは言わず。

もしも今の言葉に嘘があるというのなら、そこだけ。

すると男は、赤と黒を基調とした服とそこに取り付けられた楽器、ギザギザしたシルバーグレイの髪を揺らしながらリリアのところへやって来た。

最初の怯えまくった様子とは違い、ある程度リリアに対しての免疫が出来たらしい。

それを喜んで良いやら悪いやら、リリアが決めかねている隙に男は傍らにしゃがみ、黒い爪を携えたグラスグリーンの指が彼女の顎を少しだけ上向かせた。

軽い動きで左右を向かされたなら、小さく唸って男が頷く。

「意味がなくてもない。お前さんにとっては可愛らしい」

「っ！？」

それは極々普通の感想であつた。

特別な気持ちを一切省いた、臍原めも何もない、率直な感想。

しかし、どれだけ優れた容姿をしていようと、言う割に自分の顔の良し悪しがいまいち判別出来ないリリアは、面と向かって初めて言われた感想を前に言葉を失くして赤面した。

「にゃー。確かに眼鏡はお前さんにとっての覆面のようだ。……で

も、子どもは駄目。にゃー、子作りは難しい」

「！ あ、あのすみません」

しみじみ語る男の手を取ったりリア。

「にゃ？」

「その、申し訳ないのですがあまりそういう事を連呼されるのは宜しくないかと」

「そういう事……子作り？」

「そう、そうです、それです！ 男性にとってどうなのかは判りかねますが、女性にとってはとてもデリケートなお話なのです」

「……にやあ。判った。以後気をつける。男と女ではモノの受け取り方が違つとも書いてあつたからな。それに男女がきちんと判つていない某では、もつと判りにくいと思う」  
それがし

デリケートの理由をもつと突つ込んで訊いてくると思っていたが、同族の復興を口にした割に、男は随分とあっさり引いた。

やはり、彼にとっては世間話程度の感覚だったらしい。

リリアが掴んでいた手を離せば、立ち上がり——かけ。

「きやつ！？」

何の言葉もなしに彼女を抱き上げた。

「片付けの途中だった。此处に居たら危ないから持っていく」

「お、お構いなく」

「いや構つ。お前さん、本体は物凄く固いくせに擬態はとても柔らかくてイイ匂いがする。洗い立ての縫いぐるみみたいで抱っこがクセになりそうだ」

「く、クセ！？——というか本体？ 擬態とは？ しかも縫いぐるみ……」

どんどん人間離れしていく単語の連続にくらくらと眩暈を覚えるリリア。

男から告げられた「可愛らしい」も、考えてみれば犬猫に対して人間が思ふ事と変わりないのではないか、とまで思い。

すると椅子まで移動した男はリリアを席に下ろしつつ、付け加えてこんな事を告げる。

「ああ、そうか。その姿ですっかり失念していたが、お前さん無機物だから、男女も種族も関係なく、有機物の子どもは出来ないな……」

「……あ」

「え……？」

男の言葉にリリアの眼が見開かれた。

これに対して男は「注意を受けたばかりなのに、子作りの話をし

て申し訳ない」と謝罪するが、今リリアが重要としているのはそこではなかった。

「無機物って……わたしは人間で、有機物のはずでは」

ぼつりと声に出して言えば、奇妙な違和感を抱いて喉を押さえた。何か酷い勘違いをしているような、気持ち悪さ。

そんなリリアへ、異形の男は不思議そうに顔を傾かせた。  
事無げに、言う。

「もしかしてお前さん……自分の身体がグリモアに変わった事、気づいていなかったのか？」

「ぐりもあ……変わった……」

林檎を口にし味わい、潤っていた喉がからからに渴いていく。

知りたくない現実がすぐそこまで迫ってくる感覚に怖じ気づき、耳を塞ぎたいと思えども動かない手はそれを許さない。

知りたくなくても知らねばならないと、逆に縋るように離れかけていた男の袖を握り締めた。

指が白くなるほど握り締め、セレストブルーの瞳を揺らしながら、高い位置にあるグラスグリーンの鱗の鼻先、奥にある布に覆われた目元を凝視した。

「あの……ぐりもあ、とは何の事でしょうか？」

人間を意味する言葉ではなかったのか。

最初に男からそう言われた時、リリアはそんな風に理解していた。それなのに、今になってみればどうしてそんな風に思い込んでいたのか判らなかった。

いや、思い込んでいたのではなく、思い込んでいたかったのかも  
しれない。

知らず知らず逃避に走っていた己を内に感じ、リリアの唇が小さく  
噛み締められていく。

布に覆われた男の眼では映る自分の顔を見る事は出来ないものの、  
目も当てられないほど動揺しているのは判った。

答えを待つ瞳に涙が滲んでいくのも。

そして男は答える。

リリアの心情を無視する風体で、丸ごと包み込むように。

「グリモアは魔道書<sup>グリモア</sup>。この図書館にしか納められていない、唯一無二の書。手にした者のどんな願いでも叶える全知全能の至宝。その性質ゆえに神の書とも呼ばれ、また禁断の書とも呼ばれている。そして……今はお前さんの身体でもある」

差し伸べられた手は重なるためではなく、ただリリアを示していた。

語られゆく存在が紛れもない彼女自身である事を。

「わたしの身体が、唯一無二の書……本？」

俄かには信じられない話。

けれども人間である事を訝しんでいた心は、すんなりこれを受け入れる。

「でも、それではこの姿は？」

反面、否定したいと思っているのは、人間の形を取るこの身体。

古今東西、本と呼ばれるモノの形は数あれど、場合によっては一定量の知識を詰め込んだ人間をして本と評する事もあれど。

リリアは——彼女の本体だという魔道書<sup>グリモア</sup>は、無機物だという。

要するに、人間——有機物ではない、と。

肯定も否定も、して欲しいと願い、して欲しくないと思ったりア。

男はこの様子に自身からは明確な答えを語らず、伸べた手を返して彼女の頭を軽く撫でてから、謎かけのように言った。

「目を閉じて、一冊の本を思い描くといい。お前さんの呼びかけに、お前さんの身体は必ず応える」

かなりの音痴を披露したくせに、男の低い声は染み入る温かさを

持ち合わせていた。

リリア自身がどんな結果に終わろうとも、彼は何も変わらないのだと感じた。

この短期間、それも自分とは似ても似つかない姿形の相手なのに、理解に苦しむ信頼感が生まれていた。

それはもしかすると、極限状態で意識を失ったせいかもしれない。ひよこの刷り込み宜しく、目覚めて初めて目にしたのは彼だったからかもしれない。

目覚めた時、独りではなくて良かった、近くに居たのが彼で良かった。

リリアは初めて、そんな風に思い、感じて。

「……………」  
腹を決め、男の言葉通り目を閉じた。

描く一冊の本に細かな指定はなかったものの、それがどんな形状をしているのかは判る。

意識を失う直前に見たから、ではなく。

内側から、じわりと滲むように現れてきたために。

自然と男の袖を離れた手が、もう一方の手と同じように手の平を上とし、座る腿に置かれた。

併せ、ずしりとした重みを受くる腕。

「……………」  
その重さに耐え切れない様子でゆっくりと目を開けたリリアは。

「は……あはは……………ふふふふふ……………」

錆びついた赤と鈍い金、色取り取りの石が嵌め込まれた、仰々しくもゴテゴテとした装訂の本を膝上に認め。

「やっぱり無理、です」

否定を口にした割にすっかり自分の本体だと判定してしまった魔<sup>グ</sup>道書を前にして、椅子に腰掛けたまま器用に気絶をしてみせた。



### 葬送の花、めざめのうた その3

外界から隔された図書館。

それ自体が一つの世界を形成している場所に久しぶりに訪れた彼は、

「……にや？」

本棚が並ぶ薄暗い通路で奇妙なモノに遭遇した。

クロムイエローの長い髪を乱して伏す人の形をしたそのモノ。

近くには、唯一無二の魔道書グリモアが同じように床に接していた。

「にや……」

状況がいまいち掴めず隣を見た彼は、タンポポの綿毛を何倍にも大きくして発光させた、宙に浮く物体へ首を傾げた。

「わんこ、コレは？」

この図書館を探索するに辺り、カウンターから持っていかなばならない存在は、彼の問い掛けに対して何も語らず。

その代わり、ふわふわした綿毛を上下左右に振り始めた。

図書館利用者の大半はこの動きの意味が判らないのだが、彼はこれを綿毛の意思表示だと知っており、尚且つその内容もしっかり把握する事が出来た。

このため綿毛が止まったのとほぼ同時に彼は頷き、

「なるほど。だからこっちには何もなかったのか」

人の形をしたモノの傍らに膝をつく、グラスグリーンの鱗に覆われた手をその頭へ伸ばした。

しかし、彼の手が僅かばかり触れただけで、ソレは跡形もなく砂のように崩れ、欠片も残さず消え去ってしまう。

「形も忘れて久しいか。随分と長い間此処にあったのだな。魔道書グリモア

が近くに在ったせいで喰われる事もなく。……にや？」

砂の名残を惜しむように指を擦り合わせていた彼は、顔を上げると先程まで魔道書グリモアが在った位置に、触れるまで目の前にあった姿が

横たわっているのに気づいた。

髪を乱したうつ伏せ状態ではなく、胸の上に手を組んだ仰向けの状態で。

「にゃー……もしかしてあの身体の持ち主が、精神のみ魔道書グリモアに入ってしまったのか？」

全てを見ていたというわんこの話では、かなりの衝撃が双方に在ったと聞く。

しかもその内一方は魔道書グリモアなのだから、どんな拍子に何が起こっても不思議ではない。

今度は人の姿へ擬態した魔道書グリモアの傍に片膝をつき、片手を顔の上に翳した。

「でも、息はしていない。……死体？」

彼が知る中には呼吸を必要としない種族も多々いたものの、器官が在るなら話は別。

仮に本体が無機物だから息をしていないにしても、ここまで正確に擬態した魔道書グリモアが手を抜くとは思えなかった。

仮死状態という可能性もあるだろうが、どの道魔道書グリモアの中に居る者が起きなければコレはこのまま此処に在り続けるだろう。

一生目覚めないかもしれない。

「……花が、似合いそうだ」

何の感慨もなく呟いた彼は、自分の頭で常に咲き綻ぶ花の一輪を外すと、人の形をした魔道書グリモアの髪に飾ってみた。

悪くない、と思った。

それならいつそ、葬送の儀をしようとも思った。

彼の知る葬送の儀は、他の儀に比べても使う花の量が多いゆえに「図書館に穴は掘れない。祭壇を作って上に柩を持ってきて、それから曲を奏でて花を降らせて、そして歌も歌おう」

ふらっと図書館に立ち寄っただけの彼には、これからの予定が何もなかった。

これまでも似たようなモノだったから彼は思った。

（某の身体が朽ちるまで、儀を執り行うのも面白い）  
それがし

目的を始まりの記憶から持たなかった彼は、そうして魔道書の擬態を横抱きにすると、図書館奥のサロンへ歩みを進めた。  
グリモア

それは奇しくも、魔道書の中の少女が進んでいた方向だったのだが、そんな事を彼が知るはずもなく。

ついでに彼女が目覚める可能性もすっかり失念していた彼は、葬送の儀を執り行ってもまもなく掛けられた声に異様な怯え方をする羽目になる。

自分の本当の身体が本になってしまったリリアは、異形の男が話す経緯をあらかた聞き終わると盛大な溜息をついた。

この図書館へ迷い込んだ当初に思いついた夢オチ案は、何度意識を失っても実行されてくれず、それどころか覆せない現実ばかりをリリアに突きつけてくる。

「わたしの身体がこの本だという事だけでもショックでしたが……此処が幻想小説さながらの別世界である、どころか、まさか長くて数時間前と思っていたあの事故が、元の身体を失うくらい前の出来事だったなんて」

「厳密、この図書館で経過した時間はあまり別の世界で流れる時間

に影響しない。でもお前さんの意識が魔道書の中に入ってしまったせいで、残された身体は不安定になり、存在出来る時間だけ過ぎてしまった。老いもしない身体は風化するしかなかった」

「……ちなみに、元の世界に戻れたりは」

「出来る。が、そこはもうお前さんの知らない世界だ。遙か未来だ。通常であればどこだけ此処で過ごしても老いる事なく元の時間に帰れるが、お前さんの世界で生成された身体の時間は流れてしまったからな。魔道書グリモアならあるいは時を戻せるかもしれないが」

「身体も元に戻せますか？」

「それは……判らない」

「でしょうね」

今更気絶する話でもないと言いたげに、ふーっと息を吐き出すリアア。

物分りの良さに首を傾げた男は、サロンに並ぶ円卓の一つで対面して座る彼女へ問い掛けてきた。

「元の世界に戻りたいとは思わないのか？」

「直球ですね」

「そう思うのが普通だ、と——」

「そこらの本に書いてありましたか」

「……にゃあ」

言葉を取られたせいかな不満げに鳴く男。

爬虫類の肌と鼻先を持つくせに何故か猫真似の声を上げる彼へ、もう一度溜息を零したリアアは、円卓の上の魔道書グリモアに両腕を乗せた。

「戻りたくない、わけじゃないんですけどね。何と言えは良いのでしょうか、そこまで未練があるわけでもないのですよ」

「故郷というのは帰りたくなるもの——」

「と書いてあっても、思い入れはほとんどありませんからねえ」

「……………にゃ」

男の茶々を許さずまたしても被せたなら、不機嫌を隠さずグラスグリーンの口の端、小さな頬が若干の膨らみを持つ。

ふくれっ面、といったところだろうか。

肌が硬質な鱗に覆われているため、リリアの眼には少々奇妙に映った。

——人間の姿で同じ事をされたら、気持ち悪いの一言で終わりそうだ。

そんな男を視界に留めつつ、少しばかり宙を仰いだリリアは小さく呟く。

「でも……あの人には挨拶ぐらいしておきたかったですね。わたしがいきなりいなくなっても特別騒ぐような人ではありませんけど。周りは騒ぎますよね。図書館への道すがら、わたしを目撃した顔見知りはいましたから、在らぬ嫌疑をかけられたりはしないでしょ。が、特殊な家庭環境であつた事は確かです。心残りがあるとすれば、それだけですな」

「あの人？」

「ええ。わたしの……親代わり、というより姉代わりのような人でした。実際、わたしに姉はいませんが」

男に視線を戻し、すぐさまそれを円卓の上に落としては、伸ばした指先を見詰めて目を閉じる。

「そう、ですよ。心配してみたところで、もうずっと前の話。あの人がもう亡くなっているはずで」

体感にして昨日、「おやすみなさい」と言つて別れた顔を思い浮かべた。

放っておけば食事と仕事に行く以外、眠っている事の多かった女は、突つ伏したままの格好でひらひらいつも通り手を振っていた。

なんともものぐさな態度をくすりと笑つたリリアは、それももう見る事はないと知つて、少しだけ眉毛を下げる。

「……某の話が嘘だとは思わないのか？」

リリアの瞼が男の言葉に持ち上がった。

次いできょとんとした表情が象られる。

「嘘？ どうしてです？」

「自慢ではないが某は人をからかうのが好きだ」

「本当に自慢になりませんね」

「……にや」

間髪入れずにぱつさり下せば、鼻先の下が多少の尖りをみせた。

「趣味は人それぞれ」

「そうですね。それで？」

「にやあ……」

促せば促したで、つまらなさそうな声が上がった。

別に男を困らせたいわけでも不快にさせたいわけでもないリリアは、彼の様子に黙って話を聞こうと口を閉ざした。

しばし開く間。

「それでな」

「……」

「からかうのが好きな某は」

「……」

「……お前さん、話聞いているのか？」

「……」

「聞く気、ないのか？」

「……」

「相槌くらい、打ってくれないのか？」

「あ、はい。何でしょう？」

「……某、<sup>それがし</sup>からかうのは好きだがからかわれるのは嫌いだ」

「まあ、好きという方はあまりいらっしやらないと思いますが」

「……」

「？」

相槌を打てというから打ったのに、先程より不貞腐れた様子の男は身体の向きを横座りに変えた。

リリアはこれに首を傾げたが、ああと気づいてはぽんつと手を打ち。

「もしかしてわたし、からかわれているのですか」



鱗に覆われた両手が円卓を強く打ちつけた。

驚いて思わずリリアが椅子に縋れば、反動で立ち上がった異形の男は大きな口を開いて言った。

それがし  
「某の名は、ソレガシじゃなくてエニグマだ！」

「そ、そうでしたか。そんなに長いお名前とは露知らず、略してしまつてすみません。ソレガシジャナクテエニグマさん」

「……か、からかっているのか!？」

「え……そ、そんな滅相もない。からかうなんてそんな。ソレガシジャナクテエニグマさんをからかつて、わたしに何の得があるというのです？」

「……………」

心の底から冤罪だとぶつけると、男は針で刺された風船のように勢いを失い、椅子にがつくり座り込んでしまった。

「は、初めてだ……こんな屈辱は」

「すみません……?」

また何かを間違つてしまったらしい。

もしも相手が人間だったのなら、リリアももう少し違う解釈をしていたのだろうが、相手が自分の知る種族でないばかりに酷い勘違いをしている事に彼女は気づかない。

いや、もしかすると非日常の現実に取り出されたショックから、無自覚のまま混乱している真つ最中なのかもしれない。

どちらにせよ、そんなリリアの状態を知る由のない男は、項垂れていた顔を上げると布で覆われた目元でキツと彼女を睨みつけた。

リリアへ右手の黒い爪の先端を突きつけては、噛み付く素振りで宣言する。

それがし  
「某はお前さんが嫌いだ」

「はあ……すみません」

面と向かつて言われても、どう反応して良いのか判らず、とりあえずリリアは謝ってみた。

しかし男は許さないとばかりに更に更に声を荒げる。

「某の名前はエニグマなのに、勘違いするお前さんが嫌いだ」  
それがし

「はあ……すみません」  
それがし

「だから某は今度から某の事をエニグマと呼ぶ事にする」  
それがし

「……え？」

「エニグマがエニグマをエニグマと言い続けていれば、お前さんもその内エニグマの事をエニグマだとちゃんと理解して、エニグマの事をエニグマと呼ぶだろう」

「それって……」

どうだと言わんばかりに腕を組む男——エニグマ。

そんな彼の言を受け、今更ながら某が一人称だったと理解したりリアは、考える素振りで頬に手を添えた。

「つまり、あなたはわたしに名前を呼んで欲しいんですか？ 嫌いだって言ったばかりなのに？ 嫌いな相手に親しげに名前を呼ばりたいのですか？」

「……？」

「それって裏を返せば、わたしの事は別に嫌いではないという話になるのでは」

「き、嫌いだ！ エニグマをからかうお前さんは嫌い」

「からかってません。ただの感想です……けど、そこまで慌てるのは怪しいですね」

「にやあ……」

分厚い眼鏡を掛けていたなら、レンズの端がきらりと光っただろう素振りで勘繰るリア。

追いつめられた風体で鼻先を背けかけた男は、持ち直すように顔の位置を戻すと、もう一度リアに向かって指を差した。

「判った。エニグマ、喋り方も変えるデス。お前さんの真似をするデス。どうデス？ 真似されるのは誰でも怒る行為デス。怒るがいデス」

「全然真似になっていません。というか寧ろ……可愛い？」

「……！ お、男に可愛いは禁句デス！ 言ってはいけないデス！

侮辱の言葉デス！」

「そう本に書いてあったのですか？」

「そうデス！——にゃあ」

だんつと片手で円卓を叩いたエニグマは、肯定を恥じるように布に覆われている目を両手で隠した。

「また、またからかわれたデス。お前さんはとっても意地が悪いデス」

「はあ」

「からかうのはエニグマの専売特許なのに、鬼デス悪魔デス詐欺師デス」

「詐欺師が鬼や悪魔と同列ですか。被害にあった事でも？」

「正に今デス。本体は魔道書でも、お前さん自体は怖くないと思つたのに騙されたデス」

「大部分言いがかりのような……。ああ、エニグマさん、そんなにショックを受けないで下さい」

泣いているようにも見えるエニグマの姿を宥めるべくリリアがそう言えば、手を除けた彼はそれでも隠されたままの目で彼女を睨みつけてきた。

「エニグマはエニグマデス！ 敬称はいらないデス！」

「え……エニグマ？」

生まれてこの方、敬称なしで誰かの名を呼んだ事のないリリアは、言い辛そうに彼の名を口した。

途端エニグマは悲愴からコロツと一変、腕を組むと嬉しそうに頷いた。

「にゃ。そうデス。エニグマはエニグマで良いデス」

「……エニグマ」

「にゃー」

「エニグマ」

「にゃー」

「エニグマ」

「にゃー」

呼べば呼ぶほど合いの手のように鳴くエニグマ。

これまでのやり取りからしつこいと怒りそうなものだったが、名前を連呼されるのは構わないらしい。

（なぞの人……言い得て妙ですね。まあ、彼の名の由来がわたしの知るエニグマと同じとは限りませんが）

そんな事を思いつつ、もう一度彼の名を呼んだリリアは、やはり届く合いの手の鳴き声にふんわりと微笑みかけた。

「名前呼ばれるの、好きなのですか？」

「エニグマはお前さんの事が嫌いなので正直に答えたくないデス。でもいいデス。答えるデス。エニグマは名前を呼ばれるのが大好きデス。呼ぶのも好きデス」

「そうですか」

「にゃー」

「では、わたしの名前を教えますね」

「……にゃ？ 教える？ 魔道書の名前はグリモアで」  
僅かな緊張をみせるエニグマの声。

本人も気づかないほどささやかに上擦った声音は、喜びよりも困惑を示していた。

その理由を、リリアの名前がグリモアだとエニグマは思っているから、と推測した矢先、本体である魔道書が自身の正体を知った彼女へ、記載されている内容を抜粋、足りない知識を補助し始めた。まるで既存の事柄を思い出すかの如く頭の中に浮かんだそれは、リリアのいた世界にはなかった、名前の持つ力について。

正確には、魔道書のように、特殊な力を秘めた道具の真の名について、である。

人伝いで聞いても問題ないその名前は道具自らが他者に許す事である種の契約が成立するという。

魔道書の場合であれば、特異な性質上全ては無理でも、その力のごく一部を対象者に貸す事になる。

それでも対象者には十二分、上手く使えば新しい世界を創造する事も、逆に世界を滅ぼす事も出来る。

だからこそエニグマはリリアの申し出に怯むのだと魔道書グリモアは示していた。

次いでリリアであつてリリアではない魔道書グリモアの記述は警告する。  
遙かな昔であれば兎も角、今のリリアの名前は魔道書グリモアの真の名に直結している。

安易に他者へ教えて良い代物ではない——と。

(……それでもわたしは、エニグマに教えたいと思っています。全面的に彼を信頼しているから、なんて事は言いません。ただ……羨ましいのです)

同族がいても自ら独りを望み、誰かに呼ばれる名を拒絶し、必要以上に誰も呼ばずに生きてきたリリアは。

同族もなくなつた独りで生き、それでもなお誰かを呼ぶ名、誰かに呼ばれる名の在る事を素直に喜べる、そんなエニグマが羨ましくて。

「リリアです。わたしの名前はリリア」

呼んで欲しいと思った。

ただ、それだけ。

「り、りあ……」

エニグマが惚けた様子で教えたばかりの名を口にした。

実感は未だないが生きてリリアの名を知る者は今、目の前にいる

エニグマ唯一人。

それと呼ばれて渗む思いは切なくとも温かだった。

「はい」

につこりと笑いかけたなら、長い口の亀裂がもごもご動く。

初めて見る様子にどうしたのだろうと首を傾げたなら、背の関係上、覗き込んでしまう目を嫌うようにエニグマの顔が背けられた。

「お前さんの名前は判ったデス。でもそのままでは呼ぶとエニグマが大変なので、りりあと呼ぶデス」

「りりあ……」

音は全く同じなのに、何故かエニグマの言う「りりあ」は他とは違う風に聞こえた。

不可思議な現象に眉根を寄せるりりあをどう思ったのか、続けてエニグマは焦った調子で言った。

「でも、りりあだけりりあというのは違和感があるデス。だからエニグマもエニグマの事をえにぐまと呼ぶデス」

「エニグマ……」

やはり同じ音でもエニグマの言う「えにぐま」は不思議な響きを持っていた。

それでも気を使ってくれたらしいと気づいたりりあは、エニグマに向かって小さく頭を下げた。

「ありがとうございます、エニグマ」

「にゃー」

「……ところで、つかぬ事をお聞きしますが、わたしの名前をそのまま呼ぶのがどうして大変なのですか？」

りりあの問い掛けに対し魔道書<sup>グリモア</sup>は沈黙を保ったまま。

先程のような知識の補助には、適用される条件があるらしい。

とはいえりりあ自身エニグマに答えて貰いたかったので、この魔道書<sup>グリモア</sup>の反応は願ったり叶ったりだった。

当のエニグマはりりあから注がれる期待の眼差しを遮るように、

自身のシルバーグレイの髪から花を一輪取り出す。

「えにぐまの種族は花竜<sup>ルファ</sup>と言うデス。花竜<sup>ルファ</sup>は儀を執り行い、舞台に音楽に踊りに歌に、儀に纏わる全てを作るデス。そして花を降らせるデス。だから花竜<sup>ルファ</sup>にとって音は何よりも神聖なモノで、危険なモノ。扱いを間違えれば大変デス。それなのに、そんな花竜<sup>ルファ</sup>であるえにぐまがりりあの名前を正しく呼んでしまったら、魔道書<sup>グリモア</sup>の中の力が解放されてしまう恐れがあるデス。りりあから名前を教えて貰っ

た責任はえにぐまに返って来る。えにぐまが大変になるとはそういう事デス」

「えーっと……申し訳ありません。よく解らなかつたのですが」

「要するに、えにぐまはりりあの事をりりあと呼ぶ、それだけの話デス」

かなり端折られた気がするものの、それ以上説明を受けて理解できるか判らないリリアは、とりあえず頷いてみせた。

たぶん、追々判ることなのだろうと思いつては、吐息を一つ。

（何にせよ、今の私は魔道書<sup>グリモア</sup>。帰る場所は……此処以外にないのでしょーね）

自分の話を疑わないのか、そう名乗りの前にエニグマから尋ねられたリリアは、心の中だけでその答えを呟く。

疑う余地もない。

自分自身が彼の言葉を真実だと納得しているのだから。

乏しくとも存在する郷愁の念に、リリアは少しの間、目を閉じて思いに耽る。

### 葬送の花、めざめのうた その3（後書き）

「目覚めの葬送曲」これにて終了です。

リリアの経緯とエニグマとの出会いがメイン。

最初っからこんな関係の二人です。

次は大雑把な図書館内部の仕組みの話になります。

## ひとりのふたり その1

特に代わり映えのしない以前と同じ身体は勝手に作り出された擬態であり、本体は魔道書グリモアという何やら物凄い本だと発覚したりリアかといって彼女自身の知識量が増えたかといえはそうでもなく、それどころか今までの常識が通用しない場所に來てしまったせいで新しく覚えなければならぬ事が山のように増えてしまった。

放棄したくとも彼女の帰れる世界はすでに此処だけ。

唐突過ぎる展開には到底付き合いたい切れるものではないが、だからと悲嘆に暮れ続けるのも如何なものか。

それに、幸いにも彼女は今、独りではないのだ。

ヒトの規格には納まらない相手でも、この場所について知っている人がいるのは心強い。

だからリリアは真つ白な光の落ちるサロンの中、円卓を挟んだ真向かいに座る、爬虫類の鼻先と肌を持つ男へ声を掛けた。

「……あの、エニグマ？」

「にゃ？」

長身瘦躯の猫背が首を傾げれば、ギザギザしたシルバーグレーの髪から、ぼろぼろと花が滑り落ちていく。

完全に髪から離れたなら木造の床に落ちた分だけ、エニグマの頭にまた新たな花が飾られた。

改めて観察しても不可思議な光景に瞬き一つ、意識をそちらへ奪われたリリアは、気を取り直すようにわざとらしい咳を小さくすると、姿勢を正して頭を下げた。

纏まっっていないクロムイエローの髪が、リリアの左右の視界を遮るカーテンの如く、木造の卓上に流れを作って落ちる。

「お願いします。その、宜しければわたしに、此処の事を色々教えては頂けませんか？」

「やだ」

「……そうですか」

考える間もない即答に顔を上げたりリア。

先刻、目の前の彼から「嫌い」だと告げられたばかりだったため、絶る事は出来ないと思い、残念だと溜息をついて席を立つ。

椅子の背に回って静かに戻しては、サロンの光もすぐ呑み込んでしまふ、橙のランプだけが点々と続く本棚の方を向いた。

実際の時間では遙か昔、リリアの体感に置き換えてはサロンで目覚めるちよつと前、展開していた生死を分ける化け物との追いかかけっこ。

脳裏を過ぎつたあの時の恐怖に喉が鳴るものの、ここに留まっても収穫は何一つ得られないのだと自身に言い聞かせる。

（それに今のわたしは分厚い本なのですから、仮に化け物に遭遇しても食べられはしないはずです）

ぐつと握り締めた拳をリリアは胸の前に持ってきた。

本体である魔道書はリリアの意思に存在を左右されるようで、彼女が望めば出現し、望まなければ姿を消すらしく、今まで円卓の上に在った分厚い本はいつの間になくなっており、このためリリアは振り返る事なく本棚へと足を一歩踏み出した――のだが。

「きやうつ！」

いきなり後ろ髪を引っ張られては仰け反り、バランスを崩した身体が後方へ倒れかけたなら、鋭い爪の感触が背中に当てられた。

セレストブルーの大きな瞳をぱちくり、リリアが仰ぎ見た先には何故か不機嫌な顔つきのエニグマ。

これにより髪を引っ張ったのも背中を支えた手の主も彼だと判りはしたものの、理由の判らないリリアは支えられたまま問う。

「え、エニグマ？ 何を」

「りりあ、何処に行くデス？」

「ど、何処って……この場所を探索しに」

「どうして探索するデス？」

「どうしてって……此処の事を知るために」

「……にやあ」

「？」

こちらの問いには答えなくせに、逆に問い掛けてきたエニグマは、リリアの答えに不満そうな声を上げた。

次いでリリアの身体を元に戻しては両腕を組み、目元を覆う布で見下ろしてきた。

エニグマ自体を怖がる事はなくても、圧倒される大きさにリリアが一步下がったなら、大きな口の端が小さく下に向けられた。

「確かにえにくまはやだと言ったデス。でもリリアは諦めが早過ぎるデス。普通はもう少し食い下がるデス」

「はあ……言われてみればそうかもしれないね。命に関わる事や自分自身の事に関しては別ですが、事他人になるとーでも良いと言いますか、駄目なら駄目で仕様が無いと言いますか、かなり投げやりになるのは確かです。元々、他力を最初から当てにしない生活を続けてきましたから」

「それはつまり……駄目元でえにくまに頼んだ」

「いえ。そこは引き受けて下さると思ってお願いしました。エニグマの事は最初から当てにはしていませんよ？」

「にや……何故？」

手を上げて否定を告げるリリアに対し、エニグマが惚けたように首を傾げる。

いつもなら当てにしない他者からの問いを受け、リリアの方も似た様子で首を捻った。

エニグマの質問は尤もだった。

何せ当のリリアにも理由が判らないのだから。

けれども考える内ふと思い出したのは、エニグマのようにリリアの行動を気にする者がいなかった、今までの事。

共に暮らしていた女とは必要最低限の接し方しかして来なかったし、教師にしても物分りの良いリリアよりも問題児と呼ばれる子の方を優先して気に掛けていた。

同年代の子らは、夢のない未来をひたすら目指すリリアを尻目に、将来を夢見て今在る時間を共有していた。

当のリリアにしてみても、必要以上に誰かと関わろうと思うことすらなかった。

（こうして振り返ってみると、わたしって思っていたよりずっと……つまらない上に味気ない人間ですね）

それでも、こんなところに放り出されて心細くならないほど、図太い神経は持ち合わせていない。

（だからでしょうか？ 心細かったから、意思の疎通が出来るエニグマを頼ったのでしょうか。それともエニグマが気にしてくれたから？）

ぼつぼつ浮かぶ仮定の結論。

しかしどれも正しいようでいて、どれも不確かで、納得出来る理由にはならない。

エニグマの問い掛けに答えられる答えが現れず、段々とリリアの中に生まれていく焦りと不安。

元の世界では感じる事のなかった思いに戸惑ったなら、頭の上に大きな手の平が置かれた。

「え？——わわっ？」

わしゃわしゃ遠慮なく髪を乱す頭上の手。

引っ張られた身体にふらついたリリアは、その手を両手で押さえると、伝わる鱗の質感にエニグマを見上げた。

「エニ、グマ？」

「……判らないなら判らないでいいです。そんな根詰めて答えを探す必要ないです。答えがないよりも、泣かれる方が厄介です」

「泣く……わたし、泣きそうな顔をしてましたか？」

降ろした両手でぺたぺた水気のない顔に触れたなら、リリアの頭から手を離すエニグマ。

「りりあは……えにぐまをどう思っているです？」

「へ？」

頬に両手を当てたまま見つめた先で、また両腕を組んだエニグマがそっぽを向いた。

「えにぐまはりりあが嫌いデス」

「はあ。それは聞きましたけど」

「だから今度はりりあの番デス。りりあはえにぐまをどう思っているデス？」

「……………」

どういう流れでそんな話に至ったのか、リリアにエニグマの考えは理解できなかったが、質問の意味は判った。

そしてその答えは、エニグマを当てにした理由よりも簡単にリリアの口について出た。

「わたしはエニグマの事、嫌い、ではありません」

言い切れば、何故かほっとした息が自身の口から零れ落ちた。

不思議と緊張を解すそれに瞬けば、エニグマはふんつと鼻を鳴らした。

「なら、それが当てにした理由デス」

「え？」

「りりあは難しく考え過ぎてるデス。確かに世の中、複雑怪奇な事はたくさんあるデス。それでも突き詰めれば答えは案外、簡単なモノが多いデス。だからりりあがえにぐまを当てにしたのは、えにぐまが嫌いじゃなかったから、で充分」

「……はい」

ある意味エニグマの言葉はかなりの暴論だが、今のリリアには随分と優しく響く。

胸に手を当て、目を閉じて、小さく深呼吸したりリリアは、次いでにつこりエニグマに微笑みかけると、緩く首を振った。

「いいえ。やっぱり違います。エニグマの事、嫌いではない、ではありません」

「にゃ？ それでは嫌いになったのか？」

何故だか期待に満ちた顔つきで、嬉しそうに問い掛けてくるエニ

グマ。

喋り方も元に戻っていると気づかない彼へ、もう一度首を振って  
みせたリリアは改めて笑い掛けた。

「いいえ。勿論嫌いではありません。寧ろその逆。好き、です」

「……にやあ？」

目元を覆う布が怪訝に隆起する。

不快を表しているというよりも、いまいち意味が判らない具合の  
それへ、彼女は再度言ってやった。

「知り合ってそう時間も経っていませんが、わたし、エニグマの事、  
結構気に入っているみたいです」

「気に入っているって……り、りりあは可笑しい！ 変だ！ 被虐  
趣味だ！」

罪を糾弾するように、やや大袈裟に仰け反って声を荒らげるエニ  
グマに対し、眉を寄せたリリアは困惑を前面に出して首を傾げた。

「……どうしてあなたを気に入ったぐらいで、妙な言い掛かりを付  
けられなければいけないのでしょうか？」

「にやっ！ えにぐまはりりあを嫌いと言っているのに、りりあは  
えにぐまを、き、き、気に入ったと言う！」

びしっと目の前で指差す黒い爪。

これをそつと手で押さえたリリアは、尖端を嫌って横に避けた。

「ええ。気に入りました。だからわたしはあなたが大好きですよ、  
エニグマ」

「……」

連呼される嫌いを打ち消すように、大を付けてリリアはエニグマ  
を好きという。

無論、そこにあるのは親愛の情。

異性愛を語るにまだまだ欠点だらけの双方は、互いへの心を語り  
合ったところでその反応を別とした。

リリアは一貫して平然と前を向き、エニグマは居心地が悪そうに  
そつばを向いて。

かといってそんな膠着状態も長くは続かず、視線をエニグマから本棚の暗がりへと移したリリアは、ランプの明かりだけが誘うようにぼつりぼつり灯る通路にぐくりと喉を鳴らす。

そしてそのままの表情で、エニグマへと声を掛けた。

「……エニグマ、それでは」

「やだ」

「はい？」

先程と似た即答に一步進んだ足をよろけさせ、セレストブルーの瞳がぱちりと瞬く。

両腕を組み、つんと顔を逸らすエニグマを認めたなら、合点があったとリリアが転じて笑った。

「やだ、で結構ですよ。それではエニグマ、さようなら。色々ありがとうございました。機会があつたらまたお会いしましょう」

「やだ」

「……………」

別れの言葉まで否定されるとさすがに切ない。

それでも世話になったとエニグマの背中に深く一礼したリリアは、改めて本棚に向かって歩き始めた。

赤茶色のチェック柄のスカートが、規則正しく木造の床を叩く茶色いブーツに合わせて翻る。

スカートと同色のスカーフは、成長途中のカーブを描く胸の前で微かに上下し、白いブラウスの腕は靴音に併せて振り子を描く。

長いクロムイエローの髪は、ポケットに入っていた紐を用いてしっかり結び上げたため、簡単に解れる事はないだろう。

完璧なまでに己を律したリリアの姿は、しかし。

（えっと……このまま付いて行って良いのでしょうか？）

前方を見つめるセレストブルーの瞳だけが、どうしたものかと迷いに揺れていた。

理由は簡単。

今し方、リリアに向かって「嫌い」「やだ」を連発していたエニグマが、宙に浮く不可思議な明かりを横に、彼女の前を歩いているせいだ。

赤と黒の裾に連なる楽器をガチャガチャ慣らしながら歩くエニグマは、後ろのリリアを一瞥する事なく、確かな足取りで何処かを目指している素振り。

（うーん……嫌われている手前、付いて行くのはやはり良くありませんね）

たとえ本棚の通路へ進んだリリアを追うようにして通り過ぎたエニグマが、そのままの速度で去らなかったとしても、たまたま彼の目的地と重なっただけの事。

エニグマと違い、この図書館をよく知らないリリアは、だからと同じ道を歩くつもりもなく、ふらり傾ぐ動きで本棚の側面が続く通路へ折れた。

エニグマの横をふよふよ浮かんでいた明かりがなくなった分、ぐっと暗さの増した視界。

長身瘦躯の影を失い開けた光景は、どこまでも続く橙のランプと闇とに支配されていた。

（……よしっ）

今も残る化け物との追いかけっこの余韻に、震える手をぎゅっと握り締めたリリアは、今一度覚悟を決めると一步を踏み出す。

――が。

「え、え、あら？」

しゅるりと横を大きな影が通り抜けたかと思えば、追って前方、何故かそこにいる猫背の異形と連れの明かり。

もしかして、とリリアは思った。

（もしかしてエニグマ……道を間違ったのでしょうか？）

澱みない足取りだった事を振り返ると、あれだけ堂々と歩いた後の間違いは恥ずかしい。

ここは何も言わない方が賢明と考えたりリア、再度本の背表紙が向かい合う通路へ入った。

すると程なく、またしても後ろから現れた影がリアの前に躍り出てくる。

（また？）

視野を狭める細く長い背と、本を探すのに適した光。

エニグマの向こうに広がる暗がりを見なくて済むのはありがたいが、連続で前にやって来るのはどうした事だろう。

思いつつも三度目の正直、リアが側面へと方向転換したなら、二度ある事は三度あるとばかりに、エニグマと明かりが横を通り過ぎて目の前に現れる。

それでも構わず道を変更したりリア。

そんな彼女より多く動いているエニグマは、息を切らさず沈黙を保ちつつ、やはりリアの前へ明かりを引き連れてきた。

曲がる、影が通る、前が狭まる、曲がる、影が通る、前が狭まる

……

延々、このサイクルを十数回繰り返したところで、本体が本であるにも関わらず疲れてきたリアは、足を止めて本棚に背中を預けた。

息を整えてちらり、先程まで前としていた方角を見やれば、相も変わらずエニグマと明かりはそこにおり。

（……今度は戻ってみましょうか）

なんともなしに浮かんだ自身の提案へ、特に考えもせず乗ったりリアは、背中では本棚を押すとそのまま来た道に戻り、かけ。

「……エニグマ？」

さすがにもう来ないだろうと思っていた人物が、懲りずに背中を見せる前方へ、思わず声を掛けてしまった。

これを耳にしたエニグマの目元の布が、気まずそうに振り返るのを目にしたなら、リリアははっと気づいて尋ねた。

「もしかしてあなた……………迷ったのですか？」

「違うっ！」

途端に勢い良く振り返ったエニグマに併せ、裾の楽器がガチャガチャけたたましい音を立てる。

次いで怒り肩で近づいて来た彼は、気圧され怯むリリアの鼻先に黒い爪をぴつと当てると、牙のちらつく大きな口を近づけて言った。「りりあ、りりあは此処の事を知らないだろう？」

「は、はい。知りません」

「だから某<sup>それがし</sup>が先に行っているのに、さっきからりりあはふらふらしっ放し。ちゃんと某<sup>それがし</sup>の後に付いて来い」

腰に両手を当てて踏ん反り返るエニグマ。

爪が遠退いた事で動きを取り戻したリリアは、そんな彼へ困惑を浮べてみせる。

「え？　で、ですが、エニグマはやだと言ったではありませんか。

わたしの事だっで嫌い」と

「そうだ。某<sup>それがし</sup>はりりあの事が嫌いだ。思惑通りにいかないりりあは大嫌いだ」

「はあ」

「某<sup>それがし</sup>がからかってでも思い通りにならないりりあは気に食わない。意地悪しても気にしないりりあには腹が立つ」

「はあ」

「某<sup>それがし</sup>が一生懸命喋っているのに、そうやって気のない返事ばかりするりりあは嫌だ」

「……………」

エニグマは一方的にリリアが嫌いだという理由を上げていく。

これに対してリリアは徐々に何か可笑しいと気づき始めた。

リリアを嫌うエニグマ、けれども語られる理由は嫌いよりも寧ろ

……

（構って欲しい、という事でしょうか？ いえでも、それってなんだか子どもっぽくありませんか？）

口には出せない事を思いつつも、リリアはこれまでのエニグマとのやり取りを思い出す。

（……まあ、対応の仕方が大人だったかと問われれば、決して素直には頷けません）

男は幾つになっても少年の心を持っている、という言葉さえ霞む、エニグマ個人の幼さの滲む心。

それでも結論を出すにはまだ早いと、リリアは不貞腐れている様子のエニグマへ首を傾げた。

「でもエニグマ、また会いましょうと言った時、やだって言っていたじゃないですか」

「勿論言った。某はまた会うつつもりがなかったからな」  
それがし

ふん、と鼻息一つ。

では何故今こうしてここにいるのだろう、リリアがそう言葉を重ねようとしたりなら、両腕を組んだエニグマが横柄に続けた。

「また会うとは、別れてからする事だ」

「それってつまり……最初から付いて来るつもりだったのですか？」  
「違う。最初からリリアを案内してやるつもりだった」

「え？ ですが……教えて欲しいと言った時は、やだって」

「言った。でもその前にも言った。某は人をからかうのが好きだと  
なの（それがし）にリリアは無視した。からかうのが好きだと言ったのに、某が  
言ったやだを真に受けた。諦めるのが早いと言っても、当てにした  
と言ったくせに、一人で行こうとした」

（これは、つまり）

一度は早計と見送った結論が、間を置かずに舞い戻ってきた。

どうやら本当に、この異形の男はリリアに構って貰いたかったようだ。

異様に判りにくい上に面倒臭い手法を用いて。

「……エニグマ」

「にゃ？」

手を伸ばして交差するエニグマの腕に触れる。

エニグマに不思議そうな気配が滲めば、解けた腕に併せ、リリアの右手が彼の左手を追って掴んだ。

「では改めて、お願いします。どうかわたしに、此処の事を教えては頂けませんか？」

「にゃー。やだ」

結局変わらない返答、しかしてリリアは振り払われない手に笑い、エニグマの横に並ぶ。

「では、行きましょうか」

「……にゃあ？　りりあ、りりあは某の言葉<sup>それがし</sup>を聞いていたのか？」

心底呆れ果てたような声が上がから発せられ、見上げたリリアはにっこり微笑んだ。

「はい。でも、案内はして下さいでしょうか？　ありがとうございます

まず、エニグマ」

「……にゃあ。まあいい」

顔の向きをリリアから前に移したエニグマは、やれやれと言う素振りで猫背を更に縮めた。

項垂れているようにも見える仕草だが、グラスグリーンの手はリリアの右手を握り返している。

これへもう一度柔らかく笑ったりリリアは、歩き出すためエニグマと同じ前方を見やった。

先程からエニグマに付いて回る明かりがそんな彼女の視界も、横に付いて照らしたなら、ふと思い出したようにリリアは言った。

周囲は明るくなっても、薄暗いままの通路からは目を逸らさずに

「そういえばエニグマ」

「にゃ？」

「言葉遣い、元に戻ってますよ」

「にゃっ！？　そ、そんな事ない——デス。それ、じゃなくて、え・に・ぐ・まはっ、自分で決めた事は守っている、デス」

指摘すれば些かぎこちない返事。

それでも、多少偏屈でも、共に行動してくれるエニグマへ、リリアは前を向いたまま笑みを零した。

## ひとりのふたり その2

エニグマの横に付いて、幾度か不規則に本棚を曲がって行けば、眼前、開けた光景にリリアの目が大きく開かれてしまった。

サロン風の閲覧スペースにあった窓と同じ白い光を放つ、あれほど大きくない、一般民家と同じ大きさの窓が、本棚を背にした対面の壁に数点。

中央上方には何かの物語を描いたステンドグラスが、光の陰を床に落としている。

その手前では観葉植物の鉢が中央に一本道を作っており、他の空間はラウンジなのかソファーと足の低いテーブルが配置されている。観葉植物を目で追えば、五段程度の階段を経て、少し小高くなった位置——現在リリアが立つ床に到達。

鉢から四角い花壇へと足場を変えた緑たちは、これをリリアから見て左側に伸ばし、誰もいないカウンター前までの通路を作り上げていた。

そう、ここはどこからどう見ても、リリアが魔道書グリモアと衝突する前まで求めていた、図書館の玄関ホール。

中でも彼女の意識を奪ったのは真正面、左右と上方に窓とステンドグラスを従えた、重厚なその扉だ。

外へと続くであろう、図書館の出入り口。

リリアは知らず知らずエニグマから手を離すと、扉に向かって歩き出した。

これを止めなかったエニグマは、彼女の動きを追うように僅かに顔を動かすだけで沈黙を保ったまま。

さして時間を要さず扉の前まで来たリリアは、一瞬の躊躇いを見せて後、ゆっくりと金の長い取っ手に手をかけた。

深く息を吸い込み、吐き出し。

「ここを開けたら、何処に繋がるのでしょうか？」

押し引きせず、力も入れず、掴んだ手を上に滑らせたリリアは、そつと手を離すと名残惜しげに簡素な金細工へ指を這わせた。

つ……としなやかな指が取っ手を下へなぞり行けば、彼女の眩きを聞いて近づいたエニグマが、鱗を持つ長く細い指を扉に押し当てた。

「開けてみるか？　りりあが望めばこの扉は何処へでも繋がるぞ」

「……エニグマは？」

取っ手から離れたリリアの手が、赤と黒で構成されたエニグマの服を掴んだ。

仰ぎ見るセレストブルーの瞳に映るのは、色のない感情。

「エニグマが望んだら、この扉は何処へでも繋がるのですか？」

扉を前にしたところでもう帰る場所は此処以外にないと、今ではもう勘の域で実感していたリリアは、最初にその情報をもたらした異形の男へ問う。

彼がこのまま何処かへ行ってしまうのではないか、という不安を無意識に感じて。

そんなリリアの心を知ってか知らずか、エニグマは無情にも首肯する。

「にや。確かにえにぐまでも、この扉は何処へでも繋がられる。けど……論より証拠デス。開けてみるデス」

難なくそう告げた彼は、手に力を入れると扉を押し開けた。

「待つ——！」

心の準備が出来ていない、何よりもエニグマとの別れを怖れたリリアは、コート然の衣服に必死でしがみ付いた。

——のだが。

「あ、あら？」

エニグマが開けた扉の先にリリアが見た景色は、窓と同じ真っ白な光の壁。

意味が判らず上を向いたなら、安心させるようにリリアの頭へ手を置いたエニグマが、白い壁を向いたまま何やら楽しそうに言った。「確かにえにぐまが望めば、この扉は何処へでも繋がられるデス。普通は自分の存在する世界にしか通じていない、でもえにぐまは花竜<sup>フア</sup>なので自由に色々な世界に行けるデス。花竜<sup>ルフア</sup>の力はそれくらい強い。でも、だからこの扉は何処へも繋がらないデス」

「どうして？」

「えにぐまが望んだから」

「望んだのに、繋がらない？」

「逆デス。望んだから、繋がらないデス。お陰でえにぐま、とっても気分が良い」

「？」

にやり、何とも不敵に歪んだ大きな口を、内包する舌がべろりと舐め上げる。

血の滴る極上の獲物を捕らえたような肉食の気のある仕草。

リリアの目が丸くなれば、扉を閉めたエニグマは彼女の肩を両手で掴む。

ぐつと屈んだ至近の顔が、御伽噺の悪い魔女を連想させる声音で言った。

「りりあ、りりあ。りりあの怖れる顔、怯える目、縋る手、震える身体、竦む足……全部全部、えにぐまがもたらしたモノ。えにぐまがいなかったらなかったモノ。それがとても嬉しい。楽しい。そんなりりあは大好き、大好物デス」

「うひゃっ!？」

前触れもなく、べろんつと舐められる頬。

思わず首を竦めて睨んだなら、両肩から手を離れたエニグマは軽やかな足取りで来た道を戻り、愉快だと言わんばかりに一回転。

シルバーグレイのギザギザした長髪が舞えば周囲に花が散り、赤と黒の裾が翻れば楽器が煩く打ち鳴らされる。

「怒った顔も大変宜しい。喜ばしい!」

スカートのポケットに手をつ突っ込めば入っていたハンカチ。

これで舐められた頬を拭いていたリリアは、エニグマの悦の入りように、睨みを困惑に変えて尋ねた。

「エニグマ、あなた……実は変態さん？」

途端、エニグマはぴたりと止まり、油の切れたブリキのおもちやの動きでリリアに向かい合う。

ぎこちない足が一步近づけば、リリアは思わず仰け反り、そんな反応を受けてエニグマの腕が近くの観葉植物に伸ばされた。

背の高い彼では鳩尾辺りまでしか届かない植物の背。

これをぎゅーっと抱きしめたエニグマは、足りない丈を埋めるように植物へと顔を埋めた。

「……………」

一貫性のないエニグマの行動にますます困惑を強めたリリアは、ハンカチをポケットに仕舞うと、怯えた割にスムーズな足運びで彼に近づいていった。

するとこれを知ってか、植物を抱くエニグマの腕が更に締まっていく。

ヒト一人分の空間を開けて立ち止まったなら、植物の間から覗き込む形で、不可思議な紋様の描かれた目元の布がリリアを見つめた。  
「ようやくからかえたと思ったのに、やっぱりりりあは鬼デス。非情デス。冷酷デス。えにくまが自由に喜ぶことさえ邪魔するなんて」  
「からかわれていたのですか、私。それにしても随分な言われようですね。別に邪魔した覚えはありませんよ？　ただ、いきなり変な事をするので驚いただけです」

「にやあ？　変な事？」

自分より背の低い植物に顔を埋めているせいで、ほとんど頭を下にした状態のエニグマが、そのままの格好で首を傾げた。

楽とは遠い姿勢に、苦しくはないのかと訊きたくなったが、リリアは自身の頬を指差すと別の事を言った。

「わたしの頬、舐めたでしょう？　かなり変な理由で喜んで」

「変な理由……？」

「ほら、嫌がれるのが嬉しいって」

「それは……」

閉ざされた大きな口がもごもごと蠢く。

このまま待っているのもいいが、いい加減、ちゃんとした格好で話して欲しいと思ったリリア。

植物を抱く肘を引いたなら、縋りつくのを止めた腕がだらりと下に落ち、続けてエニグマの身体が短い階段まで移動、その上に腰掛けた。

リリアがこれを追い、真正面で立ち止まれば、エニグマの口から小さな溜息が零れた。

「喜怒哀楽……この内、喜と楽は一過性デス。長くは持たない。でも怒と哀はそこそこ持つ」

「……もしかしてそれが、からかうのが好きな理由ですか？」

エニグマがリリアに構って欲しいと思っていた事は察しが付いたものの、からかう理由はそれ自体が好きただけだと思っていた。

けれどもエニグマのこの言葉は、全てが誰かに——今であればリリアに構われないと響くモノがあった。

からかった相手が、怒るなり哀しむなりして、自分を見てくれる事を望んでいる、と。

リリアの仮定を肯定するように、エニグマは小さく頷く。

「そうだ。喜と楽よりも怒と哀の方が皆、えにぐまを憶えやすい。だからからかうのが好きだ」

「……嫌われてしまいますよ？」

くつと喉で笑う異形の男にぼつりと告げれば、勢い良く顔を上げた彼は、それ以上の笑みを向けてきた。

「望むところだ。嫌い、大嫌い、嫌悪感は大いに結構！ 刻々、移り変わる好意よりも好ましい！」

まるで舞台俳優のように、おどろおどろしくも恍惚を語るエニグマ。

対し、鼻面を合わせた至近のリリアは、そんなエニグマの様子に恐れを抱く事もなく、自身の顎に指を一本滑らせた。

「それってつまり、好きという気持ちが変わらなければ、やっぱり嫌われるより好きの方が嬉しいって事ですよね？」

「……にや？」

「あなたが先程わたしに言った言葉も含めて考えますと、エニグマは蔑ろにされるのが嫌なだけでは？ からかうのだって、その方が手っ取り早く相手の注意を自分に引き付けられますからね。袖にされるくらいなら、結果嫌われる方がまだいいって」

「……………」

図星を的確に指されたためか、ぐうの音も出ないといった面持ちで、エニグマの鼻先が気まずそうに下を向いた。

リリアはその様子に小さく安堵の息を零した。

「そうですか。それなら良かった」

「にや？」

ぽつりと落せばエニグマの顔が不思議そうに上がる。

吐息をつくように微笑んだリリアは、ダンスに誘う仕草でエニグマに向かって両腕を伸ばした。

「だってわたし、本当にエニグマの事が好きでしたから、好きと言われる方が嫌い、嫌いと言われる方が好きだと聞いて、かなり困っていたんです。エニグマがそういう性癖の方だったなら、真実を捻じ曲げ、嫌いだと告げた方が良くのことも考えました。でも嘘は嘘です。いつか綻ぶモノですから好きという思いがある以上、どうしましょうか、と」

「りりあ……りりあはどうして、知り合ったばかりなのにえにくまを好きと言う？」

今更ながら至極尤もな質問を受けて、リリアの目がきょとんと瞬く。

しかしそれは同時に、エニグマを頼ろうと思った理由にも繋がるため、そこに迷っていたリリアはぱっと答えられなかった。

考え込む視線が伸びたままの己の腕を捕らえたなら、これを降ろして腕を組む。

「うーん。たとえばわたしがこのまま倒れるとして」

「にゃ？」

「エニグマはどうしますか？」

「どう、と聞かれても……その時に為らなければ判らないが、たぶんえにくまは倒れないようにりりあの腕を掴むデス」

「何故？」

「それは勿論、えにくまがそうしたいからデス」

「うん。だからわたしはあなたが好きなのだと思います」

「……にゃ？」

理解に苦しむと顰められる顔つきへ、腕組みを解いたリリアはふつと笑った。

「あなたは放っておかないでしょう？ 一人でいよとするわたしも、無茶しようとするわたしも。それも思惑があつての事ではなく、極々自然に」

「……えにくまは、えにくまのやりたいようにしているだけデス」

「ええ。だから大好き」

しれっとリリアが答えたなら、目元の布を隆起させてますます不可解だという顔をするエニグマ。

それでも一応の納得を見せるように深く溜息をついたエニグマは、階段から立ち上がると、忘れていた身長差で数歩下がったリリアの頭へ軽く手を置いた。

「エニグマ？」

「りりあ。さっきのたとえだが」

「はい」

「本当にやるな」

これまで聞いてきたエニグマの声の中で、一番真剣に届いた音色。目を丸くしたリリアは圧倒されたように頷くと、はっと我に返った顔をして苦笑を象った。

「ええ勿論。でもほら、わたしの本体は本ですから、問題は何か」

「ある。問題は太アリだ」

「え……？」

被さる手の平により、エニグマの顔は見えないものの、諭す言葉には苦みが滲んでいる。

「確かにりりあの本体は魔道書だが、りりあの精神はりりあの擬態によく馴染んでいる。擬態が精神の記憶する痛覚を刺激すれば、本体に傷が付かなくても、りりあはとても痛いと感じる」

「痛みだけ、ですか？」

「そう、痛みだけ。身体の何処を吹き飛ばされても、すぐに擬態は再生され痛みも感じなくなる。本体が魔道書ゆえに死にもしない。だが、その時感じた痛みはりりあの中に残るだろう。りりあは想像できるか？ どれだけ傷ついても痕跡も、治る過程もない恐怖を。記憶にしか存在し得ない苦痛を」

まるで自身こそがそういう身体だと言わんばかりに、エニグマは辛そうな声を発した。

当のりりあは問われた想像など出来なかったが、そんな彼の様子を受け、神妙に頷いてみせた。

エニグマの言葉が示す痛みは判らずとも、案じられていると判つたために。

置かれた手の中でりりあが頭を軽く弾ませれば、やや乱暴に撫でられる。

纏めたクロムイエローの髪が少しだけ解れてたものの、退いた手の先で満足そうなエニグマを認めたりりあは、文句もなく似た顔で笑い返す。

次いで仕切り直しと辺りを見渡したりりあ。

本棚の通路を歩いている際、常にふわふわ傍にあった光の綿毛がない事に気づくと、エニグマを見上げて首を傾げた。

「エニグマ、先程のふわふわしたのは」

「ああ。わんこデス。あつちに戻ったデス」

「あれが、わんこ……？」

リリアのいた世界とは違う形を指す言葉にますます首を傾ければ、半身を逸らしたエニグマが黒い爪をカウンターへと向けた。

これを追ってリリアもそこを見るのだが、入って来た時同様、カウンター内には誰の影もなかった。

「見ての通り、ここはこの図書館の玄関ホールデス。先程も言った通り、その扉は色んな場所に通じているデス。力のある者ならどんな場所にも行けて、力がそこまでない者は此処と自分の世界しか行き来できないデス。でもって、来館者<sup>ビジター</sup>はまずカウンターを利用するデス。最初から本を探しに行つてはいけないデス。迷子になるデス」

「……要するに、わたしは最初の手順を間違つたから、こうして此処に、魔道書<sup>グリモア</sup>として存在する羽目になつたわけですね？」

誰に確認するでもなくげっそり口にしたなら、カウンターを向いていたエニグマの顔がリリアへと向けられた。

「にゃ？ りりあ、りりあはカウンターを利用しなかったのか？」

「ええまあ。わたし、此処が別の世界だと知らないで入つて来たのですよ。てつきりいつも利用していた図書館だと思い込んで、そのまま」

「にゃー。そうか、それは大変デス。りりあは放浪者<sup>ワンダラー</sup>だったデス。時々いるデス。そういう、ついてない者」

「っ、ついていない者……」

薄々そうだろうなーとは思っていたリリア。

かといって、他者から言われる破壊力は絶大である。

嘆いたところでどうにもならない不運に黄昏た笑みを浮べたなら、リリアのショックを余所に、エニグマがカウンターへと移動し始める。

頂垂れつつもこれを追ったりリリア、カウンターの前で止まっただのに合わせて足を止めた。

エニグマの通つた後に続く花を辿っていた眼が、シルバーグレイ

の髪から飛び出す爬虫類の鼻面まで上がる。

「カウンターについたらまず、このベルを鳴らすデス」

見計らったタイミングでエニグマの手がすっぽり覆ったのは、リアの手に置き換えるとやや大きい、カウンターに設置された卓上式のベル。

りんりん、と高く涼しげな音色が弾む手に合わせて鳴ると、カウンターの向こうから音もなくやって来た者がいる。

体格はエニグマと同じくらいで猫背も似たような形。

黒い蝶ネクタイの礼服を着用しているその顔は、やはりエニグマと同じで、人間とは呼べない風貌だ。

だからとエニグマに似ているわけでもなく、近い形を上げるなら猫の頭部、それも目も口も鼻も耳も、全てを真っ黒に塗り潰された顔をしている。

そんな相手がカウンターに置いた手は、形だけエニグマとそっくりな、顔同様真っ黒な色。

得体の知れない分、エニグマよりも鋭く見える指先に、思わずリアがエニグマの肘を掴む。

と、これを見やるエニグマに合わせて、カウンター越しの存在がこちらを向いた——気がした。

眼差しのない視線にビクつくリアに対し、エニグマは安心させるように首を緩く振った。

「りりあ、怯える必要はないデス。これは影<sup>シャドウ</sup>。このベルを鳴らした相手の意を汲む者デス。りりあも鳴らしてみるデス」

言っンてベルから退けられるエニグマの手。

返したその手でベルを鳴らすよう促されたリアは、影<sup>シャドウ</sup>と呼ばれた存在の動きを警戒しながらも、エニグマを掴む手とは逆の手を恐る恐る、胸の高さにあるベルへと伸ばした。

りん、と弱々しく打ち鳴らしたのを耳にし、リアは素早く手を引っ込めた。

そうして人見知りする子どものようにエニグマの後ろにささっと

隠れたなら、時を要せず現れる、佇んだままの影とは違シャドウう姿。  
いや、姿は同じなのだが、その大きさがエニグマの呼んだ影とは違シャドウった。

体格は小柄ながら、しゃんと伸びた背筋。

だというのにカウンターまでやって来ては、先に来ていた影シャドウの腰に抱きつき、甘える仕草で身を寄せると、「この人たちだあれ？」と問うように小首を傾げてみせる。

（うつ。な、何故でしょう？ 何か物凄く、恥ずかしいのですが…）

片やエニグマの服を掴んでいるだけのリリア、片や恋人のように抱きついていて小柄な影。

違う仕草のはずなのに、まるで鏡を見ている錯覚に陥ったりリアは、ゆっくりと手を離していく。

すると同じ動きで小柄な影が影シャドウから離れた。

「……………」

じーっとリリアがその場で見つめたなら、小柄な影もじーっとその場でこちらを見つめてくる。

「りりあ」

エニグマに名を呼ばれそちらを見上げかけたリリアは、視界の端で小柄な影が動いたのを知るなり、見下ろす彼から視線を逸らした。するとまたしても同じ動きをする小柄な影と、交される視線。

異なるのは、先程はリリアを見やったエニグマに倣いこちらを見できた影シャドウが、彼の動きを追わずに小柄な影の方を見つめているところか。

しかもエニグマがリリアをただ見つめているだけなのに対して、影シャドウの方は小柄な影の気を引こうと、睦み合う恋人宜しく軽いボディタッチを熱心に繰り返している。

見る人が見れば、いちやつくバカップル然の二つの影。

恥ずかしさだけが募る現状に、視線をエニグマへと逸らしたりリアは、若干頬を紅潮させながら影たちを指差した。

「……エニグマ。あの小さいのシャドウも影なのですかっ？」

「そうデス。あれはりりあの影シャドウデス」

リリアが声を荒げたところで我関せずのエニグマは頷くと、カウンターに近寄っていく。

この動きに合わせ、何故か直前まで首にぶら下がる小柄な影シャドウを抱き締めていた影シャドウが、小さな身体をそつと下ろしてはカウンター越し、エニグマと対面する。

けれども前を向くエニグマとは必ずしも動きを一にせず、影シャドウはちらちらと小柄な影シャドウを気にして後ろを見やっていた。

（影の行動の全部が全部、そうだとは思いたくありませんが。ベルを鳴らした者の意を汲むなら、エニグマもわたしが近くに来るのを望まれている、という事でしょうか？）

そう思ったならリリアの足は自然とエニグマの横まで近づき、小柄な影シャドウもその動きに合わせてエニグマと向かい合う影シャドウの隣、リリアの真向かいまでやって来る。

「りりあ。影シャドウと握手」

「え？」

見ればエニグマの手が向かい合う影シャドウに伸ばされ、影シャドウの方も同じようにエニグマへ手を伸ばしている。

いまいち判然としない顔つきのリリアだったが、澱みないエニグマの動作に引き摺られる形で、自分も向かい合う小柄な影シャドウへと手を伸ばした。

同じく伸ばされる小柄な影シャドウの指が触れ、皮膚が擦れ合う。

しかしてその情報は視覚だけがもたらすものであり、触感には何も引つ掛からなかった。

現実味に欠ける不可思議な感覚に戸惑いを見せつつも、リリアと小柄な影シャドウが握手を交わしたなら。

「絶っつ対っ！ 家には帰らなくてよっ！」

小柄な影<sup>シャドウ</sup>がみるみる内に姿を変え、光るタンポポの綿毛——エニ  
グマ言うところのわんこになった場面を見逃したりリア。  
その原因である、いきなり開かれた扉からの宣言に、目を真ん丸  
くしながら振り返った。

## 小さな訪問者 その1

リリアとエニグマ。

これまでこの二人しか言葉を発さなかった図書館の中に、新しく響いた第三の声。

臆せず堂々と玄関ホールに足を踏み入れたその人物は、扉の閉まる音にふんつと荒い鼻息をつくと短い階段を登り、チョコレート色のくりくりした瞳をカウンター前にいる、リリアとエニグマに向けてきた。

「……あら？ 先客がいらしたのですね。それなのにあたくしったら。お騒がせして申し訳ございません」

「あ、いえ」

立ち止まり、急にしおらしく下げられた頭に、軽く手を上げて答えたのはリリア。

セレストブルーの瞳を瞬かせた彼女は、薄青を基調としたフリル満載のドレスを纏い、同色のレース仕立ての日傘を差す相手の姿をまじまじと眺めた。

ブラウンの垂れ耳にハニーエローの長い髪。

地肌は髪と同じ色の毛に覆われているが、短く刈り込まれているため、少しばかり色が薄く見える。

リリアより長めの鼻先ではあるものの、一番近いと思われる犬の顔にしては中途半端に短かい。

声の質は幼い少女のソプラノで、観葉植物を横にした身長も彼女の齢を7〜8歳くらいだと告げていた。

あくまでそれは、リリアの感覚を基準とした話だが。

兎にも角にも、頭を下げた少女は差していた日傘を折り畳むと、

爬虫類の皮膚を持つエニグマより判りやすい微笑みを象る。

「お初にお目にかかりますわ。あたくし、プリマ・エナ・ルディア・タ・レ・デ・ソルシエーテ・スフェラムリアドル「コオーライム・

デュフォ・レマーニヤルフレミアデルテと申します。以後、お見知りおきを」

そうしてスカートを広げた少女は、上品な仕草で礼の形を取った。彼女の名前を追うだけで一杯一杯になっていたリリアは、この礼に対して慌てて頭を垂れる。

「わ、わたしの名は――」

「りりあだ」

名乗ろうとした声に被さる、エニグマの声。

自分の名前が魔道書グリモアの真の名に直結する事を思い出したりリアは、己の軽率な行動にはつとして口を押さえた。

エニグマにはそれなりの覚悟を決めて教えた名は、手にした者のどんな願いでも叶える魔道書グリモアの力を、リリア自身が名を教えた相手に貸してしまう事になるのだ。

新しい世界を創造する事も破壊する事も出来る魔道書グリモアの力は、おいそれと他者に与えて良いものではない。

けれども少女はその様子も含め、名乗りに被さったエニグマの声さえ気にせず、リリアへと首を傾げた。

「リリア様、ですか？ 名字は」

「あ、その、わたしに名字はありませんので」

「そう、でしたか。これはまた、不躰に申し訳ございません」

「いえ、そんな」

どこまでも礼儀正しく接しようとする少女の姿勢に、名字があるのは貴族だけという認識の下、リリアが更に恐縮して首と手をぶんぶん振ったなら、そんな彼女の隣にいたエニグマがふっと小さく息を吐き出した。

「りりあ、わんこも受け取ったデス。さっさと行くデス」

「え？」

振り返り見上げれば、エニグマの指に絡みつく、光る綿毛の茎部分。

そつえば、と先程から自分の指にも何かが絡みついている感

を追いつちらを見やったりリアは、握手をした影の代わりに在る綿毛を認めて目を見開いた。

「影が、わんこ？」

「少し違うがそうデス。影はベルを鳴らした相手の情報、わんこはその情報を元に作られる道案内デス。図書館は広いから、回る時にはわんこが必要になる。まあ、りりあはその内、わんこがなくても平気になるだろうが……兎も角、わんこを入手したなら、ここにはないデス。とっとと行くデス」

「わわっ、エニグマ？」

リアの肩に両手を置いた背後のエニグマが、ぎゅうぎゅう前に押してくる。

逆らうつもりはないものの、長つたらしい名前の少女を無視する様子に戸惑う足が、鈍い動きを示していた。

けれどもエニグマの力には敵わず、少女を横に後ろにと移動した矢先。

「お待ちなさい。あたくしを無視するとは何事ですの、エニグマ」

「え、お知り合い？」

少女から名前を呼ばれたエニグマ。

振り返ろうとするリアを手に若干力を込めて留めた彼は、後方の死角で、小馬鹿にした声を少女に向けた。

「人違いデス。えにぐまはお前さんみたいなちんちくりん知らないデス」

「ちんちくりん……」

「ん、まあっ！」

少女の憤慨する声が聞こえたなら、更にエニグマは楽しそうに続けた。

「お前さんが自分のドレスに足を引っ掛けてよく転ぶ事も知らないし、お茶の時間に落とした砂糖を眼で追ってバランスを崩しテーブルを引っ繰り返した事も知らない。エントランスの階段を登ろうとして一段踏み外した拍子に無理して履いた靴のヒールが折れた事も

知らないな。あと、社交界デビューの日に何度も相手の足を踏んづけて病院送りにした事も知らない」

「それだけ知っていれば充分ですわっ！」

「やれやれ。だからえにぐまは知らないと言っているのに。お前さんは相変わらずそそっかしいな、プリマ」

「~~~~~!!」

完全にエニグマのペースに乗せられた少女が、声にならない声を上げる。

これを涼しい顔で受け流しているだろうエニグマは、そんな彼女の反応に満足したのか、再びリリアの肩を押し始めた。

「エニグマ……もしかして今のはからかわれて？」

「フフフ。プリマの相手はいつも愉快デス。りりあもあれくらい怒れば張り合いがあるデス」

「……無理ですね」

ちらりと肩越しに振り返ったなら、エニグマを睨みつけつつ、悔しいとハンカチを噛む姿がある。

あそこまで如実に自分の感情を表せる自信のないリリアは視線を前に戻すと、本棚へ戻る視界に今一度、玄関ホールへ目を向けた。  
（何処にでも繋がる場所。でもやはり、わたしの戻る世界は此処だけ、ですね）

誰に言われるでもなくそう感じたリリアは、出口を見た事で微かに現れた未練を断ち切るように、薄暗く続く本棚の通路を真っ直ぐ見つめた。

エニグマに押されるまま、一つ増えた事で更に明るくなった綿毛の光を左右に、本棚の通路を歩き続けるリリア。

今度は何処へ行くのだろうと背後を見上げれば、リリアに合わせて低い位置でふよふよ移動するわんこにより、いい感じに陰影のついた爬虫類の鼻先と遭遇。

正体は分かっているもおどろおどろしく見える異形に、ゆっくり顔を戻してから、前方に向けて問いを發した。

「エニグマ、次は何処に？」

「本棚以外のところデス。此処にはリリアが目覚めたところや玄関ホール以外にも、光の差す部屋があるデス。その辺をざっと回るデス」

「そう、ですか。……ところでエニグマ？」

「にゃ？」

「先程から気になっているのですが、何故、何度も曲がるのでしょうか？ 方向が同じなら、真っ直ぐ歩いた方が楽ではありませんか？」

右に曲がったかと思えば左に曲がり、かと思えば左に曲がって右に曲がるを繰り返す。

来た道に戻る事はないが、コの字を描く動きには無駄しかない。

そんなリリアに対し、背後のエニグマが小さく息をついた。

「ひたすら真っ直ぐは迷子コースデス」

「迷子コース？」

「そうデス。……この図書館の蔵書は、ありとあらゆる世界で生まれた本デス。正確には、その本の内容だけを写し取った複製。だから皆、厚さの違いはあっても同じ種類なら、ほぼ同じ装訂をしている」

エニグマの右手が顔の横を通って本棚を示す。

これを目で追ったりリリアは、どこまで行っても均一に並ぶ背表紙を認め、彼の言が正しいと知った。

（最初に来た時も、似たような背表紙ばかりと思っていました、そういう事だったのですね）

納得を伝えるように首肯したなら、右手を再びリリアの肩に戻したエニグマが先を続けた。

「一口に複製と言っても、ただ単に文章を写し取っただけではないデス。たとえばその本に魔力が込められていた場合、その魔力こそつくり複製してあるデス」

「それって……大丈夫なのですか？」

「勿論、そのままでは駄目デス。良からぬ輩が使う可能性もある。その本が生まれた世界でその本が災いを起こすなら兎も角、複製とはいえ別の世界で生まれた本が、原作が生まれた世界であっても別の世界に災いを起こすのは良くないデス」

「では、その本なら災いを起こしても良いと？」

「良い、という訳ではないデス。でもそれは、その世界の者が何とかするべき事柄であつて、この図書館が負つて良い事象ではない、という話デス。ちなみに本の行使が直接災いに繋がらなければ、此処の本はどれでも貸し出しできるデス」

「たとえば？」

「ある世界にとつても悪い奴がいたとする。でもソイツは病気で長くない。部下がその病気を治す本を探しに此処へ来る。結果、元氣になった悪い奴がその世界を滅ぼす。これは可デス」

「……本当に、直接じゃなければ何でも良いのですね」

「そうデス。言うなれば地産地消デス」

「嫌なたとえ方しないで下さい」

「りりあがたとえろと言つたのに、りりあは我が俥デス」

「……………」

言われてみればそうかもしれない。

反省の意味も兼ねて口を閉ざしたなら、その沈黙をどう思ったのか、エニグマの手が固くもないリリアの肩を突然揉み出した。

「……ふっ。え、エニグマ、くすぐりたいです」

「ふむ」

身を振ると止まった手に続き、些かほつとしたような吐息が纏め上げた髪を掠めた。

これがどういう意味なのか思い当たつたリリアは、肩を掴んだま

まの手にそつと己の手を置いた。

「別に怒ってはいませんよ」

「……怒るのは構わないデス。でもだんまりは嫌いデス。りりあは判ってないデス」

「そうですか。今度から気をつけますね」

「にやあ」

頭に軽く乗せられる、長い鼻面の顎の感触。

決して重くはならないそれに小さく笑ったリリアは肩から手を降ろすと、話の最中にも進む前方を見やった。

「それで？ その話が迷子コースとどう繋がるのですか？」

「にや。なのでそういう本を使わせないためにいるのが、<sup>シャドウ</sup>影デス。

<sup>シャドウ</sup>影は相手の情報デス。その望みが有害と判断されれば、<sup>シャドウ</sup>影と握手しても<sup>道案内</sup>わんこは現れない仕組みになっているデス」

「……ああ、なるほど。それで迷子コース、ですか」

話の途中で理解したリリアに対し、その頭から顎を除けたエニグマは、それでも先を続けて言った。

「そうデス。わんこが使えない者で諦められない者は、自力で本を探しに行こうとするデス。そしてその大半がまず真つ直ぐを目指す。だから図書館はそういう連中を迷子にするデス。ちなみに今と同じ動きでカクカク曲がっても、正しい道順じゃないとやっぱり迷子になる。この動きはショートカットも兼ねているからな」

「ショートカット？」

リリアが首を傾げれば、ぴたりと足を止めたエニグマ。

どうしたのだろうと眉根を寄せたなら、横からにゅつと長い鼻面が現れた。

「りりあ、その本の背表紙を見てみるデス」

くいつと顎が指し示したのは、本棚の側面を歩いていたリリアの右斜め前方にある本棚。

曲がらなければ取れないそれに目を凝らしたリリアは、ふと思いつて横にあるエニグマの顔を見つめた。

「本の背表紙つて、どれを？」

「どれでもいいデス。ただ、何段目の何冊目か、場所をしつかり憶えとくデス」

「はあ」

言われるがままリリアが記憶したのは、目線の高さにある六段目の、仕切り板から五冊目の本。

リリアの知らない言葉で書かれた背表紙だったが、グリモア魔道書のお陰か読む事は出来た。

その名も”法の限界と可能性”。

何とも堅苦しい題名である。

もし、この図書館にある本を全て読み終えたとして、リリアが手に取る事はまずないだろう。

彼女が脇目も振らずに勉強していたのは必要だったからであつて、こういう本を読みたかつた、この本が示唆するであろう職に就きたかつた訳ではないのだ。

「憶えたか？」

「ええ」

とはいえ、憶えるのにこれほど適した本はあるまい。

エニグマの問い掛けにリリアが領けば、顔を引いた彼は、歩みを再開させるべく肩を押し始める。

これに倣い、同じように歩き始めたなら、角を曲がってすぐ、立ち止まったエニグマの顔がまた横にやってきた。

「ではりりあ、もう一回見てみるデス」

「はあ——ぶっ!？」

気のない返事で記憶の中にある本の位置をもう一度眺めたりリアけれども盛大に噴出しては、みるみる内に顔を真っ赤に染め上げていく。

「な、ななななあっ!？」

思わず指を差して段数と並びを確認しては、場所に間違いはないと知り、余計に混乱してしまった。

そんなリリアの様子に、指された場所を見たエニグマが問題の背表紙を読み上げていく。

「じつろく・ひるさがりのじょーじ、あるひとつまの——」

「エニグマっ！　こんなの読み上げてはいけません！」

大急ぎでエニグマの大きな口を両手で閉じさせたリリアは、そのままの状態で数歩進むと、離れた手を両頬に当てて頂垂れる。

「ど、どうして題名が変わって？　しかもよりにもよってあんなのに」

「りりあ、りりあ」

「……はい？」

げっそりした顔で未だ横にある鼻面の先、紋様の描かれた目隠しを見つめたなら、何やら楽しそうな様子でエニグマが問うてきた。

「じょーじって何だ？」

「うう……知りません。答えたくありませんっ」

「じゃあ、その題名は？」

「そこ？　……………げえ」

ついと指差されてそちらを見やったりリリアは、並ぶ題名に目を走らせて低く呻いた。

顔色が悪くなるような声を上げつつも、肝心の頬は紅潮するばかり。

対し、益々上機嫌になったエニグマは、舌なめずりをするように別の質問を仕掛けてくる。

「りりあ、りりあ。大人と子どものおもちあの違いって何だ？」

「エニグマ……知ってて言っているでしょう？」

赤い顔のままじとりと睨みつけると、エニグマは悪びれもせず口の端を上げて笑った。

「男女の違いが判らずとも、えにぐまは大人だからな。その点、りりあは女としての身体を持っているがまだまだだ。照れが入るからには知識はあるようだが、こういうのを青い果し——」

「それ以上言うなら、エニグマとはもう口を聞きません！」

「にや！？ それは困る！」

愉悦混じりだったエニグマが、一転して困惑を映す。

更にリリアがぷいっと顔を背けたなら、異形の男は焦りを見せ始めた。

「り、りりあ、りりあ？ えにぐまはからかっただけで」

「そういうからかいは犯罪です。後ろから刺されても文句は言えませんかよ？」

「後ろから刺されてもえにぐまは平気だ。でも、りりあがそこまで嫌がるならもうしない」

「……約束出来ますか？」

「約束する、約束するデス」

顔の横で何度も首を縦に振るエニグマ。

ここまで必死にされると、段々こちらが悪い事をしているように思えて来るから不思議だ。

からかわれていたのはわたし、そう自分に言い聞かせつつも、結局申し訳ない気分が抜けなかったリリアは、宥めるようにエニグマの手に触れた。

「では、この話はここまで」

「許してくれるのか？ もう怒っていないか？」

「ええ。……でもとりあえず、ここからは移動したいですね」

「判った。移動するデス」

あからさまな安堵の息をついたエニグマは、リリアの訴えを簡単に受け入れると、彼女の肩を押して前に進んでいく。

自分の何がここまでエニグマの感情を左右しているのか、さっぱり判らないリリアは、それでも遠退くいかがわしい背表紙にほっとする。

双方、しばらく本棚の通路を黙々歩いて行けば、ふと思い出したようにリリアが尋ねた。

「あの、エニグマ？」

「にや？」

「それでその……先程の背表紙はつまり、ショートカットした、という事なのでしょうか？」

変化後の背表紙の内容が内容なだけに、すっかり失念していたものの、リリアの意識をそこへ向けさせたのは、前後の話を思い出すにショートカットについてだったはず。

これを受け、リリアの背後で頷いた気配のエニグマは、黒い爪先を本棚と通路の境へ向けた。

「薄暗い照明と同じ配置の本棚は、ショートカットできる場所を特定させないためデス。余程目が良くなければ、この空間の歪みは判らない仕組みデス」

「ということは、よく見えるエニグマには判るのですか？」

リリアの体感にして気を失う少し前、実際の経過時間にして遥か昔に落とした眼鏡。

その結果生じた勘違いに際し、自身の目元を覆う布についてエニグマは、よく視えてしまうから覆っているのだと言っていた。

目隠しをしても見えるらしい視え方とはどういうものなのか、さっぱり理解出来ないリリアだが、こういう事ではないだろうかと指摘すれば、エニグマは思いのほかあっさり肯定した。

「判るデス。でも、ショートカットの位置は時々変わるので、判ってもわんこがいないと目的地はさっぱりデス」

「位置が変わる？」

「そうデス。ショートカットには出現条件があるデス。何処其処を手順通り通らなければいけない、という。そしてえにぐまのように視える者もいるため、その手順は定期的に変わっているデス」

「なるほど。万全の態勢ですね」

「……まあ、それでもその手の本を持っていつてしまう者はいるがな」

「……………」

感心した途端にぼそりと付け加えられた言葉。

何も言えなくなってしまうたりリアは、エニグマの嫌う沈黙を保

つが、それを気にする前に彼の指は次に曲がる方向を指差した。

リリアの目がそちらを追えば、見える景色は暗がりではなく、白い光が滲む通路。

痛めるほどの強さはなくとも、眩む経験から自然とリリアの目が細められたなら、その横でエニグマが小さく囁く。

「数ある読書スペースの内の一つです。見た通り――」

柔らかな光に怯えなくても良いと知った瞳が通路の先を映せば、そこにはサロン風の読書スペース同様大判の絵本が収納された本棚があり、

「小さな子ども用です。まあ、この図書館の利用者には、あまりいない年齢層ではあるが」

エニグマの言う通り、大きな室内にはいかにも子どもが喜びそうな、カラフルな遊具が設けられていた。

## 小さな訪問者 その2

子ども部屋や喫茶店のカウンター、外に出てしまったのかと錯覚させる丘、リリアの通っていた学校によく似た教室等々。

本当に図書館の中なのかと疑いたくなる、それら全ての空間を閲覧スペースだと言い切ったエニグマは、最後に壁を本で覆われた螺旋階段の先、塔の中を思わせる石造りの小部屋までリリアを案内すると、サロン風の閲覧スペースに戻った。

これでざっと見て回ったという彼に対し、人間の感覚が抜け切らないリリアは歩きっぱなしの足を労わるように椅子へ腰掛ける。

——と、ここに来て彼女はようやく、その存在に気づいた。

「す、こし、はっ！ き、づいてくれてもっ、よ、良いのではっ、ないかし、らっ！？」

「あなたは……えーっと、プリマ——何とか様」

「ぶ、プリマで、結構！ 様、もっ、いいません、わ！」

暗がりからよけ出てきたプリマは、もう歩けないとばかりに膝から崩れ落ちると、フリル満載の薄青のドレスの裾を、折り畳んだ同色の傘共々ぎゅっと握り締めた。

「くうっ！ い、忌々しいこのドレス！ 歩き辛い事この上ありませんわっ！」

先程は見えなかった銀細工のバレッタが、憤りに振られるハニ―イエローの髪の中で、散りばめられた宝石をキラキラと輝かせる。

ドレスに合わせたと思しき色は、幼いプリマが着けるには些か華美が過ぎるものの、数年後の彼女ならば似合うに違いない。

ただし、甘さを前面に押し出したドレス自体は、今の彼女が一番着こなせているだろうが。

だというのに、これを破く勢いで気に入らないと叫ぶプリマ。

余程の事情があるのか、それともお嬢様の気まぐれというヤツなのか、判断しかねるリリアはどうしたら良いだろうと迷い、彼女と同じテーブルの椅子に座ったエニグマは対照的に、迷いなくプリマへ嘲りに似た言葉を掛けた。

「歩き辛いなら着てこなければ良かっただろう」

「仕方ありませんわ！ これくらいしか、動きやすそうな服がなかったのですから！」

（歩き辛いのに歩きやすい。矛盾する主張ではありますが、つまりはこのドレスがプリマさんの衣装の中で一番の軽装……それはさすがに嫌ですね）

行かず後家とまで言われていた勉強漬けの日々があったとしても、今や正体が本だったとしても、一端の年頃の少女である事に変わりのないリリア。

美しいドレスを一度で良いから纏ってみたいという願望はなきにしもあらずだが、だからといってプリマの衣装を基準として選べと言われたら、丁重にお断りさせて頂く。

それくらい、似合うに合わないは別として、プリマの比較的動きやすいドレスには自由がなかった。

元より遠い姓のある家柄では、このドレスを上回る動き難いドレスなど、一庶民のリリアには想像も出来ない。

けれどもリリアはここで、別の可能性に行き当たる。

（すっかり失念していましたが、わたしの基準が必ずしもプリマさんに当て嵌まる訳ではありませんね。もしかしたら、貴族以外の方も姓を持つ世界からいらしたのかもしれませんが、デザインは兎も角、上質そうな生地もそれが当たり前という場合もあるでしょう）

この衣装で庶民というのは釈然としないものの、世界が違えば基準も違うのだらうと思った。

勿論、プリマが貴族であるという可能性も捨てていない。

捨ててはいないが、幼い外見にそぐわない喋り方を考慮しても、

プリマの親しみやすさはリリアの知る貴族とはかなり違う。

（ああ、そうです、そうでした。外見にしても、プリマさんの世界にしてみれば成人なのかもしれません。たとえ見た目通りの年齢だったとしても、必ずしもそれが人間とイコールとは限りませんし）

思い浮かべたのは、プリマの容姿に近いと感じた動物・犬の齡の取り方。

人間の年齢に置き換えたなら、一歳で成人という育ちっぷりはプリマにも当て嵌まるかもしれない、リリアがそう思った矢先。

「貴族の五歳児に動きやすい服など不要だろう？」

「失敬な！ あれから何年経ったと思つてらっしゃいますの！？」

二年ですわ、に・ね・ん！ あたくし、七歳になりましたの」

「やれやれ。大して変わらんぞ。どの道、お前さんは子どもではないか」

「きいっ！ 相変わらず失礼な方ですわっ！ そう思いません事！

？」

「あ、え……わたし？」

プリマの身元が真正正銘、貴族で子どもだと判り、考えた可能性を悉く消されてしまったリリアは、突然振られた話に自分を指差し戸惑ってしまう。

ついでに確定した身分の差から、床に座るプリマを差し置いて椅子に腰掛けた事へ、今更ながら無礼だったと思に至る。

そうでなくとも、頂垂れる彼女の下へ、何故すぐに駆け寄らなかったのだろうと己を恥じるリリア。

実際のところ、プリマのやや大袈裟な嘆きが本気と捉え難かったから、リリアは行動を起こせなかったただけなのだが、初めて生で見る貴族に動転した庶民は全てを自らの非と認識してしまった。

なまじ本を読んでいたせいで、リリアの中の貴族と庶民の関係は、彼女自身が思うよりずっと、悪辣な印象をその心に植えつけている。たとえば、貴族を軽んじた途端、その庶民の頭蓋は吹き飛ばされる、くらいに。

ゆえにリリアは答えよりも先に席を譲らなければと焦り、この動きを察したエニグマが、立ち上がろうと卓についた彼女の手を押さえて留めた。

「え、エニグマ……」

何故止めるのかと言外に問う反面、貴族であるプリマに気安く話しかける彼もまた、自分より上の立場なのではないかと察したなら、リリアの瞳だけが動揺に震えた。

そんな彼女の心を知ってか知らずか、リリアの手に手を重ねたまま、エニグマの鼻面が答えを待つプリマの方を向く。

「だからプリマは子どもだというのだ。失礼というならお前さんこそ失礼だぞ？　りりあはこの図書館の館長だというのに、偉そうにして」

「……え？」

（わたしが、館長？）

初めて聞く話に震えていたリリアの目が大きく見開かれる。

一体全体、どうなったらそうなるのか、立ち上がろうとしていた身体をエニグマに向き直らせた矢先。

「ええええええええええっ！！？」

「……プリマさん？」

リリア以上に驚きの声を上げたプリマが、ずざざざーっと、起き上がりつつ滑るように後退するという離れ業をやったのけた。

「ぎゃひんっ！？」

しかも背後を確認しなかったばかりに、頭を本棚に打つてようやく止まる、そんなドジなオチまでしっかりつけて。

バレッタ分の痛みも付与されているのだろう、声も出せずに蹲るプリマを見て、今度はさすがに席を立ったリリア。

駆け寄って小さな身体へ気遣う手を回したなら、うるうる涙ぐんだチョコレートの瞳が、気後れと若干の怯えを浮べてこちらを伺ってきた。

打って変わったその視線に、少しばかり傷ついたリリアだったが、

身じろぎはしない様子に努めて優しく声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

「……はい。申し訳ございません。取り乱してしまいました」

自分の大袈裟な反応に遅れて気づいたのか、プリマの顔が羞恥から下へ向けられる。

次いでリリアに支えられながら立ち上がったプリマは、まだ痛む頭を擦りながら困惑を映して見上げてきた。

「あの……それでリリア様が館長というのは」

「……エニグマ？」

リリアの方こそ問いたい問いを掛けられ、答えを持たない彼女は椅子に座ったままのエニグマを呼んだ。

ゴツゴツした鎧に包まれた足を器用に組み、二人のやり取りを視ていた彼は、つまらなさそうに頬杖をつく、空いている右手をリリアに差し伸べた。

「そう。りりあは館長だ」

「どういう事ですか？ だってわたしは」

「経緯は関係ない。この図書館の中で原本はりりあだけ。だからりりあは自然、館長となる」

「この図書館の中での原本……まさか！ リリア様は魔道書！？」

驚いた様子のプリマは、かといってまた後退するでもなく、あぐりと口を開けた状態で見つめるのみ。

それが先程よりもプリマの中の衝撃の大きさを表しているようで、居心地が悪くなってきたリリアは、凝視してくる彼女を置いてエニグマの下まで歩いて行く。

ただしそれは、グリモア魔道書グリモア＝館長の関係を確認するためではなく。

「エニグマ……わたしが魔道書だという事は知られても良い事なのでしょうか？」

手にした者のどんな願いでも叶えるという魔道書。グリモア

今やその正体となってしまったリリアが、自身の所在に恐れを抱いたなら、率先してバラしたエニグマは頬杖のままで首を縦に振っ

た。

「問題ないデス。言い忘れていたが、事<sup>グリモア</sup>魔道書に関しては、悪しき考えを持つ者でもわんこを利用できるデス」

「そんなっ」

青褪め非難の声を上げるリリアに対し、つまらなさそうだったエニグマの頬が弛緩した。

リリアの手が責めるようにエニグマの左袖を掴めば、これを右手で取った彼は楽しそうに上下に振った。

「何せ魔道書<sup>グリモア</sup>の内容を解読できる者はいないからな。どんな研究者であつても最後には挫折を見る。この図書館に流れる時間が悠久であろつとも……」

「あつ」

ぐいつと引つ張られたリリア。

組むのを止めた腿の上に、エニグマの左側から腰掛ける形にされ  
ては、裾に連なる楽器に足を掬われ、バランスを崩した上体が頬杖  
に使われていた右腕に抱きかかえられた。

一連の動作にリリアが驚き目を見開いたなら、取られたままの右  
手にエニグマの指が絡みついた。

「手にした者のどんな願いでも叶える魔道書<sup>グリモア</sup>。けれど手にした、と  
はその行動ではない。魔道書を開く権限を得て、初めて手にしたと  
言える。たとえば……りりあ、えにぐまはお茶が飲みたいデス」

「え？ あ、はい」

不穏なエニグマの語りを耳にしつつも、不安定な格好に支えを求  
めて自由な左手で彼の肩を掴んだリリアは、ほっとする間もなく乞  
われた事に頷いた。

次いで脳裏に浮べたのは、トレイに乗った白地に青い花のティー  
セットと、

「お茶……紅茶で宜しいですか？ 品種は」

「紅茶でいい。品種は知らん」

「判りました。では――」

言いながらリリアはふと、可笑しな感覚に気づく。

（？ わたし、どうして頷いたのでしょうか？ 図書館にお茶なんてあるのかさえ知らないのに。それに）

視線を落せば、左右斜めに傾ぐ腹と腿の上に、浮べた通りのティーセットがある。

エニグマの右手がリリアの手からカップの一つを取ると、すかさずティーポットから注がれる上品な色合いの紅茶。

それもリリアの手を介しての。

「頂くデス」

言って、器用にカップへ口を付けたエニグマの喉が、こくつと鳴り動くまでを見届けたリリアは、お代わりに待機する手の状態で首を傾げた。

「あの、エニグマ？ これは一体？」

「これ？ これはお茶デス。なかなか美味しいデス」

そういう事を聞いている訳ではないのだが、エニグマの口元から下ろされたカップの縁が、リリアの唇に軽く押し当てられた。

飲むよう勧められる代わりに傾く中身が、状況に恥じ入る間もなく、押された事で小さく開いたリリアの口内を潤していく。

「んっ……」

「美味しいか、りりあ？ <sup>グリモア</sup>魔道書になったばかりだからな。意識して飲食しなければ大変な事になるデス。そう……そうだ。よし、全部飲み込んだな」

「ふ、はあ」

温い紅茶を飲み干し、仄かに紅潮するリリアの頬。

エニグマの言う通りの味わいの余韻に息をついたなら、ティーカップをトレイに戻した手がティースプーンを取り、添えてあったジャムの瓶をリリアの肩を抱く左手に持たせた。

「ジャムも舐めとくデス。角砂糖もあるが、こっちの方が食べやすいだろう」

スプーンに軽く一匙乗ったジャムが、リリアの意思とは関係なし

に口の中へ運ばれていく。

「あ、んむっ……んっ」

紅茶同様、こちらもなかなかどうして絶品な、程好い甘味と酸味が広がる。

「美味いか？　じゃあもう一杯」

「は、はい」

言われるがまま、再び差し出されたカップにリリアが紅茶を注いだなら、今度はエニグマを経由せず直接口元に向かう硬質。

またしてもそれを飲み干しせば、紅茶とジャムに濡れた唇を、黒く鋭い爪を携えた親指の腹が、優しく拭い取って行った。

そうしてそのままその指は、持ち主の舌にぺろりと舐められ。

「っ！？　え、エニ——」

「エニグマ！　あ、貴方、子どもの前でなんて不埒な真似をされるのですか！？　思いつきり見入ってしまったではありませんかっ！  
！」

リリアが我に返ると同時に叫んだプリマは、折り畳まれた傘の先端でエニグマを差しながらずんずん近づいて来た。

途中、「きゃわっ！？」とドレスの裾を踏んづけつつも、掲げていた傘を杖代わりに態勢を正し、なんとか二人の前まで到着。

コケかけた恐怖と恥ずかしさに息を弾ませながら、傘で差したままのエニグマを放った彼女は、キツとリリアの方を睨みつけてきた。  
「リリア様もリリア様です！　それでもエニグマは殿方なのですよ  
！？　幾ら魔道書グリモアとはいえ無防備ですわ！」

「うつ。す、すみませ——」

「にゃー。煩いプリマ。某はりりあに魔道書グリモアの説明をしているだけだ。そのどこが不埒だというのだ？」

「こ、この男はっ！　また、無自覚ですの……？」

心底理解出来ないといったていで、リリアを膝に抱えたままのエニグマが首を傾げたなら、がっくりとプリマは項垂れた頭を抱えて苦悩する。

（そういえばこの二人、お知り合い、でしたね）

エニグマとプリマのやり取りを経て、現在の状況に特別な意味合いがないと知ったリリアは、恥じる心を恥とし、長身瘦躯に身体を預けた状態で疑問符を口にした。

「プリマさん。また、とは？」

「ええ、それはですね……………」と、その前にリリア様。エニグマから降りては頂けないでしょうか？ はつきり言わせて貰いますが、物凄おく、目の毒ですの」

「あ、はい。判りました——エニグマ？」

子どもに目の毒とまで言われたリリア、降りるべく手を添えたなら、肩を抱く左腕が彼女の身体を引き寄せてきた。

一瞬、上に置かれたトレイが引っくり返るのではと焦ったが、いつの間にやら重み共々、その姿は綺麗さっぱり消え失せている事を知った。

まるで、望めば現れるリリアの本体のようである。

（……………先程エニグマが魔道書の説明と仰っていましたが、つまりあれも魔道書の姿の一つ？）  
グリモア

リリアという前例がいるため、完全には否定は出来ないものの、この場で真実を知っているのはエニグマだけだろう。

加え、抱き寄せる格好に対してもどうしたのかと問う視線を送ったリリアだが、映るのはグラスグリーンの喉元のみ。

けれどもにやつく気配を感じては、困ったように眉根を寄せた。

「エニグマ。プリマさんをからかうのは止めてください」

「……………え？」

「にゃあ。リリアはえにくまの楽しみを奪うデス。プリマをからかうのはえにくまのライフワークの一つなのに」

「んなっ！ そんな事のためにリリア様を！？ 何処まで性根が腐っておりますの！！？」

ぶーぶー口先で愚痴るエニグマへ、薄っすら朱を滲ませて憤るプリマ。

薄いとはいえ毛で覆われた肌に出るほど顔を真っ赤に染め上げた彼女は、それでも貴族の矜持なのか、傘を振り回して暴れる事なく威嚇する犬のようにぎりつと小さく歯を軋ませた。

そんなプリマを尻目に、リリアの身体をひょいっと持ち上げて床に下ろしたエニグマは、離れる身を惜しむようにその頭を軽く撫でてくる。

「ところでりりあ。さっきの説明で手にした者の意味、判ったデス？」

「え……いえ。あのティーセットが何だったのかさえ判りませんでした」

正直に告げれば頷いたエニグマが、これ見よがしに「全く、プリマのせいデス」と、彼女の方を見ずに言った。

これへ、更に怒りを増すかと思いきや、プリマは居心地が悪そうに頭垂れるだけ。

尖った口からは文句を呟く声が聞こえるものの、内容は判らず、覇気もない。

意気消沈するプリマを予想していなかったのだろう、自分で追いつめたくせに戸惑う様子のエニグマは、仕切り直すように咳払いしながらも、彼女をちらちら気にしつつ話を続ける。

「にゃ……えー、何処まで話したか。そ、そうそう、手にした者、手にした者デス。それと、ティーセット。……要は、だな。手にした者というのは、りりあからりりあの名を教えられた者の事デス。この場合はえにぐまの事デス。だからえにぐまがお茶を飲みたいと言ったら、りりあはお茶を出した」

「出した、という事はあれは魔道書ではない？」

「にゃ？ 魔道書はあくまでりりあだけデス。りりあ以外に姿を変えられる事はないデス。あのティーセットは、りりあが無意識に魔法で作り上げた品。えにぐまの頼みを受けて、出してくれた物に過ぎないデス」

「それって……それではわたしがもし、他の方に名を教えてしまっ

たら、望まれるまま無意識に魔法を使うという事ですか？」

名を教える事の危険性が、身近なたとえばとして現れた事にリリアの顔が青褪めた。

これを拭うように頭に置いていた手を頬へ添えたエニグマは、変温動物の皮膚を持つにしては温かな手の平で、むにむに優しくリリアの肌を揉む。

「安心するデス。無意識といっても、リリアの意思はちゃんとあるデス。えにぐまがお茶ではない危険な事を望んでいたら、リリアは困るデス。困ったり迷ったりすると無意識は実行に移せないデス。それに今は無意識でも、慣れてくれば意識して使えるようになるデス。特にこの図書館内に纏わる事なら、ティーセットを出した時のように呪文要らずで色んな事が出来るデス」

「色んな事……」

荒唐無稽な話だが、今更否定できるものではない。

かといって、出来る「色んな事」を探してみたりリアは、これと違って何も浮かばず小さく息をついた。

頬に触れるエニグマの手を取りながら眉を寄せ、座っても高い位置にある顔へ笑ってみせる。

「今のところは何も浮かばないのですが」

「少しずつ覚えていけばいいデス。ただ、飲食だけは定期的に取らねばならん。リリアの身体は、摂取したモノを全て魔力へ還元するから排泄の必要はないが、それでもその擬態は以前の身体感覚で何かを浪費して動こうとする節がある。まあ、飲食物を出現させる魔法を覚える、いい機会だと思えば苦でもないデス」

（要約すると、わたしグリモアが願いを叶えるのは、わたしから名前を教えた方だけ。でもわたし自身がわたしのために魔法を使う事も可能。魔法には普通呪文が必要だけど、この図書館に纏わる事なら、ティーセットを出した時みたいに思い浮かべるだけで色んな事が出来る……）

考えを纏めながらエニグマのごつごつした手を指で踏むリリア。

最後、無意識に「思い浮かべるだけで」と自身で加えた言葉には気づかず、知らず落ちていた視界を上げると、エニグマに向かって頷いた。

「判りました。兎に角今は、習うより慣れろ、といった感じでしょ  
うか」

「にゃあ。何か違う気もする。でも、大まかにはそれで良いと思う  
デス。……他にも注意点は多々あるが、追々でも問題はないはずだ」  
「？」

ぼそりと付け加えられた言葉にリリアが首を傾げたなら、その視線を外すようにエニグマが、捨て置かれた腹いせのように背中を丸めて蹲るプリマへ声を掛けた。

「プリマ、リリアと話をするのだろう？ そんなところに蹲ってないで、こっち来て座れ」

「……………」

尊大な口調だが、ぴくりとも動かないプリマに滲む惑いの色。

「プリマ。プリマ。プリマ」

「……………」

「プリマさん？」

「……………」

すっかりヘソを曲げたらしい彼女は、リリアの声掛けにも一切反応を示さず。

「プリマ……………マダム」

エニグマが幼い少女に掛けるに相応しくない呼称を付け足した。

これに対し、ぴくりと反応したプリマを横に捉えたリリアは、不思議そうにエニグマへ問い掛けた。

「マダム？」

すると更にぴくぴく動く、プリマの身体——というか肩。

加えて剣呑な雰囲気小さな少女から漂い始めたなら、戸惑いから一転、笑い混じりにエニグマがもう一度言う。

「マ・ダ・ム」

「うーっるさいっ、うるさい、うるさい、うるさい、うるさいっ  
！！」

溜めの入った声に我慢できないと立ち上がったプリマは、手にした傘ごと両腕を上げると怒鳴り散らした。

次いでくるりと振り返っては、エニグマに向かってまたしても傘の先端をずびしと向ける。

「誰がマダムよっ！ あたくしはまだ、レディーで充分ですわ！」  
チョコレートの瞳を吊り上げ、ハニーエローの髪とブラウンの垂れ耳を揺らしながら首を振る。

七歳とは思えない痰火の切りようにリリアの目が丸くなれば、プリマの怒りが戻った事に安堵してか、エニグマが遠慮なく鼻で笑った。

「レディー？ 侯爵夫人のくせにか？」

「は？ 侯爵、夫人？」

貴族とは聞いていたものの想像よりだいぶ上だった爵位を耳にして、いや、七歳の子どもをして夫人という立場を聞きつけて、リリアはまず自分の聴覚を疑ったのだが。

「うつるさい、うるさい、うるさい、うるさい、うるさいいっつ！

！ あんな方、あたくしの夫などではないわ！ ただの親バカよ！  
！」

「……え？」

（夫と言っからには男の人。でも親バカって……ど、どういう意味ですか？）

エニグマ以上のとんでもない宣言を本人から直々にされたリリアは、理解するのを怖れて半歩ほどその場から退いてしまった。



## マダムと侯爵様 その1

歩き疲れたプリマが床に座り込んだのは、サロン風の閲覧スペースに辿り着いた時が最初ではなかった。

ある事に不満を持つて家出を目論み、この図書館へ訪れた彼女は、そこで出くわした顔見知りのエニグマの後を追いかけて、その都度限界が来ては休むを繰り返していたのである。

別に、そこまで必死になって彼と彼に押される形で前に行く娘を追うほどの用事はないのだが、大勢に囲まれて暮らしていたプリマにとって、長時間一人でいるのは耐えられない事だった。

たぶん、エニグマたちがいなければ、着いて早々家に帰っていただろう。

だからこそプリマは休みつつも一生懸命彼らを追いかけて、けれどその目的が特定の本ではなく案内だと知らない彼女は、館内を延々歩かされる羽目になる。

追いつきそうで追いつけない掠める姿があったなら、エニグマがわざと行き先を無茶苦茶にしているのだと恨みつづ。

今回に限ってはほぼ濡れ衣だったものの、エニグマという男は間違はなく、プリマにとって最初からそういう手合いであった。

こちらが懸命になればなるほど、それを嘲笑うが如く、また更の上に立つ——それも決して手が届かないような位置ではなく、頑張れば報われるようなところに。

性格の悪さは、プリマのこれまでの短い生の中でピカーのエニグマだが、何故かそんな彼とプリマの夫は仲が良い——ように見えていた。

何せエニグマのからかいには、プリマ他数名に限定されていたのだから、最初から犠牲にならない夫など裏切り者も同義。

いや、エニグマがいなくとも、彼の男は元々プリマの敵であった。

少なくとも、プリマからしてみれば。

リリアが感覚を思い出して提供した、魔法の紅茶を一口含んだプリマは、サロン風の閲覧スペースでようやく合流できたのだと告げると、物憂げに溜息を一つ吐き出した。

「さてと。何処からお話すれば宜しいでしょうか？」

エニグマと共に同じテーブルを囲むリリアは、その問い掛けにまずは身近な彼の事について尋ねようと思った。

本人を前にして訊くことではないとは思いつつも、エニグマが何を無自覚でしたのか、最初に気になったのはそこなのだ。

決して、他人の家の込み入った事情などではない。

……興味がないと言えば、大嘘になってしまうが。

「エニグマが無自覚、というところから——」

「そうあれは二年前、あたくしが五歳になって間もなくの事でした」（え、と。もしかして先程のはただの前置き？）

いきなり話し始めたプリマを前にして、聞き手に徹するしかないと知ったリリアは、自分の分のティーカップを手に取ると、勘違いした恥ずかしさを消し去るように紅茶を含んだ。

\*\*\*\*\*

そうあれは二年前、あたくしが五歳になって間もなくの事でした。普段は外交でいらつしやらないお父様をご帰宅され、久しぶりに家族揃って夕食を頂いたのですが、楽しい食事を終えた後、何故か

あたくしだけがお父様とお母様に、応接室まで来るよう言いつけられたのです。

たくさん兄弟がいる中であたくしだけ。

まだまだ甘えたい盛りでしたし、両親を独り占め出来る絶好の機会と思つたあたくしは、喜び勇んで馳せ参じましたわ。

それがまさか、結婚話のためで、しかもお相手までもが応接室にいらして、挙句、そのままその方の屋敷に連れて行かれるなど、夢にも思わずに！

今思い出しても腹立たしい、いえ、今であつたならお父様の頭に傘でも突き入れていたことでしょう！

と……コホン。失礼。

えー、それはさておきまして、ですね。

結婚のお話を頂いた時、あたくしがまず思いましたのは、何故あたくしなのか、という点でした。

何せあたくしの上には姉が五人、それも適齢期の未婚者が二人も控えておりまして、加え、それまではきちんと年齢順で上二人を送り出しているのです。

まさかまさか、適齢期にさえ程遠い五歳のあたくしが、まさかまさか次に嫁ぐなど、誰が予想した事でしょう？

ですが、実際は予想どころの騒ぎではありませんでした。

疑問はあつても呆気にとられるばかりのあたくしに対して、その方——侯爵様を紹介したお父様が結婚以上にとんでもない事を仰つたのです。

あたくしは最初から、侯爵様の妻になるために生を受けたのだとしかもお母様まで頷かれて！

あの時のあたくしの気持ちは、今のあたくし自身であっても、到底量り切れるものではありませんでしたわ。

だってそうでしょう！？

あたくしが生まれた後にも、弟妹たちが続いているのですよ！？  
それなのに、ああ、それなのにそれなのにっ！

どうしてあたくしだけっ——そう、思いましたわ。

それと同時に、もしかしたら弟妹たちもあたくしと同じなのかもしれない、とも思いました。

けれど……。

やはり、あたくしだけがそういう腹積もりだったそうですの。

そう断言された理由は、侯爵様の過去にございました。

お父様の幼少の頃からのご友人でいらっしゃる侯爵様には、同年代の奥様がきちんといらっしゃったのですが、お身体を長く患っていたために、あたくしが生まれる前に亡くなられたそうです。

奥様を大変愛していらっしゃった侯爵様は、ご存命の内には「暗い顔はしてられない」と明るく振舞っておいででしたので、亡くなられた後の哀しみようは凄惨たる有様だったとお聞きしております。

ここまでならば、悲恋であつても美しい思い出のまま、この話は終わったはずでしょう。

ですが、あたくしの結婚話からも判る通り、そうは問屋が卸しませんでした。

独り残す夫を案じてか、あるいは元々そういう気質だったのか、亡くなる前に侯爵様の奥様は彼の手を握りながらこう仰ったのです。必ず生まれ変わって、貴方の許へ嫁ぐから、と。

……実はその時、あたくしのお父様とお母様も同席しておりました。

ここまでくれば、多くを語らずともお判り頂けると思いますが、その奥様の遺言紛いの予言を実現すべく、侯爵様の目も当てられない落ち込みようを何とかしたいと思ったお父様とお母様が励んだ結果、生まれたのがあたくしだったそうです。

しかも何の因果か、あたくしが誕生したのは奥様の命日のその次の日。

奥様の真意が何処にあったのかは存じませんが、実行に移した愚か者は、そんな自分たちの願いが神に通じたのだと信じて憚りませ

んでした。

何て頭の悪い人たちでしょうか。

それが実の両親だなんてっ。

あたくしは、あたくし自身が可哀相でなりません、本当に。

しかし、更に恐ろしい事に、愚者は両親だけではありませんでした。

哀しみに暮れていた侯爵様までもが何をとち狂ったのか、まだ赤子だったあたくしを奥様の生まれ変わりとお認めになられたのです！

この事実を聞いた瞬間、常識ってオイシイの？ とどなたかにお尋ねしたくなったのは言うまでもありません。

兎にも角にも、そんな仕様もない理由で生まれて間もなく、いいえ、お母様のお腹にいる時から、あたくしは侯爵様の婚約者だったと知らされたのですが、すぐにでも手元に引き取りたいという彼を蹴飛ばし、五年の歳月を掛けて育てたのは、他の誰でもないあたくしの両親でした。

しかも蹴飛ばすとは比喻ではありません。

その表現すら生易しい行為を、侯爵様への元氣付けに成功した矢先、夫婦揃ってしたそうです。

将来的には侯爵様の花嫁でも今は自分たちの可愛い娘だ、という言い分らしいのですが、それにしましてもやり過ぎでしょう。

まあ、今更あのお父様とお母様に、世間一般の常識を語っても仕方のない話ですが。

何せそんな可愛い娘を、適齡期もまたずに五歳で嫁がせる方々なのですから。

けれどモノは考えようですわ。

最初から侯爵様の手元で育てられたなら、あたくしはあの方の事をお父様と慕い後々えらい目に遭っていたでしょうし、適齡期まで待っていたなら恋しく想う方との理不尽な別れを未練たらしく嘆いていたことでしょう。

ええ、ええ、認めて差し上げますわ。

だからといってあたくし、両親を嫌いになつた訳でも、侯爵様が気に食わない訳でもございませんの。

どんな腹積もりで生を受けさせられたとしても、愛情を持つて育てていただいたのは確か。

所業には呆れてしまいました、今でもお父様とお母様が大好きですわ。

それに侯爵様の事も。

腐つてもお父様の幼馴染、完全に親子の年齢差ではありますが、変態的な幼女趣味の在る方ではございませんもの。

お屋敷に連れて来られてからも、それはそれは丁重に扱われていますわ。

腹立つくらいにつ。

……コホン。

そんなこんなで侯爵様の下に半ば強引に送り出されたあたくしは、そこでこの、エニグマと出会いました。

この男、初対面から最悪でしたわ。

こちらがきちんと礼を取ったというのに、足を組んで紅茶を飲みながらそれを見て、席を立ったかと思えば近寄り、いきなり人の頭を鷲掴みにしましたの。

卑しい笑いを貼り付けて、「エニグマだ、チビ」と言い、「この小さいのーみそで覚えられるか、チビ」と。

そちらこそたった今名乗ったばかりのあたくしの名を言えていないじゃないのと睨みつけても、効果は全くありません。

侯爵様にしても、そんなエニグマの為すがまま。

幾ら彼が、結婚の儀を執り行うのに必要な方だと言っても、少しくらい、何か注意して下さっても宜しいでしょうに。

他にも数え切れない程、嫌味なからかい方をするエニグマでしたが、それを一から挙げていくと膨大な量になってしまいますので、ここでは省かせて頂きます。

けれど、どうしたって許せない事が一つだけあるんですの！

結婚の儀と言えば清廉潔白な場が信条のはずなのに、あろう事がそれを仕切る立場のエニグマが、とんでもない行為に及んでいたと儀の前日に発覚したのです！

\*\*\*\*\*

「とんでもない行為、ですか」  
鼻息も荒く、チヨコレートの瞳で鋭くエニグマを睨みつけるプリマ。

これに対してリリアは、少し落ち着くようにとの意味合いを兼ねて、彼女のカップへ新しい紅茶を注いでいく。

プリマの方もリリアの言いたい事が判ったのだらう、礼を述べると小さく深呼吸し、カップに一口口をつけた。

リリアも習って一口含み、飲み込んではプリマの不機嫌もどこ吹く風、涼しい顔をしてカップを傾けるエニグマを見やった。

リリアと向かい合って座るプリマに、完全に背を向けた状態の彼は、素知らぬ風体で足を組み頬杖をついている。

それでもプリマが自分の話に入り怒れば怒るほど、楽しそうな雰囲気は増しており、しっかり聞いているのだという事は窺い知れた（からかわれているプリマさんには失礼ですけど。何か微笑ましい光景ですね）

本人たちに気づかれぬよう、カップの裏でこっそり唇に笑みを刻んだリリア。

そうしてもう一度、紅茶を飲もうとした矢先。

「……その女性は、お腹の子を認知して欲しいと仰いました」

「……はい？」

御年七歳であるプリマが語るには生々しい単語に、聞き間違いかとリリアのカップがテーブルに戻された。

改めてプリマを見つめたなら、幼さに似つかわしくない、諦めにも似た物憂げな表情を滲ませて、同じくテーブルに置いたカップを眺める姿があり。

「すると今度は別の方がそれなら自分が先だ、と。続いてまた別の方が、いつぞやの夜は夢心地と仰れば、違う方が昼の貴方も素敵でした、等等続々と」

「え、ええと、それはつまりどういう」

「……あたくしに皆まで言えと仰いますの？」

「い、いいえ。滅相もございません」

じろりと睨まれ、それ以上尋ねる勇気のないリリアは、両手を挙げて首を振った。

何が恐ろしいかと言えば、エニグマの逸話よりも、自分の半分の時間しか生きていない少女が、具体的にナニがナニしたと語る方が恐ろしかった。

剣呑なプリマの眼から逃げるように、話題の主であるエニグマへと視線を向けたリリアは、その途中で（あら？）と思い出す。

（確かエニグマ、自分が男かどうかはよく判らないって言っていたよね？ 子どもにしてもあんな認識止まりですし）

エニグマと初めて顔を合わせた時にした会話。

その辻褄が合わない、リリアが眉間に皺を寄せてエニグマを見やれば、これに気づいた彼はふんつと鼻息をついた。

「大半はデタラメデス。それにその時のえにぐまは女を抱いてなんかないデス。子どもが出来るはずもないデス」

「デタラメ、ですか」

「ええ。確かに大半はデタラメでした。大半は」

エニグマの言葉にリリアが納得してみせたなら、含みを持ってプリマが「大半は」を繰り返した。

どういう意味なのかと問うべく、首を傾げたリリアがプリマへ視線を戻す。

と、そのタイミングでエニグマがさらっと付け足した。

「えにぐまはデタラメ以外の女と寝ただけデス」

「……は？」

思わず戻した視線をもう一度エニグマに向けたなら、今度はプリマの方から盛大な溜息が為されていく。

またリリアの顔がそちらに戻れば、億劫そうに額を押さえたプリマが説明を付け加えた。

「だから、また、無自覚なのです。実際、子どもの話は女性の狂言で終わりましたし、その他の方々もお変わりない日々を過ごされています。中には本当にただ眠っていただけ、と仰る方もちらほらいらっしゃいました。ですが、全てが全てそうであるなどと、どうして断言できましようか。もし仮に、本当にただ単に、横で眠っただけだったとしても、です。誰がそれを素直に信じるというのでしょうか？ 誰しも、とんでもない由々しき事態だと思われるでしょう？」

「にやー。どうしてただ寝ただけでそこまで言われるのか、えにぐまにはさっぱり判らないデス」

「それが無自覚だということです！ でなくともあの時の貴方の姿といたら、無駄にフェロモン垂れ流していたではありませんか！」

「ふえるもん…… エニグマに？」

ここまで来ると七歳児を理由に、プリマの発言にショックを受ける事もなくなってきたリリアだが、今まで一度もエニグマ相手に感じた事のない単語を耳にしては、疑う眼差しをチヨコレートの吊り気味の瞳へ向けた。

困惑混じりのリリアの視線を真っ直ぐ受け止めたプリマは、怯みもせずに大きく頷く。

「ええ。エニグマに、です。勿論、こんな変テコな状態ではありませんが」

「にや。失敬な。えにぐまの何処が変テコデス。りりあ、りりあも何か反論するデス」

「えーっと……」

黒い爪をプリマに向けたエニグマが、鼻面をこちらに向けて訴える。

一瞬目を泳がせたリリアは、いやいや重きを置くべきは別にある、とあえて明言を避けてプリマへ問うた。

「と、いう事は、エニグマも魔道書、つまりわたしの<sup>グリモア</sup>のように擬態できるのですか？」

「ええ。そうですね。あれは擬態と表現した方が正しいのでしょうか。侯爵様やあたくし、限られた者の前ではこの姿でしたが、あたくしの世界では珍しい容姿。欺かねば騒がれる事必至、でしたからね」

「珍しい容姿、で片付けられるのですか？」

「ええ。そういえば、リリア様の容姿も珍しいですわね。魔道書<sup>グリモア</sup>とはいえ、その容姿はどのような世界から？」

「わたしは……放浪者<sup>ワンダラー</sup>でした。それで気づいたら精神だけ魔道書<sup>グリモア</sup>に「それはまた、不運でしたわね」

プリマの目が、気の毒そうに下に落ちる。

倣う形でリリアの目も下に落ちれば、伺う声でプリマが問うてきた。

「それでその、元の世界には」

「帰る事は出来るそうです。でも、同じ時間には帰れない、遙か未来に辿り着いてしまうと」

「そう、ですの」

言葉もないとそれっきり閉ざされる口。

プリマから紅茶を飲む音が響けば、エニグマの大人しさに気づいたリリア。

視線を移せば、背もたれを抱えるようにして座り、円卓を背にして頂垂れる姿があつた。

どうしたのだろう、そう思い声を掛けかけるが。

「酷いデス。リリア、リリアはえにくまの事、変テコだと思っているデス。反論してくれなかったデス。鬼デス。悪魔デス」

「……………」

足掻いたところで否定できない愚痴りに、リリアの手と意識が紅茶へと伸ばされた。

## マダムと侯爵様 その2

紅茶一杯がカラになる頃、「お菓子が欲しいですね」とぼつり呟いたのはプリマ。

リリアも賛同を示し、紅茶を出した要領で頭の中にクッキーを思い浮かべた。

すると卓上に漂う甘い香り。

これに、ひとり言を聞かれたのだと知ってプリマが頬を染めたなら、リリアは「わたしも食べたいと思っていましたから」と微笑んだ。

しばし流れる、和やかな雰囲気。

——をぶち壊す手が、現れたばかりのクッキーに忍び寄る。

「え、エニグマ？」

リリアが気付いた時には既に遅く、クッキー皿を両手で掴んだエニグマは、それをそのまま、大きく開けた自分の口に流し込んでしまふ。

カラになった皿と紙のシートがぽいつと捨てられたなら、爬虫類の長い口に響くボリボリという音。

あまりの暴挙にリリアは勿論の事、プリマでさえも目を丸くして固まれば、喉を詰まらせずにごっくんと飲み込むエニグマ。

そうして少しは得意気にするかと思いきや。

「う……」

「エニグマ!？」

口の両側を手で押さえたエニグマは、何も言わずに席を立つと、一目散に本棚の方へ駆け出してしまった。

閲覧スペースの天井で待機していたわんこが一つ、その後を音もなく追うのに合わせて、リリアも彼の後を追いかけるべく立ち上がる――と。

「リリア様、お止しになって」

「で、ですが」

「あの男がいなくて、貴方が何をそんなに不安がるのか。皆目検討も着きませんが、すぐに戻ってきますわ。全く、イイ齡して。一気にあれだけ食べたらどうなるのか、どうして判らないのかしら？」

「……あ、ああ。なるほど。そういう事でしたか」

思い出したのは、一食林檎二個で充分だというエニグマの食事量。林檎の芯も含まれる分、容量はそれなりに入りそうだが、シート共々宙に消え去った皿には、約三人分のクッキーが山を作っていたのである。

しかもリリアが創造したのは、林檎と違って水分のほばない、サクサククッキー。

紅茶のお供を考えた結果だった。

「エニグマ……大丈夫ですかね？」

「自業自得ですわ。けれど……クッキーはしばらく要りませんわね」  
去ったエニグマの状態を体现するように、うぶつと小さく呻いた  
プリマが、辛そうに口を押さえた。

その点はリリアも同調できるため、苦笑を浮べてから、静かに瞳を閉じる。

するとテーブルの上に、今度はショートケーキを乗せた皿が二つ現れた。

「まあ。リリア様、頂いても？」

「ええ、どうぞ。お口に合うかは判りませんが」

ケーキの出現で直前の不幸を帳消しにした二人はフォークを手に

取ると、エニグマの生還を待たずに、リリアはスポンジ部分、プリマは頭頂部の苺をそれぞれ口に入れる。

「……美味しい」

ややこつてりした甘さだが、紅茶で渋くなっていた味覚には丁度良い。

「苺も美味しいですわ」

苺についていた生クリームを口の端につけたプリマもそう言う、目をキラキラ輝かせながら、スポンジへとフォークを進ませていく。大人びた言動の多い彼女だったが、こうしているとやはり普通の子ども。

ぱくぱくもぐもぐ、楽しそうに食べていく度、増えていく口周りの汚れさえ可愛く見える。

そんなプリマへ微笑んだリリアは、自分のケーキを攻略しながら、他愛のない問いをかけていく。

「そういえば、苺、という名で通じるのですね」

「ええ。通じますわ。というよりも、リリア様と此処だから、でしょうけれど」

「わたし、と、此処？」

「はい。別の世界の者同士、普通は言葉などほとんど通用しません。しかしリリア様は名高き魔道書グリモアですから、どのような言語にも精通されています。此処は、知識を得る図書館ですから、言葉には不自由しない仕組みになっていますの。——と、侯爵様が仰っていましたわ」

”侯爵様”と口にした時だけ、プリマの声のトーンが下がった。

ケーキを運ぶフォークの動きもぎこちなくなれば、何となく彼女の気持ち判ったような気がした。

（何があつたのかは判りませんが……プリマさん、そろそろホームシックになられたのでは？）

ただの思ひ出話ならば問題はなかった。

しかし今プリマが語ったのは、この図書館での出来事。

その時の思い出はきつと、悪いモノではなかったはずだ。

少なくとも、帰りたいと思えるくらいには、良い事はあつて。

けれどその事を指摘する程、リリアは野暮ではない。

言えば最後、プリマは意地でも否定し、帰る事を拒むだろう――  
本心はどうであれ。

だから今のリリアに出来る事は、会話を続ける事、それだけである。

「どんな言語でも、ですか。でもわたし、先程から普通にお喋りしているだけなのですが？」

引き続き質問を重ねたなら、少しだけ明るさを取り戻したプリマが頷いた。

「そう。その普通が、もう普通ではないのです。今し方、図書館内では言葉に不自由しないと申しましたが、それでも完璧ではありませんの。二重音声、とても表せば良いのでしょうか。話せばどうしても、その者の言語が微かに重なってしまうのです。あたくしの場合ですと、今回のエニグマの語りが正にそれでした。……あの男、あたくしの世界の言葉を話せるくせに、相変わらず配慮がありませんわ」

「ええつと、つまり？」

「ああ、申し訳ございません。話が脱線してしまいましたわね。ええ、つまりは、それなのにリリア様の語るお言葉は実にスムーズに聞こえている、という事です。リリア様はリリア様の世界の言語を使われているのですが、あたくしにはあたくしの世界の言語として、綺麗に通じているのですわ」

「はあ。何と申しますか、便利ですね」

「はい、とても。さすがは魔道書、<sup>グリモア</sup>といったところでしょうか」

しみじみ感心するプリマに対し、当のリリアは返答に迷う。

望んだ身の上ではない、それなのに、そうなって良かったという風に言われると、どうして良いのか判らなくなる。

プリマの感想に何も言えなくなったりリリアは、別の話題を探すよ

うに視線を彷徨わせた。

そうして至ったのは、未だ戻って来ていないエニグマの事。

「そういえばプリマさん、さっきエニグマの事、イイ齡って仰っていましたけど」

「ああ、あれですか？ まあ、実際の齡は知らないのですけれども。あれは初めて会った時、侯爵様に古い友人だと紹介されたからですわ。ちなみにエニグマの擬態した姿の紹介では、ご自分の親戚だと仰っていましたか」

「親戚……侯爵様に似ていらっしやったのですか、エニグマの擬態は」

親子ほども離れているプリマの夫の侯爵様。

その人をして古い友人だと紹介されたエニグマの齡は、考えるのも怖いので早々に話題を打ち切り、違う話題を掘り下げていく。

しかし何より氣になっていた話題であつたのもまた事実。

（エニグマにふえるもん……ああ、駄目です。どう足掻いてもどうにもなりません）

自分の想像力の限界にあえなく挫折したりリアは、プリマの返答を待ちつつ、残りのケーキを平らげる。

対し、最後の一口を咀嚼したプリマは、口周りの白いクリームもそのままに、紅茶を一口上品に飲むと、昔を懐かしむ風体でカップの中へ視線を投じた。

「そう、ですわねえ。似ている、といえば、似ていたかもしれせん。けれど……侯爵様よりは華奢でしたね。侯爵様より軟派な優男風でしたし」

（華奢、は何となく判りますが。軟派な優男風って……）

益々判らなくなってきたと内心で頭を抱えるリアに気づかず、紅茶も飲み終えたプリマがカップを下ろしながら溜息を吐き出した。

「侯爵様も、黙っていれば格好良いのに」

「……………」

前提でエニグマの擬態が格好良いと評されている事よりも、プリ

マの弦きが気になったリリアは首を傾げた。

（黙っていれば、とは？ お喋りな方なのでしょうか？）

とはいえ、どの道プリマが先に言っていた通り、嫌っていないのは確か。

そろそろ潮時かもしれないと、プリマの家出に勝手に見切りをつけたリリアは、残っていた紅茶をこくりと飲み干し。

「っブ、リマああああああああああああああああああああああああああああああ——！！」

「っ！！？」

息をつくかつかないかのところで、木霊する大絶叫。

咆哮を思わせる突然のそれに、リリアの身体がビクツと震えたなら、何かと確認する前にプリマの身体が横から掻つ攫われていった。「きやうんっ」

彼女も対処し切れなかったのだろう、されるがまま担がれては、自分を抱く腕の主を見下ろして目を真ん丸く見開いた。

「ど、どうして貴方——」

「すまない。悪かった。御免よ。申し訳ない。許しておくね。確かに今回は俺の不手際だった。お前との約束を破ってしまった。だが、何が気に入らなかった、何がいけなかった？ くまのぬいぐるみか、お人形か、それともドレスか、アクセサリーか？ あれらは次の穴埋めの時まで、お前を退屈させないようと思って用意したのに、それを受け取った後でお前がいなくなってしまったと聞いて焦ったぞ？ 何故だ、プリマ——と、ああ。口周りこんなに汚して。駄目じゃないか。ほらちゃんと拭いて」

「むーむむむむっ！」

プリマの声を潰し、一方的に謝罪と家出の原因を問うた人物は、

生クリームに気づくとハンカチを取り出し、慣れた手つきで彼女の口周りを拭いていく。

程なく解放された口が、綺麗になったのを確認すると、破顔のていで満足そうにゴールドの瞳を和ませる人物。

対するプリマの方と言えば、驚きから一変、不機嫌そのものの表情を浮かべており。

「うむ。いつもの可愛いプリマに戻ったな」

「……言いたい事は、それだけですの？」

「ふひよ。こひゃ、ふりゅあ。ひえはやへなひゃひ、ひえは」

小さな手が人物のヒゲをむんずと掴むと、縦横無尽に引っ張り回していく。

これを追って手を伸ばす人物は、それでもプリマを降ろす事なく、脱力するような声を上げ続けていた。

（ええつと……会話内容から推察するに、この方が？）

完全に蚊帳の外に陥ってしまったリリアは、プリマの所業に困惑するばかりの、些か情けない人物を改めて見やった。

一言で表すなら、情けない仕草とは裏腹の、密林の王者・虎。

ゴールドンイエローに黒と白で色づけされた毛並み、丸い耳。

眼光は鋭くも滲み出る雰囲気は穏やかで、表情も実際の虎とは違って人間味に溢れている。

黒い光沢のある礼服に包まれた身体は、猛々しい顔に似つかわしい鍛え上げられたモノではあるが、洗練された立ち姿はやはり、武人よりも貴族としての優美さを兼ね備えていた。

彼こそが、プリマの夫にして侯爵なのだと、リリアは思い。

（それにしても散々、親子ほど離れているとは聞いていましたが、これはどう見ても……）

ふと浮かんだのは、彼を指して親バカと評したプリマの声。

今現在、テールを挟んだりリアの眼前で行われているやり取りは、正にそれである。

親子ほど離れている、どころか、二人を見て親子とは思っても、

夫婦だと思つる者はまずいない。

そういう感想を抱いている内に、プリマからヒゲを離して貰つた侯爵は、痛む頬を擦りさすり、重厚な音色で優しく己の妻を宥めに掛かる。

「プリマ、もう帰ろう。俺は言わずもがな、屋敷の者も皆、お前の身を案じている。早く帰つて、無事な姿を見せてやれ」

言いつつ、太く大きい丸みを帯びた指で、プリマの顎下を撫でる侯爵。

可愛くて仕方がないといった様子の仕草を受け、剥れていた頬を緩ませたプリマはしかし、その手を両手で掴むと乱暴に下へ放り投げた。

「プリマ」

困つた子だと言わんばかりの声が侯爵から零れれば、再びチョコレートの瞳に怒りを宿したプリマが、噛み付くように叫んだ。

「い・や、ですわ！ 侯爵様が判つてくだらない限り、あたくしは帰りません！」

プリマの言葉により正体の確定した侯爵は、そんな彼女へ弱りきつた感情を示して、丸い耳をピクリと動かす。

「プリマ、何度言つたら判るんだ？ 俺の名は侯爵様ではなく、イディリアだ。俺を侯爵というのなら、お前とて侯爵夫人だろうに」

「いいやあつ！ 夫人なんてお呼びにならないで下さいまし！ 確かにあたたくしは侯爵様の妻にはなりましたけれど、今のところ肩書きだけで、実質的には養女も良いところではありませんか！」

「それはそうだろう。子どものお前に酷な仕打ちは出来ん」

「当たり前です！ いえ、だからこそ夫人と呼ばれる身にもなつて下さいな！ こんな若くして呼ばれ続けたなら、早く老け込んでしまいそうですわ！」

「お前の言い分、判らんでもないが……いや、そうではなくてだな。俺が言いたいのは、いい加減、名前で呼び合わないか？」

若いどころか幼すぎる妻に手を焼いている侯爵・イディリアに対

し、ほとんど空気と化したリリアは内心で首を傾げた。

接し方は依然として親バカなのだが、どうもこのイディリアという男、プリマが言う程には彼女をただの子どもと見ていない節がある。

特に「子どものお前に……」のくだりなどは、成人した暁には異性として扱うニュアンスが込められているように感じられた。

（確かに幼女趣味ではないのでしょうか。所詮、庶民には庶民の、貴族には貴族の感覚がある、といったところでしょうか。元より真正銘、違う世界のお話です。わたしに出来る事は…… そういえばエニグマ、遅いですね？）

プリマとイディリアのやり取りからは、それとなく目を逸らしたリリア。

本当は移動した方が良かっただろうが、エニグマが戻ってくるというのなら、ここで待っていた方が何かと都合が良い。

かといって、空いた時間を上手く潰す方法も考えられず、ポットを傾けて新しい紅茶を注ぐ。

魔道書<sup>リリア</sup>が創造したポットは、いつまで経ってもどれだけ注いでも適温と嵩を保っており、仄かに立ち上る湯気からは上品な香りが漂ってくる。

これを楽しみつつ、何度飲んでも厭きの来ない紅茶を一口。

「……………」

静かにカップを置いたところで顔を上げたなら、それまでリリアを余所に盛り上がっていた二人が、戸惑いの表情をこちらに向けていた。

「あの、何か？」

「いえ、その」

「いや、あー」

何故か夫婦揃って気まずそうな顔で互いを見合い、もう一度こちらを見ては、プリマを元の席に戻したイディリアが、別のテーブルから椅子を持ち寄り妻の隣に腰を下ろした。

リリアはそんな二人の様子に首を傾げるばかりだったが、エニグマが不在の席にカップが置いたままなのを認めると、イディリアの前には何もない状況が不自然に思え、新たに彼の分のカップを創造する。

次いで紅茶を注ぎ、「どうぞ」と勧めた。

これに目を丸くしたイディリアは、「どうも」と礼を口にしながらも、という訳だか紅茶ではなく、カップと皿をまじまじ観察し始めた。

「あの？」

さつきから何なんだ、と問う気持ちでリリアが訝しむ声を上げたなら、はっとした表情を虎の顔に浮べたイディリアは、照れを隠すようにコホンとわざとらしく咳払い。

「失礼。ですが詠唱も無しにこの魔法……もしや貴方はあの魔道書  
グリモア  
では？」

「ええ、まあ。実感はあまりありませんが」

あっさりリリアが頷くと、イディリアは少しだけがっかりした様子を見せた。

「やはり、そうですか。はあ。いつか、わんこ無しで探し当てようとしていた私の夢が……ああっ」

「……です？ 私？」

プリマのやり取りとは違う口調。

戸惑うリリアに、隣で落ち込むイディリアを冷ややかな目で見つめたプリマは、溜息混じりに言った。

「地と外の使い分けですわ。先程のやり取りも、リリア様がいる時点でいつもならこちらの喋り方ですのに。イイ齡した男が妻に逃げられたくらいで取り乱すなんて情けない」

「プリマ……君は本当に、いつでもどこでも容赦ないな。少しは可哀相な夫を慰めようとしてくれても」

「あら。侯爵様ともあろうお方が慰めて欲しいなんて。では、こんな慰めは如何でしょう？——可哀相なのは頭だけですから、そん

なに落ち込まないで下さいまし」

「君は、私の身体だけが目当てだったのか!？」

またしても始まった漫才モドキを前にして、紅茶へ口を付けたリリアはこくと飲み干してから頷いた。

「お前から君。という事は、今現在、侯爵様におかれましては、わたしの存在を容認して下さっている、という事なのでしょいかね」

「……魔道書様。<sup>グリモア</sup>失礼ながら御身は外見に似合わず、その、淡泊でいらっしゃるので？ それとも実は、お怒りなのでございましょうか？」

「はあ、特に怒ってはおりませんが……」

プリマに向かっていた口がリリアへと開かれたなら、出てくる言葉は耳慣れない敬語。

自分は良くても他人に使われると酷く滑稽に聞こえるソレを、曲がりなりにも侯爵であるイディリアから聞かされ、リリアの整った眉が怪訝に寄った。

### マダムと侯爵様 その3

プリマの家出の原因は、イディリアが約束を破ったからではなく、その穴埋めとしてプレゼントを贈った事、それ自体にあった。

口ではどれだけ否定しようとも、彼女には侯爵夫人としての自覚が既に芽生えていた。

だから夫であるイディリアが仕事の都合上、致し方なく約束を破ったとしても、恨んだりするつもりは最初からなかった。

残念がる気持ちは確かにありはしたものの、それとてただの感傷に過ぎない——なのに。

当の夫は、プリマのご機嫌を取りに掛かったのだ。

それもお菓子やおもちやといった、子ども騙しの方法で。

しかしイディリアにはそれが分からなかった。

業を煮やしたプリマに指摘されるまで、それが恥に繋がるとは思ってもみなかったのだ。

今は亡き前妻との約束を破った際には、彼女自身がプレゼントを要求し、叶える事で機嫌を直していたのだから。

そんな過去を語り、「済まなかった」と大きな身体をしゅんと丸めてイディリアが謝ったなら、今度は激昂していたプリマの方が「大人げなかったですわ」と頂垂れてしまう。

これをフォローするようにイディリアが「大人げなくて当然だ、お前はまだ子ども」と言ったか言わないかぐらいで、近づいた口にプリマがポットの中身を直で投入。

悲鳴も上げられずに蹲る夫へふんつと鼻を鳴らしては、リリアに向かつて優雅に一礼してみせた。

「それではリリア様、今回はこれにて失礼させて頂きますわね。紅

茶、ご馳走様でした。御機嫌よう」

言って、必要もないのに日傘を差したプリマが本棚に向かって歩き出せば、逞しい体軀には似つかわしくない貧相な、言葉を失くした声を上げてイディリアが追う。

何処へ行くのかと焦る様子を日傘の陰から一瞥したプリマは、再度背を向けると嘆息混じりに告げた。

「屋敷に帰りますの。だってそうしないと貴方、今もって辞去の礼も出来ないほど酷い有様なんですもの」

「うごっ」

プリマに言われてリリアを振り返ったイディリアは、まだ熱いらしい口を両手で覆い隠したまま、慌ただしい礼をする。

立ち上がって彼らを見送っていたリリアが静かに礼を返したなら、もう一度頭を下げたイディリアは意気揚々にプリマの後に続く。

「あたくしのせいで貴方の行動に支障を来たすなど、あつてはならない事ですわ。皆にも迷惑が掛かりますし、それに何よりも——うきゅんっ！」

追いつけばプリマをそのまま担いだイディリア。

話を中断させられたプリマはポカポカその頭を叩くが、未だに上手く喋れない舌を内包するイディリアの顔は、そんな彼女をただ愛おしげに見つめていた。

娘の成長を喜ぶような、恋人に向けるモノでは絶対でない、父性溢れる眼差しで。

「……………」

プリマとイディリア、騒がしい夫婦をただ黙って見送ったリリアは、その姿が本棚の暗がり完全に溶け込んでから、ゆっくりと席についた。

物憂げなセレストブルーの瞳が揺れたなら、テーブルに肘を付いた手の甲が額に寄せられ陰を作る。

まるで、一人になった事を嘆くようにも見える陰だが、原因はイディリアの畏まった言葉遣いにあった。

あの時、それを止めるよう告げたりリアに対し、イディリアは「その様な無礼な真似は出来ません」と即座に拒否を示した。

次いでプリマの態度を「馴れ馴れしい」と評すると、リアに許しを請うても来た。

幼いゆえに、と。

その言葉が引き金となって、プリマとイディリアの話は冒頭に移るのだが、リアの心は一線を置きたがる虎の侯爵の言葉に囚われたまま。

「魔道書、だから」

通常、魔法にはどの世界においても詠唱が必要だという。

もし何かを創造する魔法なら、詠唱も通常の倍以上かかり、他にも色々と準備をしなくてはならない——らしい。

そんな手間をあらゆる面で省いてみせた魔道書の力。

たとえ創造したのが普通のティーセットだったとしても、畏怖すべきだとイディリアは敬語を使う事で言外に告げていた。

すなわち、魔道書は彼らにとって、脅威でしかないのだと。

——この身は変わっても、自分が自分である事に変わりはない。

そう思っていたリアにとって、イディリアの引いた線は、どこまでも冷たい痛みをもたらす。

ふいに視線が動けばテーブルの上、結局一口も口を付けられなかった、イディリアのために出したティーカップがそこに在った。

「確かに、怖いかもしれませんね。わたしは自分で創造したモノも、こんな風に簡単に消し去ってしまえるのですから」

自分とエニグマ以外の茶器がないテーブルを思い描いて瞬けば、プリマとイディリアのいた形跡が視界から完全になくなった。

口にした通りの結果を受け、リアがぼんやり考えてしまったのは、ティーカップと同じように消失する、誰かの事。

「っ！」

それは決して特定の人物を思ったモノではなかったが、対象を人と考えた自分にリアは恐怖した。

席を蹴って立ち上がれば、自分が起こした椅子の倒れる音に慄き、  
たたらを踏んだ靴音にも身を竦めて蹲る。

「いやっ……怖い、怖いっ！ どうして？ わたしは、わたしでいいいけないのですか？ どうしてわたしは、わたしのままなので  
す？」

帰るはずだった世界を失い、身体を失い——心まで失えというのなら、どうして最初から魔道書グリモアではなかったのか。

どうしてこの記憶は存在するのか。

あまりに強過ぎる力を真に自覚した時、少女が思ったのはそんな事。

自己があるから苦しいのだと、耳を塞ぎ、目を塞ぎ、歯を食いしばっては声を殺し。

魔道書グリモアに意思リリアなんかいない、そう心で叫ぶ——

直前。

「！ な、何、この怪音波……？」

閉ざしたはずの聴覚に、耳障りな旋律が響く。

\*\*\*\*\*

生まれたばかりのその命は 何も知らない

届く声は何たるか  
映す物が何たるか  
触る形は何たるか

嗅ぎ取る匂いも 含む味も その命は何も知らない

だからこれから知るのだろう

届く声がいかにあまいかを  
映す物がいかに優しいかを  
触る形がいかに慈しむかを

薫る香りの柔らかさを 口内を満たす幸福を

生まれたばかりのその命は 何も知らない  
ゆえに  
これから知るのだ

知りたいと思う全てを  
知りたいと願う思いを

そうして形作られたその命 其の名は

—— 誰も 知らない

自らが 告げぬ限り

\*\*\*\*\*

くらくら眩暈を引き起こすその音を頼りに、リリアが目を開け首を巡らせたなら、倒れた椅子の向こうに座るコート然の赤と黒の衣を纏った男が一人。

手には弦を振るわせる楽器があり、爬虫類を髣髴とさせる長く大きな口は、楽しそうに音を作り上げていた。

そう、音。

音楽とはお世辞にも言えない大騒音が、爪弾く旋律を掻き消して、リリアの頭を直に震わせている。

「え、にぐ、まっ」

聞くに堪えない音を止めるよう手を伸ばすリリア。

それはまるで、死に行く者が最期に望むモノへと縋る様にも似ていたが、呼ばれたエニグマはそんなリリアを尻目に口を閉ざすと、ベローンと弦を撫でて鳴らした。

どうやら曲終わりだったらしい。

助かった、そう思うと同時に、リリアは音程の狂いに平衡感覚を失った頭を抱えた。

最初にエニグマの歌を聴いた時は、実感はなくとも永い眠りの中だったためか、ここまでのダメージは受けなかった。

それでも、彼が物凄い音痴だった事をリリアは覚えている。

（い、一回目よりも、少しくらい慣れているはずの二回目の方が辛いなんて……）

魔道書の一生というモノが、どれくらいの永さなのかはさっぱりだが、それでもリリアは一生、彼の歌には慣れない気がする。

そうしてたつぷり余韻に苦しんだ後、ふらつきながらもリリアがゆっくり立ち上がれば、迎えるグラスグリーンの鼻面が小さな息をついた。

「プリマ、帰ったのだな。もう少しからかいたかったのに、残念だ」

「え、ええ。イディリアさん、という方がいらして」

「そうか。では……りりあはどうしてそうしているデス？」

楽器を裾に取り付けつつ尋ねるエニグマ。

リリアはまさかそんな質問が来るとは思っていなかったために、  
一歩よろけるように退き、かさり、何かを踏む音を後ろに聞いた。

見やればエニグマのシルバーグレイの髪を彩る花と同じ花が、ちらほら床に散らばっていた。

リリアと、エニグマの間にも。

「あ……」

今になって知覚した花の存在に惑い、花のない床を求めてリリアが踊るように足を運べば、テーブルに頬杖をついたエニグマが、つまらなさそうにその様子を見る。

「りりあ、えにぐまはだんまりは嫌いだと言ったデス。りりあはえにぐまを好きと言いなから、嫌いな事をするのか？」

「い、いえ、そういうわけでは——きやつ！」

エニグマへの返事に気をやった途端、死角で踏んでしまった花に足を取られ、リリアはそのまま尻餅をついてしまう。

「いたた……」

見事に打った箇所を擦ったなら、エニグマから呆れたような溜息が零れた。

「りりあ。淑女はそんなはしたない格好しないデス」

「え……きやつ！？」

赤茶のチェック柄のスカートが、際どいところまで捲かれているのを認めたリリアは涙ぐみ、顔を赤らめながらも手早くスカートを直していく。

完全に足を覆い隠し、けれども羞恥から立ち上がる事も出来ずにいれば、そんなリリアを嘲笑う風体でエニグマがぼつりと言った。

「まあ、バツチリ視てしまったから、某<sup>それがし</sup>には無意味な恥じらいだが」  
「っ……………」

しゅっつと頭から煙を出しそうなくらい赤くなったりリリアは、ス

カートの腿を両手で強く握り締めた。

スカート下の守りはそこまで薄くないつもりなのだが、どの道、見られたのは隠す前提の下着である。

穴があつたら入りたい。

しかして図書館の床に穴はなく、エニグマが埋葬の代わりに作った祭壇の上の枢も、二度目に此処へ来た時にはなくなってしまうていた。

（だ、大体、エニグマもエニグマです！そこはそれ、視なかったと言って下さつたら……どちらにしても変わりはありませんね）

逆に言われない方が嫌かもしれない。

あまりの恥さらしっぷりに、リリアは黄昏た瞳を横へ追いやる。

自分の不注意でエニグマにスカートの中を視せてしまったという現実から、目を逸らすように。

エニグマの歌を聞く前に抱いていた恐怖さえ、羞恥の前では薄れていくばかり。

だがエニグマは、そんなリリアを知つてか知らずか、彼女の中に消え去ろうとしていた恐怖を再度問い掛けてきた。

「りりあ。それで結局、どうしてそんなところで蹲っていたデス？勿論、えにぐまが聞いているのは、スカートの中が視える前の話デス」

「そ、れは……」

強調された「スカートの中」には頬を染めながらも、抱いた恐怖を探る言葉にリリアの顔が強張る。

イデイリアとの会話、それ自体を語る事に躊躇いはない。

けれどそれを語った後のエニグマの反応が怖い。

爬虫類の肌と顔を持つ長身瘦躯の異形は、対峙するだけなら相應の威圧感を有するものの、どこか抜けた面をリリアに見せ続けた。

だからリリアは思うのだ。

その抜けた面ゆえに、エニグマはこれまで、自分を怖れなかった

のではないだろうか。

グリモア  
魔道書に意思が付与している——本当の意味でそれを、イディリアのように理解したなら。

（エニグマは……エニグマもやはり、怖れるのでしょうか？ わたしを——）

だとするなら、怖かった。

いつそ、何も答えないリリアに愛想を尽かして、この図書館から去ってくれた方が良いと思えるほどに。

「りりあ、答えるデス」

しかし沈黙を嫌うエニグマは急かすばかりで、呆れもせずに居座り続けている。

対するリリアといえば、そんなエニグマを無視する事も出来ずに立ち上がると、まごつく口を億劫そうに開いて応えた。

エニグマの望む通り。

「怖い、のです。魔道書の力が。何でも出来るこの力が。とても強い力だから……他の人にも怖れられてしまうから。わたしは、わたしのなに、誰もわたしをわたしとして見てくれなくなるから」

「……イディリアか。あの若造め、余計な事を。しかし………りりあ」

「はい」

「こっちに来るデス」

頬杖を付く手とは逆の手の平が上を仰ぎ、上下に振られてリリアを招く。

天を指す黒い爪に一瞬だけ怯んだリリアは、おずおずといった調子でエニグマの傍まで歩みを進めた。

そうして、その手に自分の手を重ねようとし、この動きを遮るようににゅっと伸びたエニグマの手の平は、今にも泣きそうなりリアの頬を柔らかく包み込み撫でていく。

「え、エニグマ？」

愛玩動物を可愛がるに似た仕草に、強張っていたリリアの目が丸

くなれば、解れていたクロムイエローの髪の一筋へ指を滑らせたエニグマが、小馬鹿にしたような息を零した。

「確かにりりあは魔道書<sup>グリモア</sup>で、凄い力を持っているデス。だから怖れる者が現われるのも当然デス。何せりりあはこの<sup>世界</sup>図書館の館長、つまりは神にも等しい存在」

「神、なんてそんな。わたしは別に、館長なんて」

「幾らりりあが否定したところで、その事実には変わりはないデス。りりあは望む望まざるとに関わらず魔道書<sup>グリモア</sup>ゆえに館長、そしてこの図書館における唯一無二の神」

「……………」

館長という責任を要求されるような職すら認めたくないのに、重ねて告げられた神という単語は、リリアの理解を遥かに超えていた。同時に、イディリアの畏怖がどういう類のモノだったのか、その単語で痛いくらいに思い知る。

誰人もリリアを侵さない代わりに、誰人もリリアの近くにはいない。

それは、早い独立を目指して孤立していた、人間だった頃と同じでいて、全く次元の異なる話だった。

自分が自分としているだけで他者を脅かす——人によっては優越感に浸れるのかもしれないが、リリアはこれを忌むべき事と定めて下唇を噛む。

と、そんな彼女の自傷を嫌うように、髪から離れたエニグマの人差し指が、リリアの口の線に沿ってやや強引に歯と唇の間に割って入った。

一文字に添えられた指を啜る形を取られ、知らず落ちていた視線を上げたなら、頬杖を止めた鼻面が小さく笑むように大きな口を開けた。

「だが、絶対ではない」

え？ と声を上げるために動いた舌が、ざらついた鱗の感触にビクついて引っ込む。

これを見計らったように指を除いたエニグマは、小鳥を止まらせるに似た形を取ったまま、その手を己の方へと引き寄せた。

「普通は良くない、嬉しくない事。でも、りりあにとっては良い事かもしれない」

謎かけのような言葉を口にし、やけにゆっくりと指へ向かって舌を垂らすエニグマ。

「何を——っ!? エニグマ、止めて!!」

察したリリアは短い制止を叫んだものの、エニグマの舌先は構わず、僅かに濡れていた部分を舐めてみせた。

それが意味するところを正しく理解し顔を赤くしたりリアは、殺しきれなかった勢いで、関節的にだろうとも破廉恥な真似をした異形の男の胸倉を掴んだ。

けれども当のエニグマはどこ吹く風で、すっかり冷めてしまったであろう自身の紅茶を器用に煽る。

手遅れだと告げるかのように。

「にゃあ。りりあの紅茶は美味しいデス」

「止めてください、含みのあるような言い方は!」

「にゃ? 含みはあるデス。ような、ではないデス」  
「!」

思わぬエニグマの言に真っ赤になった顔が固まったなら、不可思議な紋様を描く目元の布がりリアに向けられた。

「どうデス? 判ったか、りりあ」

「な、にが……」

「にゃ。判らなかったか? えにぐまはりりあが止めてと言っても止めなかった。それはりりあが絶対ではない証だ」

「え……? 普通は、止められるのですか?」

「言ったはずだ。りりあは神だと。この図書館の中でなら、どんな制限も相手に掛けられる事が可能デス。……とはいえ、よくよく思い返してみれば、先程からりりあが制限を口にする相手はえにぐまだけだな。これでは証にならないデス。失敗したデス」

口調だけは残念そうに、顔は楽しそうに笑わせたまま、背後から回された手がリリアの頭を肩口へと寄せる。

エニグマのやりたい事がさっぱり判らないリリアは、握り締めた赤と黒の衣を離す事も忘れ、結わえられた髪越しに撫でられる動きにつられて頬を擦り付けるばかり。

「だが、逆ならどうデス？　りりあはさつきからえにぐまの望みを叶えているデス」

「？　だってそれは、エニグマが魔道書を手にした者だからでは」  
「そう。それだ、それ！　だからりりあは神に等しくとも、絶対にはならないし、なれない。何故ならりりあは既に、えにぐまの所有物」

「……はい？」

「にや？　何を不思議がつているデス。手にした者が所有者を表しているのは判り切った事デス」

「しょ、所有ってわたしは！」

物ではない、と言おうとして自分の本体が魔道書である事を思い出したりリア。

勢いに乗って顔を上げたは良いものの、続く言葉が見当たらずに動きが止まってしまえば、これを宥めるように頭を撫でていた手が背中をぽんぽん叩き始めた。

「りりあはりりあデス。だが、怖れられる魔道書グリモアでもあるデス。しかし、えにぐまは己の所有物を怖れない。——これを踏まえてりりあ、りりあは自分を怖れる必要なんかないデス。館長だろぅが神だろぅが、所有物だろぅが、前提としてあるのはりりあがりりあであるという事だけ。怖れる者があるのは仕方ない、だからといって、親切にも相手の怖れる己になる必要もない。無論、それに怯える事も……だがもし、りりあがそれでも怖れるというのなら、その対象にはえにぐまも含まれなくてはいけないデス」

「エニグマを？」

「そうデス。えにぐまはりりあの所有者であり、支配者。絶対の存

在」

「随分と物々しいですね」

「にゃ。でもどうデス？ 何だったら、えにぐまを嫌いになるところから始めるか？」

「……判りました」

楽しげに自分を嫌う事を勧めたエニグマに、リリアは神妙な面持ちで頷いた。

次いで彼女が行ったことといえば——服を離した手を彼の背中に回す事。

途端、エニグマの肩が見るからにがっかりと落ち込んでしまう。

「にゃー。りりあ、りりあはえにぐまを」

「嫌いになんてなりません。寧ろ今までよりもっと好きになりました。魔道書グリモアでもわたしでいていいと、そう言っ下さるあなたが」

「……物扱いは嫌だろくに」

「勿論嫌です。でもそれが判るあなたは、本当の意味でわたしを物扱いしたりしません。ですから」

「にゃあつ！ もういいデス！ 判ったデス！ 皆まで言うな！ えにぐまはりりあが大っ嫌いデス！！」

続く言葉を遮るように立ち上がったエニグマは、片腕で支えていたりリアを離すと、閉ざした口をもごもご動かす。

結局、エニグマは何もかも知っていてリリアの傍にいたのだと知り、取り越し苦勞の恐怖に笑いながら、見上げなければ見えない顔を眺めた。

すると、それはそれで別の疑問がリリアの中に生まれる。

「という事は、エニグマは魔道書グリモアの所有者だから、わたしと普通に接して——わわっ」

「違うデス」

エニグマの大きな手が、リリアの額に手首の付け根を押し当て、その頭をわし掴む。

リリアが両手で鱗の生えた手を押さえれば、これを嫌うように身

体ごと頭が前後に振られていく。

「りりあはつまらない事を考えるのが本当に好きだな。えにぐまは所有者になる前から、りりあとは普通に接してきたデス。所有者に為ったのも、りりあが勝手にやった事デス。それなのにその言い草は心外、とっても不愉快デス」

「ご、御免なさい」

揺さ振られながらも謝ったなら、パツと離される頭。

よろける腕を取られて見上げると、言葉通り、エニグマが不機嫌な顔をしていた。

「あ、あの、その……御免なさい」

彼の様子に何か言うべきだと思ったリリアだったが、出てきたのは同じ謝罪だけ。

「もういいデス。以後、気をつけるデス」

「は、はい」

腕を組み、どこか偉そうに頷いたエニグマは、立った席に戻ると鋭く黒い爪でテーブルの上をコツコツ叩いた。

「仕切り直しデス。りりあ、お茶」

「あ、はい。お菓子は」

「……今のえにぐまにそれを聞くのか？」

何のために彼が席を立てていたのかを思い出したリリア。

「……そうですね。大丈夫、ですか？」

「にや。そこそこ」

「そう、ですか。……次からは気をつけて下さいね？」

「善処する」

端的ながら真剣な返事を受け、同じやり取りをしたばかりだと気づいたなら、リリアは困ったように笑い、エニグマと自分のための紅茶を注ぐ。

（以後、と、次から。少なくともエニグマは、まだ、此処にいて下さるみたいですね）

そんな事を思いつつ、言えばこれもつまらない事だとエニグマに

怒られそうで、代わりに小さく息をつく。  
独りではないという、安堵の息を。

### マダムと侯爵様 その3（後書き）

これにて「館長案内」は一先ず終了です。

図書館内の大雑把な説明がメインのはずでしたが、プリマの登場を挟んだ事で随分話数が多くなりました。

次は少なくなる予定です。

一話一話も長文の気がしますので、今より短くなります。

と、なると、話数が多くなる可能性も。

支離滅裂…

ともあれ、ここまでお読み頂きまして、ありがとうございます。

次回は閑話を一つ挟んだ後で、図書館の命名がメインになります。  
楽しんで貰えたら嬉しいです。

## 閑話

「そういえば」

「にゃ？」

まだ中身の入っているティーカップを皿に置いたリリアは、彼女の声にティーカップを置いたエニグマへ首を傾げた。

「色々あってそのまま流してしまいましたが、プリマさんやイディリアさんがお住いの世界とは、どのようなところなのでしょう？」

お二人の容姿には、わたしが住んでいた世界の四つ足の獣の部位が見受けられましたので、そういう種族が暮らしているというのは判りました。でも、わたしやエニグマの容姿は珍しいのでしょうか？ 何か基準があるのですか？ それに魔法もすんなり受け入れていましたし」

「そうか、リリアの世界には魔法は存在しなかったのだな。その割には上手く使えていたような気もするが」

「それはたぶん、本体である魔道書のお陰ですね。あとは、魔法の存在しない世界ではありましたが、魔法という力への認識は書物等にありましたから。そもそも存在しないとは言っても、わたしは世界の全てを知っていた訳ではありませんので、本当のところはどうだったのか判らないのですけれども。現に今、こうして別の世界にはある話でしょうか？ まあ、確かめるつもりもありませんが」

紅茶を飲む事で一旦話を区切ったリリア。

自分の話よりもエニグマの話を知りたいと、カップを置きがてら、ギザギザしたシルバークレイの髪が垂れる、不思議な紋様の布を見つめて促す。

彼曰く、よく見えるという布に覆われた目は、しっかりリリアを捉えて頷いた。

「そうだな。とりあえず、プリマたちの世界では魔法は一般的デス。知識を得る事で魔法の幅が広がるから、若い者より老いた者、貧し

き者より富める者の方が魔法の腕は上デス。プリマたちを例に上げるならば、プリマはあれでも魔法の腕前は中の上、イディリアは最上位に近いデス。尤も、魔法の感覚センスという点においては、プリマの方が上だ。だからアレは本能的に敵味方を分けられるデス」

「イディリアさんは、プリマさんが幼いからわたしを怖れない、と仰っていましたか？」

「にゃー。否定はしない。だが、イディリアの怖れはアレ自身が言う通り、後天的なモノでしかないデス。魔法を何たるか知るがゆえの恐怖。だから、プリマが将来においても今の感覚を維持していたなら、りりあを怖れる事はないデス。安心していい」

「……………」

イディリアの言葉をまだ引き摺っていると知られ、気恥ずかしさを隠すようにティーカップに口をつける。

そんなリリアの行動を余所に、自身も紅茶を一口含んだエニグマは、軽く息をつくともう一つの疑問に答え始めた。

「プリマたちの世界の住人の基準は、えにくまの知るところではない。そもそも、その質問は自分の世界が基準となっているからこそ出てくる問いだろう？」

「言われてみれば、そうかもしれません」

「にゃ。だがしかし、りりあとえにくまの容姿が珍しいのは確かだ。プリマたちの世界には、りりあのような耳や鼻の形をした者はいないし、えにくまのような肌を持つ者もない。だからこそえにくまは姿を変える必要があるデス。とつても面倒臭いデス」

本当に面倒臭いのだろう、エニグマの首が億劫そうにやれやれと横へ振られた。

と、ここで、リリアの中に新たな疑問が生まれた。

「姿を変える……それならば何故、イディリアさんに似た姿へ？」

「にゃ？ イディリアにでも聞いたのか？ それともプリマか。…

…まあ、どちらにせよ、それは間違いデス。えにくまはその世界に一番馴染みそうな姿になっただけ。それがたまたマイディリアの一

族に似ていただけデス」

「一番馴染む姿……？　つかぬ事をお聞きますが、容姿の美醜は」  
「にゃ。関係ないデス。美醜は指定なしデス」

「ということはつまり」

（エニグマは、花竜ルフラの中では、そこその美人さん？）

プリマが声高に唱えていた「フェロモン」は無視しつつも、疑惑の美人たる爬虫類の鼻面を見つめたリリアは、はたと思い至って大きく頷いた。

論より証拠、今ここでエニグマに、プリマの世界での姿になって貰えばいいのだ。

「あの、エニグマ？　もし宜しければ、プリマさんの世界にいる時の姿になってみて下さったりは」

「疲れるからやだ」

「そうですか」

何となく断られる事は判っていた。

だからリリアはあっさりと引き、対するエニグマは大きな口をもごもごさせて、納得がいかない様子をみせる。

「にゃー。何度も言うが、リリアは諦めが早すぎデス。もう少し、我を貫こうとは思わないのか？」

「嫌がる方に強要するなんて出来ません。ただの興味本位ですし、駄目なら駄目で、それで良いのです」

「……言われた方は、引きの良さに怒ったのかと思ってしまっぞ？」

「……それは気づきませんでした。申し訳ありません」

きょとんと表情を固めたリリアは、エニグマに向かって深々と頭を下げた。

「にゃあ。どうしてリリアは、そういう態度が逆それがしに某を困らせると判らない？」

「困って、いたのですか？　それは気づかずに、申し訳」

「にゃ！　だから止めると言っている！　何でもかんでも謝ればいいものではないだろうが！」

椅子が床を搔く音に合わせて立ち上がったエニグマ。

そこまで激昂する事だろうかとりリアが不思議な面持ちで見上げれば、エニグマは鼻息も荒く牙をちらつかせながら続ける。

「手当たり次第に謝られては話がつかぬだろう？　それに、りりあは興味本位というが、そこまでの熱意も感じられない。どうでも良いと言われている気がしてならない」

「それは……否定出来ませんね。得られないモノに固執できるほど、明るい展望を持って過ごして来た覚えはありませんから」

甘えや我が侘とは無縁だった今までの記憶。

それら全てが当たり前だったりリアは、特に感情を浮べず淡々と自己分析を図る。

けれどもそれすら無駄だと切り捨てた彼女は、ふっと小さく口の端を持ち上げると、観念したような顔つきでエニグマを見上げた。

「ですが、そうですね。もう少し希望を持ってみても良いのかもしれませんが。だってエニグマ、とどのつまりは姿を変えて下さるのでしょう？」

「にゃ……そ、それとこれとは話が」

「同じ、ですよ？　でなければ、エニグマが怒る必要もないでしょうし」

「にゃあ」

とどめの如くにつこり笑えば、頭を抱えたエニグマが小刻みに首を振った。

はらはら舞い散る飾りの花の中で、エニグマはやられたとでも言いたげな声を上げた。

「りりあ、りりあはやっぱ卑怯デス。意地悪デス。えにくまはやっぱりりりあが大嫌いデス！」

「わたしは大好きですから、大丈夫ですよ、えにくま」

「にゃー。いや、やっぱりやだ！　某<sup>それがし</sup>はりりあ<sup>それがし</sup>の言う事を聞いたりなんか」

「してくれます。今までもお願い、叶えて下さいましたもの。ね、

エニグマ？」

もう一押しとばかりに柔らかく微笑む。

すると気圧されたように一步下がったエニグマは、ふくらはぎを椅子にぶつけて軽くよろめいた。

次いで頭を抱えたなら、大きく溜息をつく。

「判ったデス。やってやるデス。えにくまはりりあよりずっと大人デス。お子様の言う事もたまには聞いてあげるくらい、心は広いデス」

「ありがとうございます、エニグマ。……でも、お子様、ですか。それなら今度からエニグマの事はおじさんと」

「呼ぶな！」

「……おじいさ」

「却下だ！」

「……………兄貴？」

「最終的に来る言葉がそれか？」

「では、お兄ちゃん」

「……………りりあ。それがし某で遊んでないか？」

「遊んでいるつもりはありませんが、物の本で女の子がお兄ちゃんと呼ぶと、大抵の男性は喜ぶと」

「にゃー、どんな本だ、それは。……もういい。さっさと変化してやるから見とけ」

これ以上ないくらい、疲労感たつぷりの深い息を吐き出したエニグマは、項垂れる頭を支えるように右手を目元の布へ押し当てた。

「仮初の法。奇異なる貌。なぞる彼の地。浮かぶ常。識、折々、虚言は真に、真は虚ると変わりゆけ」

「わ……これは」

エニグマの言葉に呼応し、彼を中心に風が起こる。

魔法が発動しているのだと、初めて見る現象にリリアが自然と答えを見出したなら、小さく切った後でエニグマが続けた。

ヴェ・フォル  
「変化」

「！」

外へ広がり流れていた風が、一気にエニグマへと収縮していく。  
引き摺られそうな思いにかられたリリアは、座る椅子にしがみ付くときゅつと目を閉じた。

——と。

「……某は見とけと言ったはずだがな」  
それがし

「あつ！ す、すみません、エニグ……ま？」

不機嫌な異形の男の声を受け、目を開けたリリアがそちらを見たなら、思わず疑問符が語尾についてしまった。

それもそのはず、先程までの爬虫類の姿はどこへやら、そこにはシルバーグレイの毛並みが美しい、猫に似た頭部を持つ姿があったのだから。

目を覆う布と、赤と黒の着衣がなければ、たぶん、誰にも正体が判らないであろう彼の人、リリアのこの様子に腕を組むと、ふんつと面白くなさそうに黒い鼻を鳴らした。

「えにぐ、ま？ ではない。真正正銘、えにぐまだ」

「た、確かに声はエニグマです。違和感ないのが、また妙な気分ですが」

言いつつ席を立ったリリア、馴染みのない容姿におっかなびつくり近づいては、恐る恐る聞いてみた。

「さ、触ってみても？」

返事の代わりに、どっかり椅子へ腰を降ろすエニグマ。

横柄な態度を崩さない背丈は爬虫類時よりも小さいが、それでもリリアから見て長身である事に変わりはない。

だからこそリリアが触りやすいように座ったと察せられた動作に、幾らか安堵を感じてしまう。

疑っているわけではないのだが、ここまで違う容姿を前にすると、どうしても竦む部分があるのだ。

（でも、こんな風に接するのはエニグマくらい、ですよ？）

誰に確認するでもなく、心の中で呟いたリリアは、とりあえず両

の手を伸ばしてみた。

どこよりも気になる、ぴんつと張ったその両耳へ。

触れた途端、ビクツと過敏に反応した耳は、しかしてそれだけで動きを止め、リリアの指圧を受け入れる。

降りた手の平が毛並みに隠れた頬を撫でれば、擦ったそうにヒゲがひくひくと動いた。

「幻、ではなく、本当に、本物なのですね」

「当然だ。魔力にしても、プリマたちの世界と同じ流れを宿している。でなければ、姿を変えているなどすぐに気取られてしまうからな」

「そう、ですか……それにしても」

手を離して数歩後退し、改めてエニグマの現在の姿を見たリリアは。

「……ふふっ」

「にゃ？」

両手を口元に当てると同時に、エニグマへ背中を向ける。

小刻みに揺れる肩に不信感を抱いたのだろう、座ったまま伸ばされたエニグマの手が、リリアの腹に回って身体をぐいっと引き寄せた。

小脇に抱えられるようにして、背中がエニグマの身体を叩けば、拍子に外れた両手が腹に置かれた彼の手を掴み、解放された口が笑い声を上げる。

「ふ、ふくっ、うふふふっ！ え、エニグマ、エニグマが！ た、

確かに、確かにプリマさんの仰る通り、色っぽい！ あ、エニグマがつ！ は、あははははっ！ だ、だめ、笑い死んでしまいそうです！！」

「にゃー？ 笑ったぐらいで死んだりはしないぞ？ というか、色っぽいのは面白いのか？」

「ち、違っ、違います！ エニグマだから、面白くてっ、ぷ、ふふふふふふっ」

「にゃー。りりあの笑いのツボは良く判らん」

爬虫類の時には全く感じられなかった、色香を含む気だるげな雰囲気のエニグマの様子を受け、ここぞとばかりに笑い苦しむりリア。対してエニグマは、姿を変えただけで笑われる理由が判らず、目の布を怪訝に寄せるのみ。

示すところは、最初からエニグマはこの雰囲気を持ち合わせていた、という事で。

「ぐうつ……け、けほつ。うつう、だめ、笑い過ぎて吐きそう……ふふふっ」

「りりあ、りりあは吐いても何も出ないぞ。笑うのを止めた方が早い」

言いつつ背中を労わる手つきで擦ってくるエニグマに、りリアは何とか笑いを止めようとして――

幾度となく、挫折を繰り返していく。

## 閑話（後書き）

その8で良いのではないかと思いつつも、  
以上、閑話でした。

## 安らかならざる眠り その1

目を閉じたまま、もぞもぞする事、数分。

負担が掛からない程度にふかふかした布団から、少々乱れたクロムイエローの髪をにきつと出したなら、鮮やかなセレストブルーの大きな瞳がゆっくりと開かれていく。

ぼおとした眼が捉えたのは、一つしかない壁のランプでは防ぎきれない、闇夜の揺らめき。

「ん……まらくらひ、れふ。もおすこひ、れむるろれふ」

寝具に半分押し付けた、ふつくらとした朱唇より紡がれる、あまり意味のない言葉。

これを合図に再び瞳が閉じられようとすれば、

「りりあ。まだ寝るのか？」

彼女の目と鼻の先に、グラスグリーンの鱗を持つ、爬虫類の鼻面が置かれた。

「うみゆ？……おつきなとかれえ」

合わせて為された問い掛けに、もう一度目を開けたリリアは、ざらざらしたその肌へたおやかな手を伸ばした。

不可思議な紋様を描く布から鼻先にかけてを数度撫でつけ、単調なその動きにまたしても瞳を閉じていく。

が、次の瞬間、ぱちつと目を見開いては、驚いた様子で瞬き。

「えり、ぎゅま？」

「えにぐまは、えりぎゅま、じゃない。えにぐまデス」

「……ああ、そうでしたそうでした。何やら家の布団にしては、寝心地が良いとは思っていましたが、ここは図書館、ですものね」

布団からのっそり上体を起したりリアは、顔に掛かる長い髪をかき上げると、未だに鼻面をベッドに沈ませ、脇では長身瘦躯をコンパクトに縮ませたエニグマを見て、にっこり笑った。

「おはようございます、エニグマ」

「おはようデス、りりあ」

「それで——」

リリアの寝惚け眼がぐるりと室内を見渡す。

とろんとした瞳に映るのは、自分が使っているベッドとテーブルと椅子以外には家具のない、簡素なログハウスの内装。

所々に散乱している花は、エニグマのシルバークレイの髪から落ちたモノだろう。

夜の景色をくりぬいた窓はあるものの、開くようには作られておらず、また、どこかへ通じる扉も室内には見当たらなかった。

リリア自身がそういう風に創造したのだから、間違いない——はずなのだが。

眠る前の記憶を手繰り寄せ、変わったところは何もないと確認した後、リリアの視線が次に見たのは半分寝具に包まれた自身の姿だ。頼りない細さの肩紐に続く、薄い守りの白いワンピース。

覗けば発育途中の二つの丸みが、ワンピースの中にしっかりとした陰を作っている。

今一度、リリアの視線がエニグマに向けられたなら、寝具に半分埋まった大きな口が、鋭い牙をちらつかせつつ小さく傾いた。

「それで？」

「……………」

眠りから脱せない頭が、その問いを自身が発した言葉の復唱と理解するまで、数秒。

エニグマの呑気さに微笑みが若干引き攣り始めたなら、合わせてリリアの首が傾ぐ。

と同時に、肩紐の一つが腕を滑って落ちた。

「出入り口もないのに、どうやってお入りに？」

人間の形を象ってはいるが、本体は一冊の本であるリリア。

それでも精神は見た目通り年頃の少女、違う種族とはいえ男のエニグマが、共に寝室に在るのを良しとした憶えはなかった。

だからこそ、このログハウスの内装には、出入り口を作らなかった

たはず、なのに。

依然として寝具に顎を置いたまま、エニグマはいけしゃあしゃあと言った。

「勿論、魔道書マジックブックに言っ、デス。暇になった、入れろ言ったら、簡単に入れたデス」

手にした者のどんな願いでも叶える魔道書——リリアの本体。

手にした、とは魔道書の名前を魔道書自身がその者に許す事を意味しており、彼女からその名を明かされたエニグマの願いは確かに叶えてきた。

しかし、彼女の意にそぐわない願いは叶えられないはずで、それを教えてくれたのは、他でもないエニグマ自身。

だというのに、彼の願い——というか命令を叶えてしまった理由は。

(……眠っていたから、でしょうね。だから無意識に、エニグマの願いに反応してしまった)

もしもこれが他の者の所業なら、眠りの時をわざと狙ったのでは？ と疑えるものの、相手がエニグマでは素でやったとは思えない。

怒るポーズすら取れず、リリアの口から溜息が零れ落ちた。

「暇……私、寝ていましたよね？」

どちらにせよ、エニグマの暇は解消されなかっただろう。

そんな意味合いを込めて眉根を寄せれば、ようやく身を起こしたエニグマの手が伸びた。

黒く鋭い爪にリリアの落ちた肩紐を引っ掛け、元の位置まで戻した彼は、薄くとも整った格好に満足げな鼻息をつく。

「にゃー。勿論デス。りりあは寝るために此処を創ったのだから、当たり前デス」

「では、入ってきてても、やはり暇だったのでは？」

「にゃ？ そんな事はないデス。りりあを視ているだけでも、充分面白かったデス」

「……視てた？ 眠っている私を？」

「視てたデス。眠っているりりあを」

「……………」

「……………」

エニグマの目元を隠す布と見詰め合うこと、数秒。

ぽすつとベッドに倒れたリリアは、うつ伏せになって枕に顔を埋めると、くぐもった深い息をそこでついた。

（こういう場合、どういう反応を示すのが正しいのでしょうか？ 怒るべきか、それとも恥ずかしがるべきか）

左目だけを横へ傾けたなら、またしても同じベッドに顎を埋めるエニグマの姿がある。

のっそり動かしした左手で、「おっきなとかれえ」と言った時のように、その鼻面を撫でてみれば、ざらざらした感触が返って来た。

（……でも、エニグマが相手では、どちらの気も失せてしまいますね）

エニグマが入れないよう出入り口を閉ざしたリリアは、実際こうなってみると、あまり気にしていない自分に気づいた。

それどころかこの平常心、こうなる事を無意識に予想していたのだろう。

（互いを知り合ってから、まだ一日も経っていないはずなのに）  
そんな事を思いつつも、うとうとし始めるリリアに対し、撫でられるままだったエニグマが低い声で問うてきた。

「りりあ、おはようは？ 起きるのではなかったのか？」

「ん…… やっぱり、も、すこし…… ねむたい、です」

心地良い低音に辛うじて開いていた眼が閉ざされたなら、静かな声音が闇の中で小さく頷く気配。

「そうか…… では、某が子守歌を歌ってやろう」

重みが退き、弾むリリアのベッド。

「……………」 え？

左手から鱗の感触が逃げるのを追うように目を開けたリリアは、

エニグマのコートに付けられた楽器が取り外される様を認め、眠気を吹き飛ばす嫌な予感に襲われた。

（エニグマの楽器の腕前——は中々ですが……子守歌？……こもり、うた。うた……エニグマ、の？）

「ひっ！？ え、エニグマ！ ちょっと、ストツ——！！」

エニグマの子守歌——指し示すところが何なのか、リリアが理解し制止を叫んで飛び起きた時には既に遅く。

その歌は、始まってしまっ

## 安らかならざる眠り その2

星の瞬き 月の光

迎える夜には 夢が招く

今日はどんな一日でしたか？

楽しかった？

嬉しかった？

それとも、哀しかった？

どんな日であれ 感じた心は

きつと疲れてしまった事でしょ

だから さあさ

お眠りなさい

星は囁く 眠りの刻を

月は導く 静寂の入江

夢は輝く 貴方と共に

目覚めは遠く 闇は深く

眠れ眠れ 愛しい児

安らかなる眠りを 私は捧ごう

目を閉じて

眠るように 祈りながら

\*\*\*\*\*

天井から大判の図書が並ぶ本棚の上まで、緩やかなカーブを描く曇りガラス。

そこから滲む白い柔らかな光に照らされた図書館の一角では、現在、クロムイエローの頭に氷嚢を乗せた少女が、うんうん唸りながら、幾つかある円卓に肩から上を投げ出していた。

あらゆる世界の本を網羅した、それ自体が一つの世界である図書館の館長とは、到底思えぬ姿である。

と言っても、彼女自身が館長、引いては魔道書グリモアになっちゃったのだと知ったのは、つい昨日の事。

それまで彼女——リリアは、特にこれと言った芸もない、単なる人間の少女に過ぎなかったのだから、一目見て館長と判るような雰囲気を持てと言われても、土台無理な話であろう。

様々なモノを図書館内に創り出せるようになった今でも、己の身や立場が変わってしまった事に対して、完全に納得など出来ていないのだから。

昼夜問わず同じ景色を見せる館内にあって、昨日という尺が出来るサイクルを未だ引き摺るなら、尚更に。

「く……あ………うっう………」

リリアは突っ伏した状態で、何度目になるか判らない、意味のない呻き声を上げた。

脳を直で揺さ振るような怪音波を浴びせられたのだから、無理もないだろう。

もし、未だこの身がヒトであつたなら、既に命はなかったとさえ

言える……かもしれない。

途切れ途切れになる意識の合間で、そんな事を考えたリリアは、魔道書で良かったと思う反面、魔道書でなかったら、とも思った。

ヒトから精神<sup>リリア</sup>を移し取った、強い力を秘めし魔道書が彼女の本体でなければ、擬態でしかないはずの身体に、ヒトのサイクルが見事に再現される事もなかった。

そしてその結果——必要となる睡眠時間を慮ったエニグマが、子守歌を披露する事もなかったはずだ。

「あぐっ……うぐうっ………」

円卓の上に爪を立て眦に涙を浮かべたリリアは、苦悶に喘ぎながらも、昨日の経緯を思い出していく。

昨日、別の世界からの来訪者を迎え、そして見送った後に襲ってきた強烈な眠気<sup>ルフラ</sup>。

花竜という別の世界の種でありながら、今のところ図書館から出て行く気のないエニグマは、これを魔道書のせいだと説明する。

彼の魔道書が、人間だった精神<sup>リリア</sup>を保つために、人間の中に息づく生活サイクルを再現したせいだと。

だから眠れ、と言われても、椅子と円卓しかない、人間とは姿形が違っても男だというエニグマのいる空間で、眠りに興じる事は出来なかった。

本体がヒトを撲殺できるような分厚い本であっても、魔道書<sup>グリモア</sup>になったシヨックから知らない内にかなりの時間を経過していたとしても、リリアの精神は十四歳の少女のままなのだ。

ゆえに、意識していると勘繰られては面倒だとエニグマ云々を抜いて、椅子と円卓しかないから眠れない旨を伝えたなら、思いの外、彼は理解を示してくれた。

そして、それならイイ物があると言い、赤と黒のコートの陰から

エニグマが出してくれたのは――

一度、リリアを納めた事のある白い柩。

花竜は儀のための道具なら、何でも自由に後ろから取り出せる。  
ルファ

そんな事を誇らしげに語るエニグマに対し、顔を一気に青褪めさせたリリアは、全身全霊で即座に拒否した。

不可抗力で入ってしまった過去があるとはいえ、柩とは元来、死者を弔うために存在している。

無機物でも、死んだ憶えのないリリアには、相容れない代物だった。

第一、これではエニグマを遠ざける事は出来ないだろう。

リリアの嫌がりように、からかいを自分の専売特許と豪語するエニグマは、喜ぶでもなく渋々柩を背後に戻した。

りりあは我が侏デス、と不満を漏らすところを見るに、どうやら柩を出したのは彼なりの親切心だったらしい。

――からかいだったらまだ救われたものを。

あからさまにがつかりした様子のエニグマを前にして、言いたくなつた言葉をぐつと堪えたリリアは、こうなつたら仕方がないと、先程故意に隠した事を口にした。

エニグマがいると眠りにくい、と。

リリアの直球を受けたエニグマは、きょとんとした様子でしばし間を置くと、納得の合図に握った拳を広げた手の平にぽんつと落とす。

りりあは誰かがいると眠れないのだな、と少々 of 曲解をしつつ。

しかし言われてみれば、ここは曲がりなりにも図書館。

どこで眠ろうとも、誰も来ないとは言い切れない。

ではどうすれば良いか、悩むリリアを余所に、不可思議な紋様を描く布の奥で楽しそうな雰囲気を作ったエニグマは、彼女へ良い案があると告げてきた。

図書館の中にリリアの寝室を作れば良い、という。

かといって、図書館の中に一室増やす行為は、他の世界に直せば島を一つ創るに等しく、魔道書グリモアになったばかりのリリアでは、かなりの労力を要してしまう。

だから、とエニグマが続いて提案したのは、図書館を案内した際に立ち寄った、外と見紛う閲覧スペースの一角に小屋を建てる、というものだった。

そうして眠気を抱えたまま移動したリリアは、出入り口からは見えない場所に小さなログハウスを創り、エニグマと別れた後でようやく眠りについたのだ――

が。

「……ふ、う。ど、どうにか耐え切りました」

親切という名の地獄から無事生還を果たしたリリアは、億劫そうに氷嚢を避けると、水音をさせるそれをたぶたぶ弛ませながら、仰々しい溜息をついた。

「エニグマ……やはり彼は、気づいていないのでしょうかね」

少しでも思い出せば、まだツキツキ痛むこめかみ。

リリアは眉を顰めつつも、エニグマが歌った子守歌を思い、泣きたい気分陥ってしまった。

「あの、破壊力満点の音痴っぷり……誰が教えると言ったら、わたししかないような気がします」

視界も霞み歪む、絶望的な旋律の只中であって、それでも認めてしまったエニグマの歌う姿は、歌が大好きだという思いに満ち溢れていた。

しかも今回は、リリアに心地良い眠りを提供しようという、思い

やりまである始末。

死人が出るのでは！？ と怖れてしまうほどあなたは音痴です、などリリアに言えるだろうか。

たとえ子守歌で悶え苦しむ様を眠りについたと勘違いし、それと同時に襲われた眠気でリリアのベッドをほぼ占拠、今もそこで眠っているのだとしても。

「言えない……言えません。わたしには、無理です」

今にも息絶えそうな細い声で、青褪めた顔で、リリアは己の不甲斐なさを呪った。

## 斯くして椅子は投げられた

己の無力さを呪ったところで、ヒトのサイクルを忠実に守る擬態は、リリアの絶望とは関係なしに段々と腹を減らしていた。  
くきゆるきゆるきゆる」

「……………」  
そうして程なく鳴ったのは、間違いなく朝食をせがむリリアの腹。実際、今がどの時間帯に当たるのかは判らないが、夜の睡眠時間並みにぐっすり眠ったのだから朝食で構わないだろう。

兎にも角にも、誰もいないにも関わらず、鳴ってしまった腹の音に頬を染めたリリアは、椅子の背もたれに上半身を投げ出すと、赤いリボンが揺れる頭で何を食べようか考えていく。

（昨日は結局、お菓子とお茶しか口にしていませんし）

忠実なサイクル同様、栄養バランスも考えなければいけないとなれば、昨日のような食事の済ませ方は極力避けた方が良いでしょう。

何より、リリア自身が甘さ以外の食物を欲していた。

（うん。ここは無難に、サンドイッチとミルクにしましょうか）  
閉ざした視界の闇に浮かぶ、トマトとチーズとレタスを挟んだサンドイッチと瓶に入ったミルク。

途端に嗅覚を刺激する、思い描いた通りの食べ物の匂いに目を開けたなら、それらは食器と共に円卓の上を飾っていた。

「……便利には便利、なのですが。味にしてもわたし好み、なのでしょうが」

口に出してみれば贅沢な話、とは思うものの、これもまた、例外なく美味しいのだろうと想像がついてしまうのはいかなものか。  
美味しいのは良い事だが、どれも同じではその内「美味しい」という感想に飽きてしまいそうだった。

そんな思いに駆られつつ、手に取ったサンドイッチへパクついたリリア。

「……………」  
もぐもぐ咀嚼し、何も言わずにミルクを飲み込んで、  
「……………」

やはり何も言わず、少しだけ不思議そうに眉根を寄せた。  
（美味しくない、訳ではないのですが……何故でしょう？ 美味し  
い、と簡単には言えないこの感じは）

言ってしまうば、普通、だった。

食べ慣れた、普通の味。

何の変哲もないサンドイッチと、特に濃いも薄いもないミルク。  
しかし、だからこそリリアが今一番欲していた味でもある。

（もしかするとこうして創った食べ物、わたしの味覚に左右され  
るのでしょうか？ それとも、食べた人物がその時欲する味を再現  
してくれるのでしょうか？ 前者だとするならば、昨日プリマさん  
に提供したような事は、今後、極力避けた方が良いでしょうけれど  
も。後者ならば便利……ですが、人間離れし過ぎですね）

視認できる見慣れたこの身体が擬態で、本体はリリアが望めばい  
つでも何処からでも取り出せる、一冊の分厚い本だという事は、既  
に理解している。

それでもヒトの枠組みを離れられないリリアは、どちらにせよ人  
間離れしている行為の中に、自分の味覚という、ヒトとして積み上  
げてきた経験を取り入れる事で、前者の方がまだヒトらしいと判じ  
ていた。

五十歩百歩、目くそ鼻くそその世界である。

勿論、リリアとて、そんな自身の考えが、悪あがきみたいなもの  
だとは判っている。

なので早々に、どちらにせよ、第三者がいなければ確かめられな  
い事、と終わらせては溜息を一つ。

「エニグマ……は、まだ眠っているのでしょうか。うーん、どうし  
ましょうか？ これを食べ終わっても、余る時間はほぼ無限。彼が  
起きたなら、色々お話も出来るのでしょうか。……はあ。不思議

なものです。元々の世界ではわたし、暇があれば本だけを読んでいて、人間関係なんて全く構築してこなかったのに。こんな、本しかない世界に来てしまったのなら、読書よりも誰かとの会話を望んでいる」

（しかもこんな、長々とひとり言まで。誰が聞いている訳でもありませんから、恥ずかしいということもないのですが）

何ともなしに、ヒトは一方が満ち足りていると、満ち足りていないもう一方を求める、という話を思い出す。

このサンドイッチにしても、もっと美味しい物になっただろうに、リリアはそれを望まなかった。

（……我が俤、贅沢ですね）

何口食べても普通の味。

何度飲んでも普通の味。

（もしも、もしも仮に、不味い物が食べたい、などと無意識に思ってしまったら……）

「考えたくない、ですね。ヘタをすると、嫌いな物のオンパレードになってしまいそうですし」

特に好き嫌いはないものの、料理未満の見るからに不味そうな物体たちがリリアの脳裏を過ぎり、柳眉が顰められてしまう。

これを解すように、サンドイッチの普通の味を咀嚼していたリリアは、ふと視線を、窓の白い光がふつりと途絶えた、橙のランプで等間隔に照らされている本棚の暗闇へと向けた。

食事を終えて、本を読むとして。

「一人であそこへ行くのは……やはりまだ少し、怖い、かもしれません」

ログハウスからここまでの道程は、エニグマの歌の破壊力で、何も感じられなかったものの。

改めて見やれば浮かぶ恐怖心。

思い出すのは、彼女にとっては昨日、実際には遥かな昔に遭遇した化け物の事。

そういえば結局あれは何だったのか、まだ教えて貰っていない事に気がついたリリアは、エニグマが起きたら早速聞いてみようと思  
い、かけ。

「……えっ？」

見つめていた暗がり動きを認めたなら、食べかけのサンドイッ  
チを皿に置いて、席を立つて身構えた。

セレストブルーの瞳が油断なく動きの正体を探るのとは裏腹に、  
スカートと同じ赤いチェックのスカーフの下で大きく跳ねる心音。

擬態である以上、本当に心臓がある訳ではないだろうが、エニグ  
マ曰く、魔道書グリモアの創り出した擬態は完璧であるがゆえに、傷を負え  
ば同程度のダメージを精神にもたらしってしまう、らしい。

だからこそ高鳴るのか、胸の上を無意識に押さえたリリアは、相  
手が何であれ迎え撃てるように、もう一方の手を椅子の背に添えた。

——瞬間。

「あーっ！ ほら刹那！ 僕の言った通り——」

『御主人、前方要注意』

「へ？——がつ！？」

本棚の陰からひよいと、何かが姿を見せたなら、反射的に投げら  
れた椅子がそれを見事に撃沈させた。

投げたのは勿論、極度の緊張に追い込まれたリリアだ。

が、しかし、彼女が想定していた標的は、記憶の中にある化け物  
の姿であり。

「あ、あれ？……ああっ！？ す、すみません！ 大丈夫ですか！  
？」

椅子を投げつけた相手が異形ではあっても、化け物ではなかった  
と知ったなら、顔を青褪めさせたりリアは大慌てで、伸した相手へ  
と走り寄っていった。



## 刹那的御主人 その1

走り寄ってきたリリアに対し、無機質な露草色の瞳と手の平を向けて制止を呼びかけたのは、驚く事に、リリアと同じヒトの形をした使用人姿の少女。

『関係者以外立入禁止。御主人行動不能故、刹那、迎撃状態移行済。接近者、皆敵也』

「え……えーつと？」

しかし語る言葉には抑揚がなく、声音にしても中性的で機械音が混じっており、リリアの知っているヒトとはだいぶかけ離れていた。困惑しつつも彼女の言う通り動きを止めたリリアは、セレストブルの瞳をぱちくりさせると、小首を傾げて問い掛けてみた。

「つまり、これ以上近づいたら、敵と見なして攻撃する、という事でしょうか？」

『肯』

少女の首が小さく上下に振られれば、黒くさらさらした短い髪と共に、頭につけられたカチューシャの白いレースも軽く揺れる。

近づいてはいけませんが、質問には答えてくれるらしい。

勘違いで椅子を投げつけてしまったリリアは、続いて、命中した相手の安否を少女に問うていく。

「あの、それでは、その、あなたの仰る御主人、は大丈夫なのか？」

『否。御主人、愚者小心者。問題、一族中最多』

「え、えー……い、いえ、わたしが尋ねているのはそういう事ではなくてですね？」

御主人、という表現を用いるにしては、あんまりな言葉にリリアの目が揺れた。

とはいえ、加害者はこちら。

少女がそこまで慌てていないところを見るに、御主人とやらの身

体は大丈夫と仮定したりリアは、とりあえず謝罪を述べる事にした。  
——たとえ御主人が瀕死の重傷を負っていても、少女が慌てると思えない、そんな想像からは目を逸らしつつ。

「その、すみませんでした。わたしのせいで」

『謝罪不要。全部、御主人之脆弱性故也。自業自得。心配御無用』

「え……いえ、ですが」

『……其方之謝罪、逆効果。御主人、殊更散々』

「それはつまり、わたしが心配すると、あなたの御主人が可哀相、

と？」

『概、肯  
おおむね』

コクリ、肯く少女。

少女の言葉の方が辛辣に思えるものの、彼らは別の世界からの来<sup>ビ</sup>訪者に違いなく、そうになると、リアの常識でその関係を量るのは難しい。

このためリアは一旦口を閉ざすと、質問の方向を変えてみた。

「あの、御主人が目覚めるまで、あなたとお話しても差し支えありませんか？」

『話？』

「ええ。実はわたし、暇を持て余しておりまして」

『受諾。併、刹那之会話、娯楽性皆無。其方、退屈確實』

声と表情は相変わらずの無表情だが、申し訳なさそうに少女の首が小さく項垂れた。

リアからすると、会話それ自体が楽しみであるため、少女の言葉には静かに首を振って微笑んでみせる。

「いいえ。そんな事はありません。ええと、刹那さん、でしたか？」

『肯。併、敬称不要』

「ああ、申し訳ございません。ですが、わたしは敬称ナシだと呼びにくのです」

『……概、快諾』

「ありがとうございます」

逡巡しながらもぎこちない動きで首肯した少女・刹那に、頭を下  
げたリリア。

次に自分の名を名乗ろうとした彼女は、その弊害を思い出すと、  
口をぴたりと閉ざしてしまった。

（そうでした。わたしが名乗ってしまったら、刹那さんが魔道書グリモアの  
力を手にしてしまう）

会ったばかりで善も悪も判断付かない相手、たとえ刹那が根っか  
らの善人だったとしても、不用意にリリアから名前を教えてはいけ  
ないのだ。

世界を一から創造する事も、無に帰す事も出来る、底知れぬ魔力  
を秘めた魔道書グリモアであるがゆえに。

だからといって、相手に名乗れない名前がないのも頂けない気が  
したリリアは、それならばこの図書館の名前を仮の名にしようと考  
えた。

そしてすぐさま挫折する。

（どうでしょう。わたし、この図書館の名前を知りません。……  
いえ、そもそもこの図書館に名前などあるのでしょうか？）

リリアは瞳を閉じると、常は自身の内に隠された彼女の本体であ  
る魔道書に、図書館の名前を問うてみた。

魔道書エニグマの所有者でなくとも、リリアが望めば答えを返す魔道書は、  
程なく彼女の脳裏に図書館の名前に関する情報を流していく。

図書館が過ぎしてきた年月を匂わせる、膨大な数の情報。

ヒトのままであれば狂うところを、魔道書ゆえの速度で処理して  
いったリリアは、秒単位で終わると、ゆっくり目を開いて数度瞬き。

「名前が、ない……？」

ぼつり呟いたリリア、刹那の顔が小さく傾いたのを捉えては、軽  
く手を振って誤魔化し、それをそのまま口元に当てて考えに浸って  
いった。

（この図書館には名前がない。いいえ、それどころか、内部のどこ  
にも名前はない、と）

酷く不便だと、リリアは思った。

あれだけの年月を過ごしておきながら、何一つ、名前が存在しない図書館。

その答えをもたらした魔道書グリモアでさえ、リリアが宿るまでは名前を持っていなかったという。

名前というのは、そのモノを表すための事細かな説明を省く、有用な手段にも関わらず。

（困りました。名乗れる名前がないというのは、思っていたより面倒ですね）

かといって、刹那を刹那さんと呼びながら、自分だけ呼ばせないのは無作法に値する。

少しばかり考えたリリアは、名前そのものではないものの、現在の自分を表すのにぴったりな役名を思い出した。

望んでなかった訳ではない、図書館の館長、という役名を。

「刹那さん、申し遅れましたが、わたしの事は館長とお呼び下さい。こんな姿をしてはおりますが、一応はこの図書館の長を務める身です。」

『受諾……？ 否、刹那之記憶、此図書館館長、未確認』

「館長は未確認……」という事は、刹那さんは以前にもここにいらしたことがあるのですか？」

『肯。御主人、初見。刹那、数回』

「そうですか。すみません。何分、先日館長になったばかりのものです。」

『先日？』

「ええ。先日というか、昨日というか……もしくは遙かな昔といふべきなのか」

『……其方之話、理解不能』

「まあ、そうですよね。わたしも今もって理解はあんまり出来ていませんから。でも、館長なんです。わたし自身が望んでいなくても」

『理解不能、不変。併、其方之話、受諾』

「ありがとうございます」

無表情まま困惑しつつも頷く刹那に、リリアはほっとした表情を浮べた。

これようやく、互いの名を呼び合って会話が出来る。

そんな風に思った矢先。

「——ったいっ!」

「ひゃっ!」

「……あれ?……えーっど?……うん? 何でこ

んなとこに刹那以外の自動人形が?」

がばつと勢い良く起き上がった刹那の御主人が、突然の事に言葉を失くしてしまったリリアの方へ、ぺたぺたと歩み寄ってきた。

チャコールグレイの尻尾をフリフリさせながら。

## 刹那的御主人 その2

尻尾と同じチャコールグレイの、鱗肌で形成された足。

先には鋭く白い爪を携えているものの、床を打ち鳴らすのは裸足の軽い音。

くるぶしから甲にかけて包帯状の布が巻いてあり、これが彼にとって靴の役割を果たしているようだ。

かといって、小柄な身体を包む服には、靴のような野性味はなく、純白の衣や縁を彩りながら伸びる蒼の刺繍は、法衣のように厳かな雰囲気醸し出している。

そんな刹那の御主人を見つめるリリアは、中でも一番目を引く頭に視線を釘付けにした。

エニグマによく似た、しかし、彼よりももっと、リリアの知る幻想生物に近いその姿は、紛れもなく――  
むにっ。

「ほへ？」

ぺたぺた近寄る刹那の御主人に合わせ、リリアが徐々に顔を下へ向けたなら、何の前触れもなく突かれた頬。

突然の事にリリアの動きが止まっても、刹那の御主人は構わず、何度もその頬を押していく。

幾つもの白い角を持つ、少々丸みを帯びた竜の頭の下、やわらかい紫色の瞳をキラキラ輝かせながら。

「おお、凄いで、刹那！ この自動人形、すつごく柔らかい！ うわー、いいなー、欲しいなー！ この製品だろう？ 僕のお小遣いで買えるかな？」

「あ、あの？」

ひとしきり頬に触れた後で、リリアの背後に回った刹那の御主人は、戸惑う彼女を余所に、これまた唐突に、スカートを捲ろうとしてきた。

「きゃあつ！？」

さすがにこれは黙認できず、リリアが抵抗しようとしたところ、それよりも先に刹那の御主人が、横からの打撃を受けて本棚に激突した。

「え……え？ ええ？ せ、刹那、さん？」

二度ほど上がる鈍い音に、リリアの目がこれをもたらしした刹那を認めたなら、それまで守っていたはずの対象を、どこに隠し持っていたのか、太い棍棒で叩いた彼女は、清々しいほどの無表情でこちらに首を傾げた。

『館長、平気？』

「は、はい。わたしは……でも、それより刹那さんの御主人が」

『御主人、今之駄目。悪漢然。土羅群失格』

「？ どちらぐん？」

それまで辛うじて理解できていた刹那の言葉だが、聞きなれない単語の出現に、リリアは答えを求めるように反芻した。

すると返ってきたのは刹那からではなく、あれだけの衝撃を受けてなお、ビクともしない本棚の下で、よろよろ起き上がった、彼女の御主人。

「ドラグーン、だ。刹那、また勝手に字を当てたな？——ってて。

てか、お前、僕の自動人形オートマタのくせして、何で僕を攻撃するんだよ！」

オーキッドの瞳にたつぷり涙を浮かべ、刹那の御主人が少年の甲高い声で叫べば、これを涼しい顔で受けた刹那が、嫌味つたらしく姿勢を正して頭を垂れた。

『御主人之言分、御尤。刹那、猛省。併、彼女、非自動人形。彼女、此処之館長』

「え？ 館長？ ここつてそんなのいたのか？」

「そんなの、ですか」

「あつ！ ええと、その、なんだ。……悪かったな、勘違いして」  
リリアの声に慌てて謝罪を伸べた刹那の御主人だが、その言い方はどこか偉ぶって聞こえる。

身なりが身なりであるため、昨日訪れたプリマたちと同様の貴族なのかとリリアが勘繰れば、そんな御主人に近づいた刹那が、今度はグーで彼の頭をぱしりと叩いた。

「いたっ！ 何をする、刹那！」

『御主人、無礼之極。変態行為、重罪。謝罪、誠実第一』

「へ、変態！？ 失敬な！ そ、それは確かに、女の子にする事ではなかったかもしれないが……。でも、僕は知らなかったんだぞ！  
オートマタ？ 自動人形だと思ったから、製造番号を調べようと思って」

『館長、御主人之非礼之数々之許、刹那、願出』

しどろもどろになる御主人を無視して、頭を下げる刹那。

この様子にいじけた素振りで顔を背けた御主人は、口の先で文句をブチブチ呟く。

決して正しいとは言えない主従関係を前にしたりリリアは、先程まで御主人に突かれていた頬を掻きかき、小さく首を振った。

「あまりお気になさらないで下さい。そちらの事情は、大体判りましたので。とはいえ、お聞きしたい事があるのですが……お時間、頂けますか？」

「おお、許すか。うん、良い心がけだ。だが、僕にはお前と話している時間は――」

『受諾』

「刹那！？ お、お前また、この僕を無視して話を勝手に」

『館長、場所移動依頼。御主人之騒音、刹那、飽々』

「お、おま、お前えゝつつ！？」

使用人姿の刹那に軽くあしらわれた御主人。

言葉にならない激昂をして後、刹那へ殴り掛かろうとするのだが、頭を押さえつけられてはリーチの差で腕が彼女に届かない。

それでも必死に拳を振り回す、だからこそ微笑ましい御主人の姿に、リリアは何とか笑いを堪えつつ、閲覧スペースを指差した。

「で、では、あちらで宜しいでしょうか？」

『受諾』

「僕は良くない！」

攻撃を諦めた御主人が頭に乗せられた刹那の手を払った。

その直前でひらりと避けた刹那は、無表情ながら冷やかな露草の眼差しを御主人に向ける。

『御主人、我僂駄目。否、御主人別行動、刹那、推奨』

「なっ!? ぼ、僕に、この僕に、一人でこんな薄暗いところを行けというのか!? お前は僕の護衛でもあるのに!?」

悲鳴に近い声音で叫ぶ御主人の眼には、心細さと裏切られたという悲しみが浮かぶ。

これを認めたリリアは自分の提案が、ここまで彼を傷つけてしまったのかと思つたのだが、対する刹那はあくまで冷淡だった。

『肯。御主人、巢立之時。達者願』

「くっ! こ、この野郎!」

『否。刹那之身体、今、女性体。此之阿魔<sup>アマ</sup>、訂正要求』

「ああ、もう! すぐそうやって挙げ足を取るんだ、お前って奴は! いいよ、もう! 僕も行つてやるから!」

『不必要。御主人、即刻退去命令』

御主人の足がリリアの指した方向に一步踏み出せば、別方向を指差した刹那が言い捨てる。

これに動きを止めた御主人、髪を乱す要領で角の根元を搔くと、刹那に向かつて勢い良く指を突きつけた。

「ぐあーっ! もうっ、本当にっ、主人を主人と思わない奴だよな、お前は! 何でこの僕が、自分の自動人形に命令されて、いなくならなきゃならないんだ! いいか、意地でもついて行くぞ、僕は! 止めても無駄だからな!」

『……御勝手』

へつと笑つように刹那が吐き捨てたなら、チャコールグレイの尻尾を怒りにピンと立たせた御主人が、再度、閲覧スペースに向かつて歩き始めた。

このやり取りをただただ見ていたリリアは、突き放すような事を

言っていた割に、そんな御主人を見守る刹那の隣に移動した。

「……もしかして刹那さん、わざと、ですか？」

『御主人、取扱簡単、単純過。刹那、涙物也』

溜息をつくように首を軽く振った刹那は、リリアを見やると目の下を盛り上がらせた。

不自然ながら初めて見る笑みを象ったそれに、少しだけ目を見張ったリリアは、微笑み返すと「そうですか」と小さく頷き。

「あ、そうでした。刹那さんの御主人、あなたのお名前は？」

彼の従者ではない以上、御主人と呼ぶのも妙な気がして問うたなら、忌々しそうに振り返った彼が答えるより早く、隣にいた刹那がさらっと答えた。

『御主人之名、裸婦絵慰撫』

「は？」

「~~~~っ！！　せーっーなー？　何でお前、僕の名前に当てる字だけ、妙にいかかわしい響きにするんだよ！　館長、違うからな！　僕の名前はラフェイブ！　ドラグーンのラフェイブだ！」

『一族史上、最弱無能之御主人也』

「がああああああああああああああああああっつ  
！！……　もおやだ、コイツ」

どこまでいっても、御主人と呼ばれる割に刹那から敬われる気配のないラフェイブに、徐々に慣れて来たリリアは、そんな彼らの関係を微笑ましいと眺めていた。

## 美人と子どもと人形と その1

彼が目を覚ました時、目の前には白い世界が広がっていた。

「……にや？」

寝起きのあまり良くない彼は、見慣れない世界に埋もれつつ、首を傾げた。

何故、自分はこの世界にいるのか。

何故、自分は眠っていたのか。

何故、ここには――

「りりあ……」

呼べば思い出す、眠る直前までいた少女の像。

のったりとした動きで、うつぶせの身体を起こした彼は、赤と黒のコートに括りつけた楽器が起こす音に顔を顰めながら、辺りをゆっくり見渡した。

丸太を何本も重ねた、眠るためだけの部屋。

床を散らす淡い色彩の花々は、今も彼のギザギザしたシルバーグレイの髪から零れ落ちている。

そこまでは、眠る前と同じ光景だった。

唯一つ違うのは、眠る前にはなかった出入口が、今はあるということ。

「起きて、出て行っただのか。……起こせばいいものを」

互いに干渉し合うような関係ではないものの、何も言わずにいなくなられては面白くない。

不可解な紋様が描かれた布の奥で、じと目になった彼は、グラスグリーンの鱗手をそこに翳した。

「真実の視界。明瞭なる視野。今ひと時、解く識。広がる光。影は色濃く。淡くたゆとうは流れゆく時。戻らぬ日。還れぬ非。ただ視つめしは某<sup>それがし</sup>が両<sup>エルテ</sup>の目――開眼」

彼の言葉に合わせ、緩やかに明滅した紋様が、終わりと共に布か

ら消えた。

すると、しゅるり、軽い音を立てて布自体が落ちた。  
まるで役目を終えたかのように。

彼はそんな布を翳していた手に取ると、久々の肉眼にゆっくりと目を細めた。

閉ざすことで、初めて他と同じ視野を持つことが出来る彼の肉眼は、酷く不可思議な視点を持っていた。

両の目から見える範囲以外にも、自身の姿をあらゆる角度から視られる視点。

通常では感知できない魔力のうねりを捉える視点。

障害物の向こうを視られる視点。

そして――

「ああ。あの閲覧スペースにいるのか。りりあはあそこが好きだな……ん？ 他に誰がいるのか？」

目的の少女の像を捉えた彼は、その近くに別の像があるのを同時に視た。

途端、視点は少女の像の両目へと移り、彼女の前に在る像を彼の目に報せてくる。

「ドラグーンの子どもか。にゃー。これはからかいがありそうだ」

彼は子どもが好きだった。

特に、小さな子どもが。

何せ小さな子どもは、彼が好むからかいに引つ掛かりやすいのだ。そうと決まれば、早速ベッドの外へ、鈍色の鎧に覆われた足を出す。

と、ここにはいない声が頭の中に響いてきた。

「花竜ルファとドラグーン……似てはいますけど、やはり違う種族なのでしょうね。そういうえばエニグマ、まだ寝ているのでしょうか？」

「……………」

よく視える彼の目には、様々な場所を視通せる他に、相手の心を

否応なく視てしまう能力がある。

幼くして同族を全て失ってしまった彼は、この能力のお陰で、様々な危機を回避してきたものだが、同時にこの能力のせいで、知りたくもない心を幾つも視てきた。

表では笑顔を貼り付けておきながら、裏では悪し様に罵り、僻みに向かう心。

悲哀に同調し、同情を口にしながら、無様だと高笑いして見下す心。

しかし――。

「……にやあ。布を忘れていたな」

ベッドに置き忘れ掛けた布を手にした彼は、それを自身の目元に押し当てた。

それだけで、特別な言葉を必要とせず、彼の目が再び布に覆われた。

力を取り戻した体で、消えていた紋様が布に宿れば、常人と同じ視点となった彼は小さく息をつく。

「りりあは……本当にりりあなのだな」

他者が聞けば首を捻る眩き。

だが、今ここに居るのは彼だけ。

自身の眩きに少しだけ苦笑を零した彼は立ち上がると、心持ち早足で部屋を出て行った。

向かう場所は勿論、離れても彼を思う、少女の像の下。

\*\*\*\*\*

そもそも、ラフェイブがリアのいた閲覧スペースを目指したのは、彼の腹具合の問題であった。

刹那曰く『御主人之食意地、最悪』だそうで。

「あの、ラフェイブさん？ そんなに急いで食べなくても、良いのですよ？」

「ふあふいふおふゆう！ ふあふえふあふえふふおふいふいふあふえふえふおふあふあふいふお！！」

『……御主人、言語不明。刹那、明瞭切願』

サロン風の閲覧スペースへと招いたラフェイブは、リリアの食べかけのサンドイッチを見るなり、同じものを要求してきた。

何でも本を探している内に、とてつもなく腹が減ってきたのだという。

想像するだけで創造出来る魔道書<sup>リリア</sup>にとって、彼の要求を叶えるのは至極簡単なこと。

このため、リリアはすぐさま隣のテーブルに多量のサンドイッチを出した——までは良かったものの。

（さて、どうしましょう？ どのような世界の言語でも理解出来る魔道書<sup>グリモア</sup>とはいえ、発音が明確でなければ聞き取れないようですし）様々な世界の本で形成されているこの図書館には、いかなる言語でも翻訳される、とても便利な機能がついていた。

そして本体が魔道書<sup>グリモア</sup>であるリリアには、図書館よりもっと正確な翻訳機能が備わっている——らしい。

本人は普通に喋り、普通に聞いているため、あまり実感はない。

とはいえ、今のラフェイブ相手では、便利で正確な翻訳機能も全く意味を為さなかった。

リリアは食べることに一生懸命な彼から、そんな彼を無表情に冷たく見つめる刹那へ視線を移すと、元々座っていた椅子を引きつつ、立ったまま脇に控える彼女へ同席を促した。

「刹那さん、こちらに座りませんか？」

『館長之御心、感謝感激雨霰。併、刹那、嘔吐股故、同席不要』

「お、おうと、また？」

『亜……』

リリアが聞きなれない単語に戸惑えば、露草の瞳をぐるりと泳がせた刹那がコクリ頷いた。

『刹那之事。意味、自動之人形。非他者操作。動作、己之頭使用』  
「つまり、自分で考えて動く人形……ヒトではない、という事ですか？」

噛み砕き噛み砕き、自分の言葉でリリアが尋ねる。

これに頷いた刹那は、続いて首を横に傾けた。

『人？ 館長、人既知？』

「ええ、それはまあ……あら？ ということは刹那さん、わたしがヒトではないと知って？」

刹那が人型であるために、ヒトという種を口にしたリリアは、それが通じたことよりも、自身がヒトではないと察せられたことに驚いた。

全知全能の至宝とも称される魔道書が作り出した擬態——リリアの身体は、だからこそ、ヒトとはほぼ同じ構造をしているのだが、刹那にはこの違いが判るらしい。

問いかけに頷いた刹那は、リリアへ手だけで座るよう示すと、従う動きを見届けた後でもう一度頷いた。

『館長之構造、人酷似。併、館長之気配、非人。否、非有機物。刹那之気配、略同等。併、非自動人形』

「ええ、その通りです。尤も、ヒトではあつたのですが」

『……成程。刹那、納得。元人之館長故之飲食、受諾』

どうやら刹那は、飲食するリリアに疑問を抱いていたようだ。

言われて知った彼女の疑問に、ぎこちなく愛想笑いを返したなら、逡巡した様子の刹那がおもむろに白いエプロン脱ぎ始めた。

次いで、現れた紺色のワンピースの前ボタンを外していく。

「え……あの、刹那、さん？」

突然始まった脱衣の姿に、リリアがおろおろしても、刹那は我関せず。

自らを人形と言った通り、ヒトとは違う、つるつるした硬質な肌

を晒した刹那は、胸の間へ指を向けると、スイッチを押す動作で一点を押した。

するとそこを中心として、宙に描かれる複雑な円形の図式。

蒼く光るソレは、時計の秒針を彷彿とさせる動きで、外と内の円を逆方向に回していく。

「綺麗……」

リリアが覗く肌よりも図式に心を奪われたなら、これに気づいた刹那は近づき、彼女の視線が図式に合うよう屈んでみせた。

「此、王徒又之動力式。これ おーとまた有機物之心、同等。ただし但、源、非食物摂取。王徒又之源、御主人之魔力如何」

「ええと、要するに、刹那さんがこうして動いているのは、ラフェイブさんの魔力のお陰？」

「概、是。但、先述之通、御主人、一族史上最弱。併、刹那有能故、補助術具必要」  
おおむね

服を直しつつ、刹那が指差したのは、未だサンドイッチにがつつくラフェイブの姿。

先程対峙した時には気づかなかったが、白い角の前にある耳や首、腕等に、金を基調とした装飾品があった。

あれが刹那言うところの『補助術具』なのだろう。

（とはいえ、話題がわたしの飲食を経て、自分の動力源を明かすところまで来るとは、刹那さんは律儀な方なのですね）

突拍子の無さはあっても、会話を進んでしてくれるのはありがたかった。

多少聞き取りにくいところはあるものの、求めていた会話が成り立っていることに、リリアの顔が自然と綻ぶ。

と、そんなリリアを刹那が呼んだ。

『館長』

「はい——あ、エニグマ」

『絵似……？』

改めて刹那に向き直ろうとしたリリアは、その前に見知った姿を

彼女の後ろに見つけ、立ち上がった。

そしてそのまま駆け寄っては、赤と黒のコート前で止まり、

「おはようございます、エニグマ」

「おはようデス、りりあ。でも、次からは一緒に起こすデス」

「え……ええ、まあ、はい」

（一緒に起こすも何も、わたしはアレですっかり目が覚めてしまったのですが）

クロムイエローの頭に伸ばされる、グラスグリーンの手を受けたリリアは、曖昧な返事をして若干目を逸らすと、その先にいる二人を留め、エニグマへと視線を戻した。

「そうそう、エニグマ！ 実は今、図書館のお客様がいまして」「お客？」

まだ寝ぼけているのか、頭から頬へと撫でる手を伸ばしたエニグマが、のっそりした動きでリリアの後ろを見やった。

くすぐったい手には首を竦めつつも、されるがままのリリアは後ろを振り向き――

「ふぁんふおう、ふぁふい――ぶぁふあっ！？」

「ら、ラフェイブさん！？」

同じようにこちらを振り向いたラフェイブが、頬張っていたサンドイッチを噴き出したなら、リリアは慌ててそちらへ駆け寄っていた。

## 美人と子どもと人形と その2

一通りむせた後のラフェイブの反応は、珍妙に尽きる。

大急ぎで汚れた口元を拭い、床を片付けようと立ち上がったのは、反動で倒れた椅子に異様に驚く。

続いて意味なく両手をバタバタ上下に振った彼は、床と椅子を交互に見やると、はっとした顔で刹那を指差し、片付けを要求した。すかさずリリアが、自分の方が適任だと申し出れば、慌しく頼んで椅子の方へ移動。

途中、椅子の脚に足を引っ掛けては盛大にすっ転び、それでもめげずに立ち上がった彼は、椅子を起き上がらせると、その背にささっと隠れ出した。

全く隠れていないそこからラフェイブが覗くのは、ここに着たばかりのエニグマ。

（……どこかで見たような光景ですね？）

思い出すまでもなく、それは昨日、リリアがエニグマと初めて対峙した時、彼が取った格好であった。

（種族は違いますが、ドラゴンの頭を持つ方々の初対面の挨拶は、これが普通なのでしょうか？）

不思議な共通点を見つけ、リリアが小首を傾げたなら、ラフェイブが上擦った声で言った。

「か、かかかかかかかか館長！！」

「はい？」

椅子の陰でエニグマを見つめながら、何故自分が呼ばれるのか。それでもバタバタ手招く手に引かれ、ラフェイブの元へ近寄れば、一向にリリアを見ないで彼は言う。

「あ、あ、あの人、御名はっ！！？」

「……あの人？ 御名？……ああ、彼の名前が知りたいのですか？」

「……………！！」



飛ばされるだけだった刹那が地に落ちると同時に、何故か短い悲鳴を上げて倒れるラフェイブ。

リリアが小さくとも重い上半身を何とか起こしたなら、御主人と呼んだくせにラフェイブを後回し、エニグマと再び対峙した刹那が、棍棒の先を鋭く向けた。

『餌<sup>エニグマ</sup>爾愚魔……忌環<sup>いまわしき</sup>死鬼花竜目<sup>め</sup>。積年<sup>うづみ</sup>之恨味、今此处<sup>ではたして</sup>出果<sup>で</sup>死手<sup>はたして</sup>呉留<sup>くれる</sup>！！』

「せ、積年の恨み？ エニグマ、刹那さんに何を？」

何がどうなってこーなっているのかはさっぱりだが、昨日のプリマとの一件もある。

エニグマ自身、人をからかうのが好きだと豪語している以上、非は彼に在ると即行で判断したりリアは、躊躇わずに直球で問いかけた。

が、しかし。

「にゃー。りりあ、酷いデス。えにぐまはこの自動人形<sup>オートマタ</sup>に何かした憶えはない……というかお前さん、誰だ？」

「へ？」

目元を覆う布の下で、エニグマの眉辺りがぐぐつと寄った。

刹那に恨まれる心当たりが、本気で判らない様子を受け、それどころか刹那に見覚えがないという言葉を聞き、リリアはきょとんと瞬き数回。

（エニグマは刹那さん知らない？ ということは、刹那さんの人違い？……でも）

刹那は言っていた。『花竜<sup>ルファ</sup>』のエニグマ、と。

（花竜<sup>ルファ</sup>はエニグマ以外いないはずですし……ああ、ですが、刹那さんの世界では別の意味で——あら？ ちょっと待って下さい？ ということは、エニグマの生まれは刹那さんの世界？）

憶測が憶測を呼び、ちよつとした混乱をリリアに招く。

と、棍棒を下に降ろした刹那が、ギリツと歯を鳴らして剥いた。『フン、憶<sup>おぼえて</sup>得手無<sup>なくて</sup>久手、当然駄<sup>だ</sup>。昔之刹那<sup>と</sup>途今之刹那<sup>は</sup>羽、略<sup>ほぼ</sup>別人形。

併、其我何駄？　餌爾愚魔経之憎悪爾变化羽皆無！　否、更爾増加  
傾向！』

「にゃー。そんなこと言われても困るデス。理由が判らないと、対処の仕様がなないデス」

『問答無用！　御主人！！』

「ぎやはっ！！？」

「ラフェイブさん！？」

のんびりしたエニグマの返答に、棍棒を構えた刹那がもう一度ラフェイブを鋭く呼んだ。

途端に前回同様、今度はリアの腕の中で、ラフェイブの短い悲鳴が上がり、刹那の棍棒の先が光の刃を纏い始めた。

（刹那さんがラフェイブさんと呼ぶ度に、ラフェイブさんが悲鳴を上げて、刹那さんの棍棒が何かしらの力を得る……ということは、あの力の源はラフェイブさん？　刹那さんを動かしているのもラフェイブさんの魔力なら）

さすがに二度も同じ光景を前にすれば、自然とリアの中で結ばれていく、二つの事象の因果関係。

加え、リアの本体である魔道書が、ラフェイブの症状を勝手に詳しく補足していったなら、擬態である白い肌がさつと青褪めていった。

（ただでさえ、刹那さんを動かすのに必要な魔力を、補助術具でまかなっているラフェイブさん。それなのに、無理に引き出されてしまったては——彼の身体が持たない！？）

通常、自動人形には、主の魔力を思いのまま引き出す能力はないらしい。

それでも眼前に在る例外は、主を省みずにエニグマを倒す気満々となればリアが——この図書館の館長たる魔道書が、為すべきことは、唯一つ。

エニグマに向かい、突撃しようとする刹那へ、あらん限りの声で叫ぶ。

「刹那さん、ストップ！　というか、伏せ！！」

『駕<sup>がっ</sup>！！？』

リリアの声に呼応し、一瞬停止した刹那の身体が、床へ勢い良く叩きつけられた。

『館、長……？』

起き上がろうとしても、起き上がれない刹那の露草色の瞳が、信じられないとも言うように向けられ、リリアは申し訳なさから小さく頭を下げた。

「申し訳ありません。ですが、これ以上の魔力行使はお止めになつて下さい。でないとラフェイブさんが危険です」

『御主人……』

リリアは抱えたラフェイブの頭を刹那へ傾けてみせた。

度重なる魔力行使により、オーキッドの目が完全に回っている。

これを認めた刹那は、悔やむ素振りで顔を伏せると、

『此之程度之魔力行使不可、情無<sup>なさけない</sup>』

私怨に走った己を反省するでもなく、御主人を詰る刹那。

ラフェイブを抱えるリリアはちよつと酷いんじゃないかと思つてしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8510/>

---

クロエ図書館

2011年6月2日17時16分発行